

一般国道116号富永交差点改良関係発掘調査報告書

谷内 A 遺跡

2007

新潟県教育委員会

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

一般国道116号富永交差点改良関係発掘調査報告書

谷内 A 遺跡

2007

新潟県教育委員会

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

一般国道116号は柏崎市を起点とし、旧二島郡和島村、旧西蒲原郡吉田町など経由して新潟市にいたる中越地区の幹線道路です。社会・経済の発展に大きな役割を果たすとともに、沿線住民の通勤・通学・買物などの生活道路として重要な役割を果たしています。

本書は、国道116号の旧吉田町富永交差点改良において、歩道建設や水路付け替え工事に伴い平成16・17年度に発掘調査及び工事立会い調査を実施した「谷内A遺跡」の発掘調査報告書です。調査によって、古代の造構や土器が発見されました。これまではっきりしなかった旧西蒲原郡域における古代集落は、調査例の増加により序々に明らかになりつつありますが、本調査もその一端を担うものと考えています。

今回の報告が古代史を解明する研究資料として活用され、県民の皆様の埋蔵文化財の理解と認識を深める契機となれば幸いです。

最後に、発掘調査に際して多大なご協力とご援助をいただきました旧吉田町教育委員会ならびに地元の方々、また調査から報告書刊行に至るまで格別の配慮をいただいた国土交通省北陸地方整備局新潟国道事務所に対し、厚くお礼を申し上げます。

平成19年3月

新潟県教育委員会

教育長 武藤克己

例　　言

1. この報告書は燕市（旧西蒲原郡吉田町）吉田字谷内ほかに所在する谷内A遺跡の発掘調査記録である。
2. 発掘調査は、一般国道116号富永交差点改自事業に伴い国土交通省北陸地方整備局新潟国造事務所から新潟県が受託したものである。発掘調査は新潟県教育委員会（以下、県教委）が主体となり、平成16年度に（財）新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）が受託したものである。埋文事業団は、掘削作業等を（株）帆刈組に委託して実施した。また、平成16・17年度には工事や会い縁を実施した。
3. 整理作業及び報告書作成に係る作業は、平成16・17年度に埋文事業団が行った。
4. 出土遺物及び調査・整理作業に係る各種資料（含む観察データ）は、一括して県教委が保管・管理している。
5. 面積の併記は「谷内A」とし、出土地点・層位を併記した。
6. 本書の図中で示す方位は全て真北である。グリッド枕の打設は（株）帆刈組が行った。
7. 報告書掲載遺物の番号は種別にかかわりなくそれぞれ通し番号とし、本文及び概要表・図面図版・写真図版の番号は全て一致している。
8. 本文中の註は脚註とし、頁ごとに番号を付した。また、引用文献は著者及び発行年（西暦）を文中に〔 〕で示し、自然科学分野を除いて卷末に一括して掲載した。
9. 「第Ⅵ章　自然科学分析」はパリノ・セーベイ株式会社に委託した。なお、本書には再編集したものを掲載した。
10. 本書の編集は滝沢規朗が担当した。執筆分担は、以下のとおりである。

第Ⅰ章 1・2 A 1)・2) 河崎昭一、2 A 3)・2 B・2 C 滝沢規朗

第Ⅱ章 清田明子・齊藤 淳

第Ⅲ章 河崎昭一・滝沢規朗

第Ⅳ章 1・2 A・B 局津賢男、2 C 滝沢規朗

第Ⅴ章 1・2 B・3 滝沢規朗、2 A 荒川隆史

第Ⅵ章 1 滝沢規朗、2 荒川隆史

11. 調査報告については「新潟県埋蔵文化財調査事業団年報 平成17年度」等に概要報告したが、本書の記述をもって正式な報告とする。上記『年報』等と本書に齟齬がある点は、本書の記述をとるものとする。

12. 発掘調査から本書の作成に至るまで下記の方々から多人なご教示とご協力をいただいた。厚くお礼申し上げる
(五十音順　敬称略)

瀬田 憲之、小林 正史、布施 智則、松島 悅子

目 次

第Ⅰ章 序 説

| | |
|------------------|---|
| 1 調査に至る経緯 | 1 |
| 2 調査と整理作業 | 1 |
| A 調査 | 1 |
| 1) 試掘確認調査 | 1 |
| 2) 本発掘調査 | 2 |
| 3) 工事立会い調査 | 2 |
| B 整理 | 2 |
| C 調査・整理体制 | 3 |

第Ⅱ章 遺跡を取りまく環境

| | |
|---------------|---|
| 1 地理的環境 | 5 |
| 2 歴史的環境 | 5 |

第Ⅲ章 調査の概要

| | |
|-----------------|---|
| 1 グリッドの設定 | 8 |
| 2 層序 | 8 |

第Ⅳ章 遺構

| | |
|----------------|----|
| 1 概要 | 10 |
| 2 遺構各説 | 10 |
| A 調査B区 | 10 |
| B 調査A区 | 11 |
| C 調査C・E区 | 11 |

第Ⅴ章 遺物

| | |
|-------------------|----|
| 1 概要 | 12 |
| A 分類 | 12 |
| B 観察表 | 14 |
| C 出土状況・土器組成 | 14 |
| 1) 出土地点・層位 | 14 |
| 2) 土器組成 | 14 |
| 2 土器各説 | 16 |
| A 本発掘調査範囲 | 16 |
| B 工事立会い調査分 | 17 |
| 3 石製品 | 18 |

第VI章 谷内A遺跡の科学分析

| | |
|----------|----|
| 1 はじめに | 19 |
| 2 試 料 | 19 |
| 3 分析方法 | 20 |
| A 球藻分析 | 20 |
| B 花粉分析 | 20 |
| C 植物珪酸分析 | 20 |
| 4 結 果 | 21 |
| A 球藻分析 | 21 |
| B 花粉分析 | 23 |
| C 植物珪酸分析 | 24 |
| 5 考 察 | 25 |
| A 墓積環境 | 25 |
| B 森林植生 | 25 |
| C 周辺植生 | 26 |

第VII章 ま と め

| | |
|-----------------------|----|
| 1 遺物について | 31 |
| A 出土遺物の時期 | 31 |
| B 須恵器の胎土・ロクロの回転方向について | 33 |
| C 黒色土器の焼成について | 33 |
| D 煮炊具の形態について | 34 |
| E 煮炊具の使用痕跡について | 34 |
| 2 遺跡の動向について | 37 |
| 《要 約》 | 38 |
| 《引用・参考文献》 | 38 |
| 《観 察 表》 | 40 |

挿図目次

| | | | |
|---------------------------------|----|-------------------------|----|
| 第1図 試掘確認調査位置図 | 1 | 第11図 珪藻化石 | 28 |
| 第2図 谷内A遺跡周辺の自然堤防帯と周辺の古墳時代～古代の遺跡 | 7 | 第12図 花粉化石 | 29 |
| 第3図 グリッド設定及び調査範囲図 | 8 | 第13図 植物珪酸体 | 30 |
| 第4図 調査区内の層序 | 9 | 第14図 谷内A遺跡出土食器具の法量分布図 | 31 |
| 第5図 上器分類図 | 13 | 第15図 旧吉田町内における春日編年Ⅳ期の土器 | 32 |
| 第6図 S D11出土砥石 | 18 | 第16図 黒色土器の焼成方法 | 33 |
| 第7図 模式柱状図及び試料採取位置 | 19 | 第17図 黒色土器の黒斑 | 34 |
| 第8図 主要珪藻化石群集の層位分布 | 22 | 第18図 谷内A遺跡出土煮炊具の使用痕 | 35 |
| 第9図 主要珪藻化石群集の層位分布 | 23 | 第19図 小壺の容量分布 | 35 |
| 第10図 植物珪藻体群集の層位分布と珪化組織片の産状 | 24 | 第20図 鍋の容量分布 | 35 |

表 目 次

| | | | |
|---------------|----|--------------------|----|
| 第1表 土器組成比率 | 15 | 第5表 猿器の器種別胎土 | 33 |
| 第2表 珪藻分析結果 | 21 | 第6表 器種別にみたロクロの回転方向 | 33 |
| 第3表 花粉分析結果 | 22 | 第7表 黒色土器の黑色化・黒斑 | 33 |
| 第4表 植物珪酸体分析結果 | 23 | | |

図版目次

[図面図版]

- 図版1 遺跡全体図 C・D・E区遺構配置図
図版2 B区遺構配置図
図版3 A区遺構配置図 A区遺構個別図 (SC1、SC9、SC10、SD11、SD12)
図版4 土器1 (SC1、SC2)
図版5 土器2 (GD3、SD4、SC9、SC10、XI層、X層)
図版6 土器3 (IX層、Ⅹ層)
図版7 土器4 (C区II層、C区SD15・SD14、Ⅷ・X層),
図版8 土器5 (C区Ⅸ・X層)
図版9 土器6 (C区Ⅸ・X層、D区SE23・X層)

[写真図版]

- 図版10 遺跡全景、基本土層セクション、SC1検出、SC1セクション、基本土層セクション
図版11 SC9検出状況、SC10検出状況、SD11検出状況及びセクション、B区完掘、A区完掘、SC2遺物出土
状況、SC2・SX5・SX6セクション、SX5検出状況
図版12 SE7セクション、SD8セクション、B区遺構検出状況、C区完掘、C区完掘2、C区セクション、D区
遺構検出状況、F区西側
図版13 土器1 (A・B区SC1・SC2・SC9・SD3・SD4・SC10)
図版14 土器2 (A・B区XI層・X層・IX層・Ⅹ層、C区II層・Ⅸ・X層・SD14・SD15)
図版15 土器3 (C区Ⅸ・X層、D区SE23、D区Ⅸ・X層)、石製品 (A区)

第一章 序 説

1 調査に至る経緯

北陸地方整備局新潟国道工事事務所（以下、新潟国道）は、一般国道116号富水交差点改良工事計画地点に周知の遺跡である谷地A遺跡が存在したことから、平成14年10月21日新潟国道と新潟県教育委員会（以下、県教委）との調整会議に、その取り扱いについて事前協議した。その結果を受け、翌平成15年3月20日に新潟国道から県教委へ試掘確認調査の要望がだされた。

県教委から受託した財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団（以下、埋文事業団）は、平成15年9月24・25日の2日間で試掘確認調査を実施した。調査によって、交差点東側で遺構・遺物を検出し、360m²について本発掘調査が必要である旨を県教委に報告した。その後、平成16年2月16日の調整会議で一般国道116号富水交差点改良工事に伴い谷地A遺跡の本発掘調査を実施することと方針が決定され、平成16年4月12日から本発掘調査に着手した。

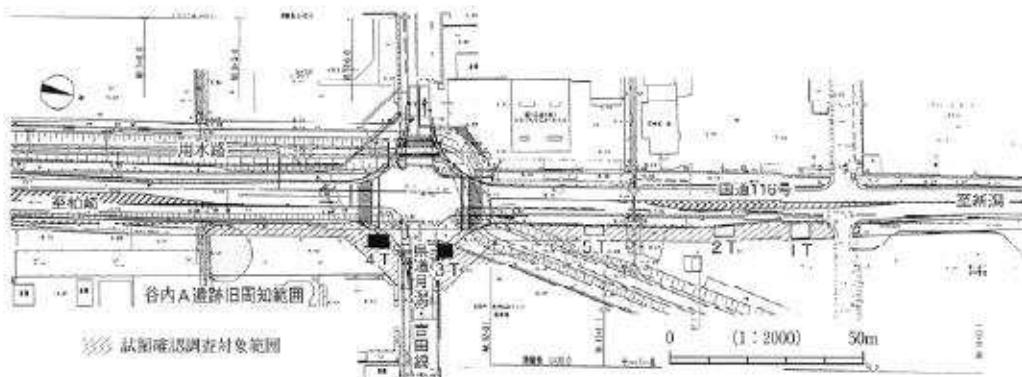
なお、工事に係る現道下の取り扱いについては、本発掘調査の結果や交通量等の検討の結果、工事立会い調査とすることとなった。工事立会い調査は、平成17年2月23日～3月10日（実質12日間）、同年5月27日・6月27日～7月5日（実質4日間）に実施した。調査面積は平成16年度が65m²、平成17年度は130m²である。

2 調査と整理作業

A 調 査

1) 試掘確認調査

試掘確認調査は、平成15年9月24日・25日に行った。対象範囲に任意に1～5トレンチを設定し、層序と遺構・遺物の確認を行った。3・4トレンチの盛土下で緑灰色もしくは灰褐色シルトに挟まれる形で黒褐色シルト層中に大量の炭化物（直徑0.5-1.0cm）が混入し、土師器・須恵器が出土した。1・2・5トレンチでも同様の黒褐色シルト層が検出されたが、遺物は出土せず、腐植物が多く混じる状況であった。遺構



第1図 試掘確認調査位置図

は、3・4トレンチで基礎コンクリートが存在したため、明瞭には検出できなかった。遺物は、1トレンチで緑灰色シルト層から近世陶磁器片1点とともに土師質土器片1点が出土地した。3トレンチでは、黒褐色シルト層から土師器片21点と須恵器片1点が出土した。4トレンチでは、同じ層から底部糸切りの土師器碗2点が出土している。以上の調査結果から交差点東側の3・4トレンチ周辺360m²について本発掘調査が必要であると判断し、その旨を県教委に報告した。なお4トレンチは、遺物は少なかったが、周知の谷内A遺跡に近いことから、本発掘調査必要範囲に含めた。

2) 本発掘調査

本発掘調査は平成16年4月12日～5月20日に行った。調査面積は360m²である。調査範囲は図版1に示したとおり、国道116号と直行する県道を挟み、南側にA区、北側にB区の2か所に分かれる。A区は国道116号の歩道に沿った幅約2m×長さ約50mの長方形の範囲と、その北東側に飛び出す三角形の範囲に分かれる。両地区とも土留めのため周間に欠板を打設したが、A区の二角形の範囲とB区の打設は新潟国道が行い、A区の長方形範囲は埋立事業者が行った。

表十除去はB区を4月12日に、A区を4月13日に行った。4月20日から両地区的包含層発掘を開始した。土層は粘土質で極めて軟弱な上、湧水が多くたため、調査範囲の周囲に人力により開渠を設けて排水した。遺物包含層は薄く5層に分かれていたため、全面において層位毎に掘り下げ、遺構・遺物を確認し、調査を進めた。B区は特に遺構・遺物が濃密であった。検出された遺構は土坑1基、溝3条、炭化物集中範囲4か所、焼土1か所、粘土ブロック1か所である。SD12を除きX層およびIX層で検出されたものであり、古代に位置付けられる。なお、XI層からもわずかに土師器が出土したが、遺構は検出されなかった。遺物包含層XI層の下部まで掘り下げ、遺構・遺物がないことを確認し、調査を終了した。

3) 工事立会い調査

工事立会い調査は平成16年度・17年度の2か年度にわたって実施した。以下では年度毎に記す。

【平成16年度】 2月9～10日・14～16日、2月23日～25日・3月7日～10日の12日間で、3地点の工事立会い調査を実施した。調査実施期間を基に、便宜上、北側から県道下をC1区（2月9～10日・14～16日）とC2区（3月7日～10日）に、最も南側をD区（2月23日～25日）とした（第3図）。調査面積はC1区が約34m²、C2区が20m²、D区が11m²、合計65m²である。調査は重機及び人力で包含層を掘削し、遺構が確認された場合は人力で掘削を行って必要な記録を作成した。調査深度は、工事工法から各地区とも現地表下約3.0～3.5mである。

なお、これ以外に調査A区とF区の境界C工事が実施されたが、遺構・遺物が検出されてないばかりか遺物包含層並びに相当層も存在していなかった。

【平成17年度】 5月27日、6月27日～7月5日の合計5日間で2地点の調査を実施した。調査実施期間を基に、南側のE区、国道116号線下をF区とした。調査面積はE区が13m²、調査区F区は117m²である。調査方法は平成16年度と同じである。

B 整 理

本発掘調査分の遺物量は、洗箱でおよそ5箱分であった。本遺跡の調査に引き続き5月末から阿賀野市（旧安田町）大坪遺跡の発掘調査があったため、洗い・註記・接合は、帆瀬組機材部で大坪遺跡の遺物と並

行して行った。本格的整理作業は、大坪遺跡の整理にのどがついた17年2月末から行った。

工事立会い調査分の遺物量は、浅箱で約5箱であった。整理作業は平成16年度は2月末から、平成17年度は2月上旬から本格的に行なった。

C 調査・整理体制

試掘確認調査・本発掘調査・工事立会い調査及び、各調査の整理体制は、以下のとおりである。

【試掘確認調査】 調査期間 平成15年9月24日・25日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越輔一）

調査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 黒井 幸一（事務局長）

管理 長谷川二三夫（総務課長）

庶務 高野 正司（総務課班長）

調査総括 藤巻 正信（調査課長）

指導 田海 義正（調査課本発掘調査課長代理）

調査担当 尾崎 高宏（調査課班長）

職員 田中 一穂（調査課嘱託員）

【本発掘調査】 調査期間 平成16年4月12日～5月12日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越輔一）

調査 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団（理事長 板屋越輔一）

総括 黒井 幸一（事務局長）

管理 長谷川二三夫（総務課長）

庶務 高野 正司（総務課班長）

調査総括 藤巻 正信（調査課長）

指導 田海 義正（調査課本発掘調査課長代理）

調査担当 荒川 隆史（調査課班長）

職員 高橋 知之・鳥津 賢男（調査課主任調査員）、清田 明子（調査課文化財調査員）

支援組織 株式会社帆刈組

現場代理人 伊藤 啓（埋蔵文化財調査課工事部主任）

調査員 鳴影 壮憲（埋蔵文化財調査課調査員）

【工事立会い調査】

・平成16年度 調査期間 平成17年2月9日～10日・14～16日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 板屋越輔一）

調査・管理・調査総括は本発掘調査と同じ

指導 山本 雄（調査課本発掘調査課長代理）

調査担当 滝沢 規朗（調査課班長）

職員 片岡 千恵（調査課嘱託員）

・平成17年度 ①調査期間 平成17年5月27日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）

調査指導 北村 亮（教育長文化行政課埋蔵文化財係長）

調査担当 春日 真実・石川 智紀（主任調査員）

②調査期間 平成17年6月27日～7月5日

調査主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）

調査 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 波多 俊二（事務局長）

管理 長谷川 三夫（総務課長）

庶務 長谷川 靖（総務課班長）

調査総括 藤巻 正信（調査課長）

指導 寺崎 裕助（調査課試掘確認調査課長代理）

調査担当 滝沢 規朗（調査課班長）

職員 斎藤 準（調査課嘱託員）

【整理作業】

・平成16年度 整理期間 平成17年2月28日～平成17年3月28日

主体・整理・管理・支援組織は平成16年度本発掘調査と同じ

調査総括 藤巻 正信（調査課長）

指導 田海 義正（調査課本発掘調査課長代理）

山本 肇（調査課試掘確認調査課長代理）

調査担当 荒川 降中・滝沢 規朗（調査課班長）

職員 烏津 賢男・河嶋 昭一（調査課主任調査員）、清田 明子（調査課文化財調査員）、
片岡 千恵（調査課嘱託員）

作業 小倉 膝子、廣野 游（調査課嘱託員）

・平成17年度 整理期間 平成18年1月30日～2月22日

主体 新潟県教育委員会（教育長 武藤 克己）

整理 財團法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

総括 波多 俊二（事務局長）

管理 長谷川 三夫（総務課長）

庶務 長谷川 靖（総務課班長）

調査総括 藤巻 正信（調査課長）

指導 寺崎 裕助（調査課試掘確認調査課長代理）

調査担当 滝沢 規朗（調査課班長）

職員 斎藤 準（調査課嘱託員）

作業 渡辺 容子（調査課嘱託員）

第Ⅱ章 遺跡を取りまく環境

1 地理的環境

谷内A遺跡が位置する旧吉田町は越後平野の東南部にあたる。現在、越後平野は北から北蒲原郡・南蒲原郡・東蒲原郡・西蒲原郡・中蒲原郡の5郡に区分されており、当地域は西蒲原郡に属する。合併により市町村名が大きく変更しているが、北は新潟市（旧巻町・旧岩室村・旧中之口村）、西は弥彦村、南及び東は燕市（旧分水町を含む）に接している。町内には新潟市と柏崎市を結ぶ国道116号と越後平野を横断する国道289号が通り、またJR越後線と弥彦線の分岐点となるなど、交通の要所となっている。

旧吉田町は現在の海岸線から約20km内陸に入った地点に位置する。北西に角田山（標高481.7m）、西に弥彦山（標高685.6m）とそれに連なる丘陵が南北に延びており、弥彦山と矢作丘陵（標高47m）の間には旧楊枝湯が存在していた。町内は西川、大通川、またはその支流の堆積作用によって作られた沖積平野が広がっている。旧河道は富永～米納津～庚塙新田～雀森間は河川が激しく蛇行しており、旧吉田町の東部の佐渡山ではかの川と合流し北の旧鎧湯に注ぎ込むと考えられている。西川沿いやその東を東北方向に向かって流れる大通川も含め、自然堤防帯が細長く見られ、旧河道両岸に自然堤防が築高地として南北に細くつらなり、あるいは島状に散在している。現在の集落はその自然堤防上に発達している。これらの自然堤防には急な勾配は見られず、およそ標高0.3～1m程度の微高地となっている。谷内A遺跡は、富永の自然堤防からわずかながら離れており平野の壇目に立地している。

現在では場整備および排水路工事が進み、かつては蛇行して多くの自然堤防帯を作り出していた西川や人通川も川筋を整えられている。周辺は美田が整えられ、新潟県の米作地帯の中核となしている。

2 歴史的環境

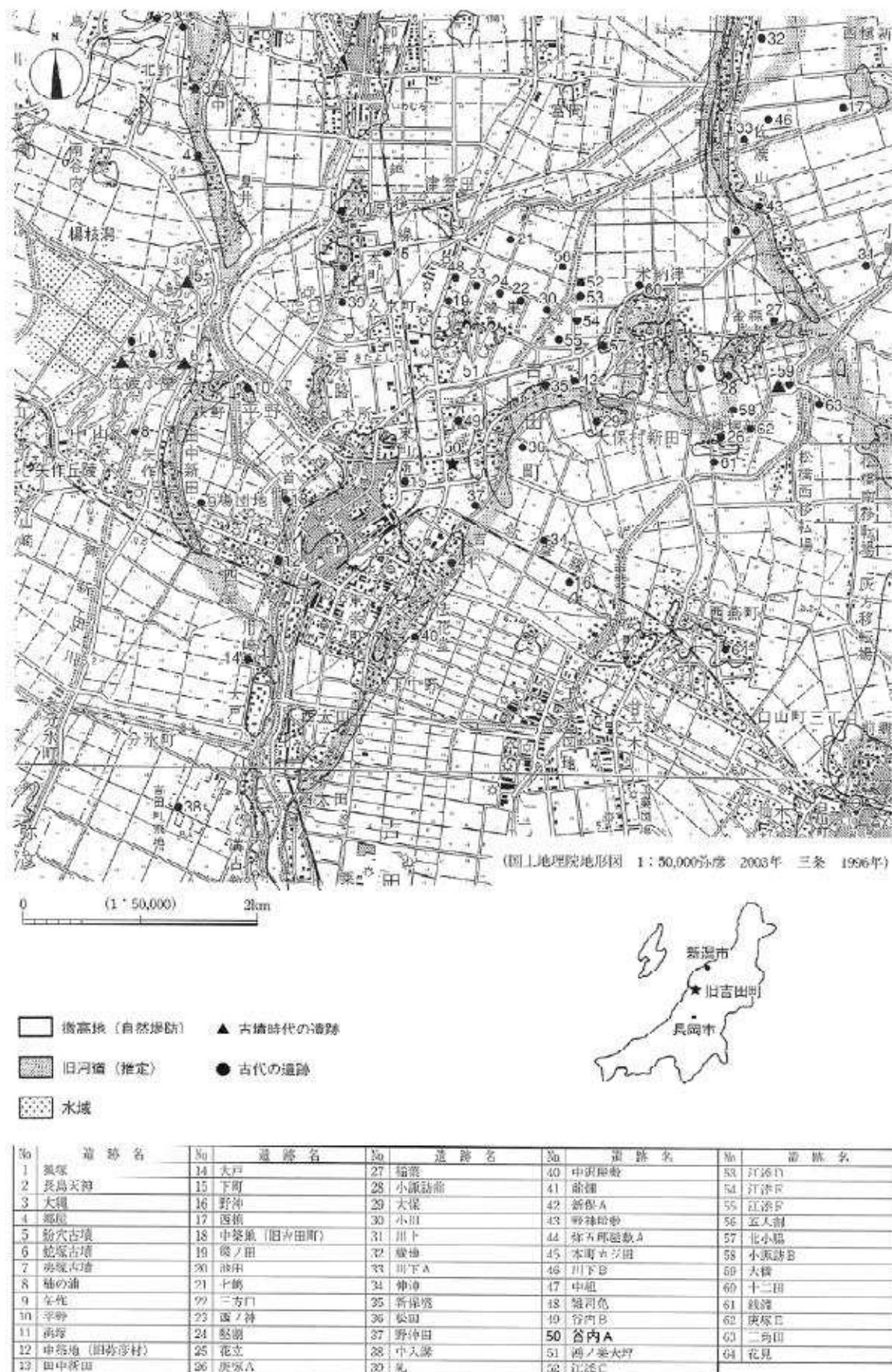
縄文時代は、角田山・弥彦山とそれに連なる丘陵に多くの遺跡が立地する。遺跡の分布からみて、山麓で生活をしていた人々が平野部に生活の場を求めるのは弥生時代になってからのことである。狭い谷底平野と緩傾斜の山裾を利用して水田耕作が開始されるのではないかと言われていた。しかし、近年の調査では状況が大きく変わりつつあり（寺崎2002a・2002b）、越後平野では沖積地で縄文遺跡の発見が相次いでいる。長岡市（旧二島郡二島町）根立遺跡〔中村ほか1988〕・長岡市（旧二島郡和島村）大武遺跡〔春日・寺崎1997〕・新発田市（旧北蒲原郡加治川村）青田遺跡〔荒川ほか2004〕がある。特に青田遺跡は紫雲寺湖（塙津潟）の範囲とされた地点の発掘調査で多量の縄文時代晩期の土器や石器のほかに、漆塗り木製品・トチ・クルミ等が出土している〔荒川ほか2004〕。旧吉田町が位置する西蒲原郡では新潟市（旧西蒲原郡巻町）豊原遺跡〔前山・小野1994〕・新潟市（旧西蒲原郡巻町）御井戸遺跡〔前山1994〕・新潟市（旧西蒲原郡味方村）排水機場遺跡〔高濱・卜部・寺崎1999〕がある。特筆すべきは排水機場遺跡で、地下約19～20mから縄文土器が発見されている。このことから越後平野では、現状の地形と縄文時代のそれが大きく異なることが明らかになっており、旧吉田町においても今後、縄文・弥生時代の遺跡が地下深くで発見される可能性がある。

谷内A遺跡周辺に見られる古墳時代～古代の遺跡の分布は、第2図のとおりである。古墳時代は、矢作丘陵の中腹に前方古墳(5)・船塚古墳(6)・夷塚古墳(7)といった古墳が築造されている。既に消失している古墳であり時期については明確ではない。ただし、夷塚古墳については隣接する夷塚遺跡から古墳時代後期の土器が出土していること、夷塚古墳は石室を持っていたと推測されることから〔瀧澤2000〕、後期に位置づけられる可能性がある。これらの古墳築造を支えていかがろう集落遺跡は、平野部で確認されている。1999年に米納津集落の東南で発掘調査がなされた大橋遺跡(59)〔布施ほか2002b〕からは古墳時代後期の遺物が比較的まとまって出土している。

旧吉田町周辺は古代において越中国の蒲原郡に属していた。702年になると越中国に属していた古志・頸城・魚沼・蒲原の四郡は越後国に編入されている。古代に入ると現状で確認されている遺跡数は飛躍的に増加している。近年の放水路工事や県営圃場整備事業等により確認されたものが多いが、町内は北部地域に多く、自然堤防からやや離れた地点での発見が目立つ。

谷内A遺跡周辺で発掘された遺跡には、江添C遺跡(52)〔布施ほか2000a・2002a〕・江添D遺跡(53)〔布施ほか2000b・2002a〕・江添E遺跡(54)〔布施ほか2000c・2003〕などがある。そこからは、掘立柱建物・井戸・畝状構造・樹列・土坑・溝・ピットが検出され、当時の集落の様子が確認できる。出土遺物では、江添C遺跡で確認された多量の墨書き土器や、江添E遺跡の石製丸軸が注目される。これらの遺跡は、地点により時期差があるものの8世紀～10世紀の遺跡である。谷内A遺跡周辺の古代の遺跡としては、松田遺跡(36)〔本間ほか2000〕・野沖田遺跡(37)〔本間2000ほか〕等がある。さらに、吉田町の中央部にある野沖遺跡(10)〔本間2000ほか〕では愛知産の灰釉陶器が出土していることや、吉田町の東部に位置する中組遺跡(47)〔川上1996, 本間2000〕からは京都産と推定される綠釉陶器、墨書き土器が出土していることから、ある程度の有力者の存在を推定することができる。

旧吉田町周辺における古代の蒲原郡と古志郡(三島郡)の係わり合いについては、春日真実氏の論文〔春日2002〕に詳しい。出土遺物では土師器長甕が注目される。二局郡の西山丘陵と三島郡の間を流れる島崎川周辺では、8世紀末から9世紀前半にかけて非ロクロ成形・ハケ調整の西古志型甕が主体となっている。この甕は古志郡でも東部の黒川・濱海川・東山丘陵では確認されていないが、蒲原郡の西川流域周辺では定量存在しており、郡を超えた分布が認められる。このような様相の甕は須恵器でも認められるようである。島崎川流域で須恵器の生産地は明らかになっていないが、西川流域では8～9世紀にかけて西古志産の須恵器が定量確認されている。古代において蒲原郡と古志郡に分かれた後も、両地域は相互の交流があったことが伺えよう。さらに、春日氏は島崎川流域には製鉄遺跡が多く、西川流域では須恵器窯は存在するものの、製鉄遺跡が少ないことをあげて、古志郡から蒲原郡へ鉄の供給等も行われたいた可能性があることを指摘している。本遺跡からも西古志型甕が出土しており、蒲原郡と古志郡西部において両地域は、島崎川流域と西川といった二つの河川を媒介として強い結びつきがあったことが推測される。



第2図 谷内A遺跡周辺の自然堤防と周辺の古墳時代～古代の遺跡（長谷川 2000を改編）

第Ⅲ章 調査の概要

1 グリッドの設定

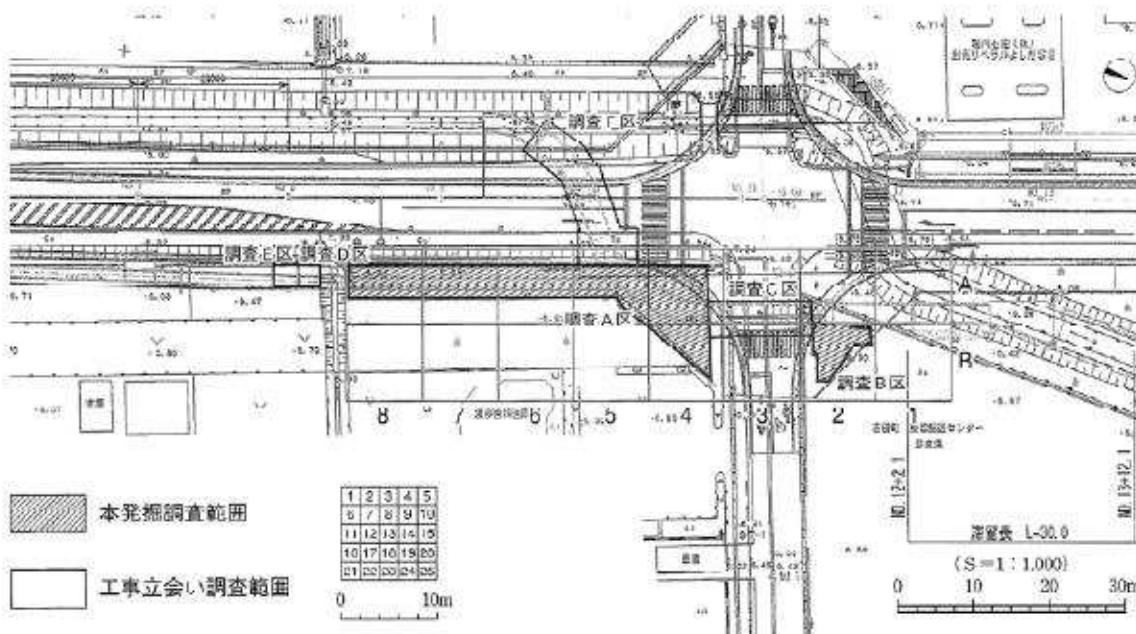
本発掘調査範囲内のグリッド設定（第3図）は、工事予定地内の杭2点を基準に行った。南側の杭T23（世界測地系X:187980.942, Y:34040.899）と、北側のT24（世界測地系X:188032.023, Y:34035.403）を結んだラインを基準Xとし、T23で直交するラインをY軸とし、遺跡全体をカバーできるようにした。X軸は真北に6度32分8秒西偏している。グリッドは大小の2種類を設定した。大グリッドは10m四方を単位とし、小グリッドは大グリッドを2m四方に25分割したものである。大グリッドは南北方向を算用数字で、東西方向をアルファベットとし、両者の組み合わせで「1A」「2B」などとした。また、小グリッドは1～25の算用数字で示し、南隅を1、北隅を25とした。

工事立会い調査分は、遺構・遺物が検出されたC・D・F区で任意に小グリッド（ $2 \times 2\text{ m}$ ）を設定した（図版1）。調査C・D区は北西隅から1として、北東隅にむけて順次番号を付し、調査F区は北東隅から1として南東隅にむけて順次番号を付した。なお、遺構・遺物が検出されなかったE区では小グリッドを設定していない。

2 層序

調査範囲は狭小であるが、各地点における堆積状況は微妙に異なる。本発掘調査範囲ではA区で2か所、B区で1か所、工事立会い調査範囲ではC区で2か所、D区では1か所で基本層序を確認した（第4図）。

本発掘調査範囲では盛土を除き、I～XIII層に分層した。I～Ⅲ層は黄灰色ないし灰色のシルト層で30

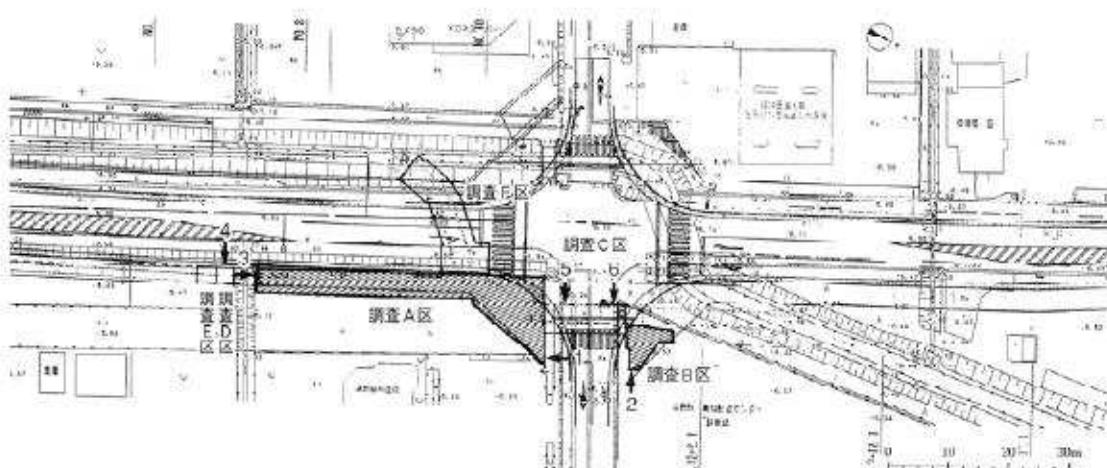
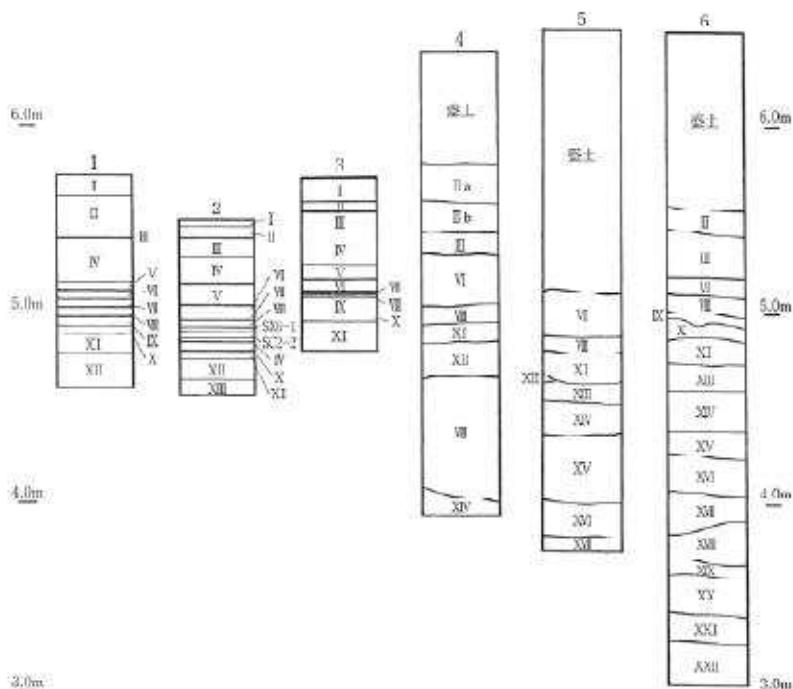


第3図 グリッド設定及び調査範囲図

cm前後堆積する。IV層は褐色の腐植土を多量に含む灰色シルト層、V層は灰色シルト、VI層は暗灰黄色シルト層で腐植土を少量含む。VII層は暗灰黄色粘土、VIII層は褐灰色粘土層、IX層は灰色粘土層、X層はオリーブ黒色粘土層、XI層は灰色粘土層、XII層は灰色粘土層に細砂を含む。XIII層は腐植土を少量含む灰色シルト層である。遺物包含層はVII～XI層である。

上事立会い調査ではC区とD区で若干土層堆積状況が異なる。C区では本発掘調査の基本層序と対応するようにI～XXII層に分層した。II層は灰褐色粘土層、III層は黄褐色粘土層(酸化)、VI層は暗青灰色粘土層、VII層は黒褐色粘土層、IX層は青灰色粘土層、X層は黒褐色粘土層、XI層は青灰色シルト層、XIII層は暗青灰色シルト層、XIV層は青灰色砂層、XV層は青灰色シルト層、XVI層は茶褐色混じりの青灰色シルト層、XVII層は暗青灰色シルト層、XVIII層は青灰色砂層、XIX層は青灰色シルト層、XX層は茶褐色混じりの青灰色シルト層、XXI層は青灰色砂層、XXII層は茶褐色混じりの青灰色シルト層である。遺物包含層はII・VII・X層である。

D区ではI～IX層に分層した。IIa層は暗灰褐色粘質土層、IIb層は灰褐色土層、III層は黄褐色粘土層(酸化進む)、V層は灰褐色粘土層、VII層は黒褐色粘土層、XI層は灰褐色粘土層、XII層は灰褐色シルト層、XIII層は黄褐色シルト層、XIV層は暗青灰色砂層である。遺物包含層はVII層である。



第4図 調査区内の層序

第IV章 遺構

1 概要

今回の調査で谷内A遺跡から検出された遺構は、土坑(SK)1基、溝(SD)7条、炭化物集中範囲(SC)5か所、井戸(SE)1基、柱穴(Pit)7基、性格不明遺構(SX)2基である。調査範囲が狭小なことから遺構全体が確認できたものは少なく、ほとんどが調査範囲外へと続いている。

本発掘調査範囲では、調査A区で溝2条、炭化物集中範囲3か所が検出されたが、全ての遺構が調査区外へと続き、遺構の全体像は確認できなかった。遺構確認面は一定せず、SD11はIX層、SD12はVI層、SC1はIX層上面、SC9はXI層上面、SC10はX層上面である。調査B区では土坑1基、溝2条、炭化物集中範囲1か所、性格不明遺構2基(燒土1、粘土ブロック1)が検出された。後世の改変により確認された当時の生活面は更に限定されるが、上記の遺構が重複して検出されている。遺構確認面は調査A区と同様に複数面に及び、SD3・SD8・SK7はX層、SC2はIX層上面、SX6はIX層である。

工事立会い調査分では、C区で溝3条、柱穴7基、D区で井戸1基、炭化物集中範囲1か所が検出された。C区の溝は約3mの間隔で、おおむね東西方向に平行して構築されており、溝間に柱穴が検出されていることから、据立柱建物に伴う雨落ち溝の可能性がある。遺構確認面はXI層である。なお、本発掘調査範囲・工事立会範囲における遺構確認面の整合性については、明確にしえなかった。

2 遺構各説

A 調査B区

調査範囲は極めて狭いものの、遺構が集中して検出された。遺構確認面は複数層に及ぶ。

SC2(図版2-11) 1A22、2B2・3・7・8・9・12・13グリッドと広範囲に分布する。遺構確認面はIX層である。長径2.2m、短径0.9mだが擾乱や矢板に切られる。SD3の廃絶後に形成されており、SX6・SK7を切る。SC2の1層と2層の間にはSX5を挟む。5mm~10mm程度の炭が集中し、炭の混じった泥が広がる。土師器、須恵器が多数出土したが、とくに須恵器が多い。

SD3(図版2) 2A21・22、2B1・2グリッドに位置する。遺構確認面はX層で、長径2.6m、短径0.7m、深さ0.3mである。南東から北西に伸びており調査区外に続く。1層は基本層序のIX層が落ち込み、2層はオリーブ黒色の粘質土が堆積する。1・2層共に炭化物が混じる。土師器、須恵器が出土した。

SX5(図版2-11) 2B8グリッドに位置する焼土範囲である。SC2を調査中、SC2の1層と2層の間から検出した。遺構確認面はIX層である。長径約1.2m、短径約0.7mである。覆土には炭と焼土の他に砂質土が含まれており、火を消すために被せられた土だと思われる。土師器が出土した。

SX6(図版2-11) 2B7・8グリッドに位置する粘土ブロックである。長径3.0m、短径2.6mだが、調査区外に続く。遺構確認面はIX層でSC2、SX5、SD8を切る。覆土には焼土とブロック状の粘土が混じる。粘性、しまりともに弱いことが特徴である。土師器が出土した。

SK7(図版2-12) 2B2グリッドに位置する。長径0.8m、短径0.5m、深さ18cmである。遺構確認

面はXI層である。上面にSC2の落ち込んだ炭化層がある。SD3との関連が何えるか切り合はない。土師器、須恵器が出土した。

SD8 (図版3・12) 2B2グリッドに位置する。長径1.8m、短径0.3m、深さ7cmである。おおむね南北方向に伸びる。南北共に攪乱や矢板に切られる。遺構確認面はX層である。覆土には炭化物を多量に含む。土師器、須恵器が出土した。

B 調査A区

散在的に遺構が検出されている。遺構確認面は調査B区と同様に、複数層に及ぶ。

SC1 (図版3・10) 4A11・16・21グリッドに位置する。IX層上面で検出した。検出は長径3.1m、短径1.2mと東西に細長い長楕円形を呈し、北側で調査区外に伸びる。径4mmほどの大きさの炭が集中し、土師器・須恵器の他、炭化物の付着した石が出土した。

SC9 (図版3・11) 8A6・7グリッドに位置し、長径2.5m、短径1.5mと不整楕円形を呈し、東側で調査区外に伸びる。XI層上面で検出しており、基本層序のX層に対応する。炭化物を非常に多く含む。土師器が出土した。

SC10 (図版3・11) 8A4・9グリッドに位置し、長径2m、短径1.7mである。南側・東側は更に調査区外に伸びる。XI層上面で検出しており、基本層序のX層に対応する。黒褐色粘土質で炭化物を非常に多く含む。SD11に切られる。土師器、須恵器が出土した。

SD11 (図版3・11) 8A4グリッドに位置する。長径1.6m、短径0.4m、深さ12cmだが、調査区外に続くことが予想される。おおむね南北方向に伸びる。遺構確認面はX層で、覆土はIX層の落ち込みであり炭化物の量が多い。SC10を切る。土師器、須恵器、石製品が出土した。

SD12 (図版3) 5A4・9グリッドに位置する。長径2.6m、短径1.3m、深さ36cm、東西方向は調査区外に伸びる。遺構確認面はVI層で、覆土は灰色味を帯びた土がレンズ状に堆積するのが特徴である。上の層から掘り込んでいるが3層から土師器が出土したため、構築時期は不明である。

C 調査C・E区

C区では溝・十坑が、E区では井戸と性格不明の落ち込みがある。遺構確認面はいずれもXI層である。

SD13-15 (図版1・12) C区で検出した。SD13は3グリッド、SD14・15はおよそ1~6グリッドに位置する。いずれも南東から北西方向に伸び、幅は約40cmを基本とするが、最も北東側のSD13のみ若干狭く、幅30cm程度である。深さは遺構確認面から約10~15cmである。覆土は単層で、基本層序のVII層に近い。遺物は全ての溝から検出されているが、残存率が高い個体はSD14・15に限られる(図版7)。

Pit16~22 (図版1・12) C区で検出した。1~6グリッドに集中する。いずれも竈は単層で、基本層序のVII層に近い。これらは全てSD14とSD15の間に位置する。遺物は土師器の細片が出土しているが、図化に耐えうるものは確認されなかった。

SE23 (図版1・12) E区4クリッドで1基を検出した。径約60cmで、深さは遺構確認面下約60cmである。他の遺構に比して深いことから、井戸とした。覆土は4層に区分したが、このうち3層から略完形の土師器杯が出土している(図版9)。

SC24 (図版1・12) E区2・4グリッドで1基検出した。径100cm程の節間に炭化物が集中する範囲があり、厚さ5cm程度堆積していた。遺物は検出されなかった。

第V章 遺物

1 概要

谷内A遺跡の調査で出土した遺物には、土師器・須恵器・黑色土器・石製品がある。出土量は整理箱(54×35cm、深さ10cm)で約10箱に及ぶ。出土遺物は形態・組成から【春日2000】のVI期を中心とした時期で、9世紀中葉・後葉頃が主体と考える。以下では、土器の分類を行ったのち、出土状況・組成比率について、概要を記す。

A 分類

土器の種類(須恵器・土師器・黑色土器)・器形により分類したのち、法量等により細分した。

1) 食膳具

須恵器無台杯：高台を持たないもの。口径12~13cm前後のものをⅠ類、口径14cm前後のものをⅡ類とした。

須恵器有台杯：高台を持つもの。底部は残存していないが、口縁部の形態から判断した。

土師器無台椀：高台を持たないもの。口径12~13cm前後のものをⅠ類、口径14~16cm前後のものをⅡ類とした。

黒色土器無台椀：高台を持たないもの。法量による細分は、土師器無台椀と同じ。

黒色土器有台椀：高台を持つもの。底部のみ出土しており、口縁部の形態は不明である。

2) 貯蔵具

須恵器に限られ、出土量は少ない。口縁部が長い長甕、広口で法量が大きな甕、胴部の張り出しが特に強い横瓶がある。出土量が少ないとから、それぞれの細分は行っていない。

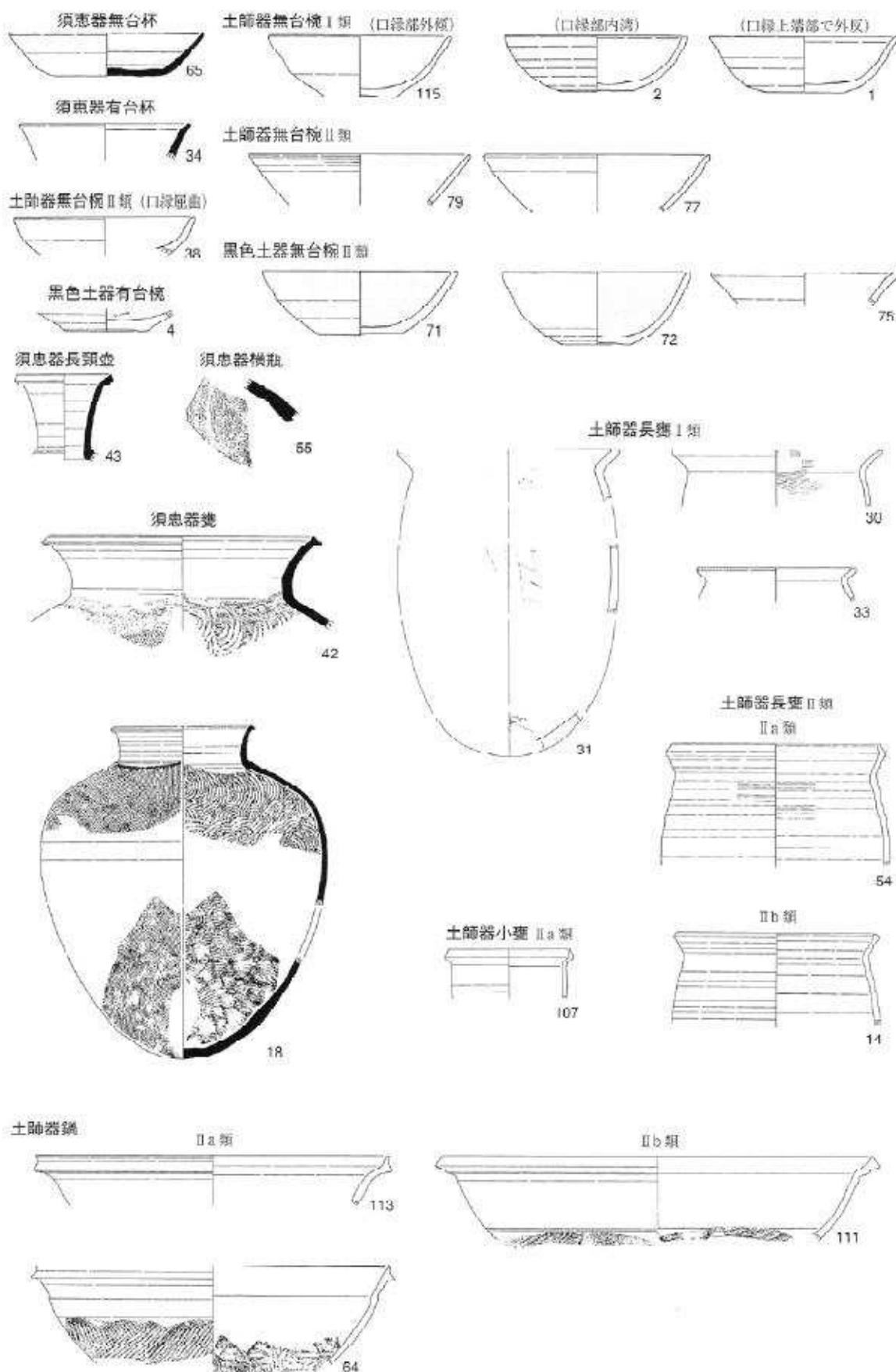
3) 煮炊具

器高よりも口径が小さいものを甕、器高よりも口径が大きなものを鍋とした。甕はさらに、小型で平底のものを小甕、大型で丸底のものを長甕とした。出土量は少ないので、製作技法・口縁部形態等で細分した。

長甕：口縁部がくの字に外傾して端部が器壁程度の厚さを有し、ハケ調整されたものをⅠ類、ロクロナデ・カキメ・タタキなど須恵器の技法を用いるものをⅡ類とした。後者は更に、口縁端部の形態で細分が可能で、端部上端が大きくつまみ上げられたもの(a類)と、そうでないもの(b類)に区分される。

小甕：細分の方法は長甕と同じ。ただし、小甕ではⅠ類は確認できない。

鍋：細分の方法は長甕と同じ。ただし、鍋ではⅠ類は確認できない。



第5図 土器分類図

B 観察表

1) 胎 土

須恵器：【春日2003a】を参考に、以下のようにした。

A類 素地は砂質が強い。混入物の少ない精白な胎土のものが多いが、1mm以下の白色粒子を多量に含むものもある。生産地は佐渡小泊窯群産の可能性が高い。

B類 上記以外のものを一括した。

土師器・黒色土器：混和材から分類した。

1類 石英・雲母・長石のはかに粘土粒を含むもの。

2類 石英・雲母・長石を含む点では1類と同様であるが、粘土粒を含まないものである。

2) 製作技法・焼成方法

製作技法は須恵器・土師器・黒色土器を対象に、ロクロの回転方向を観察した。また、焼成方法については黒色土器についてのみ観察した。

3) 使用痕跡

土器焼成後の使用痕跡について、煮炊具のみ観察した。詳細については第Ⅴ章で記すが、内面の黒色付着物をコケ、外面の黒色付着物はスス等として第18図のように図示した。

C 出土状況・土器組成

1) 出土地点・層位

【本発掘調査範囲】(図版4~6-1~54)

本発掘調査における遺物出土層位は、下位からXI・X・IX・VII・VI層である。以下、層位毎に概観する。XI層では4Aグリッド及び、6Aグリッドを中心に非ロクロ成形の土師器壺がわずかに出土したのみである。X層では造構の分布と重なるように2B・4A・6A・8Aグリッドで多く出土した。食膳貝が約7割を占め、土師器無台椀が圧倒的に多いものの、須恵器杯も約8%含まれる。

IX層もX層とはほぼ同じ範囲から最も多くの土器が出土した。食膳貝が最も多いが、須恵器貯蔵具、土師器煮炊具も定量認められる。

VII層では2B・4Aグリッドを中心に遺物が出土したが、8Aグリッドでは認められなくなる。V層もVII層とほぼ同じ範囲から滑物が出上したが、その量はわずかである。須恵器が確認されない特徴はV層と共通する。V層の遺物がV層にも紛れ込んだ可能性が高いと考える。以上から、X・IX層とV・VII層とでは、須恵器が出土しなくなるという変化が認められる。

【工事立会い調査分】(図版7~9-55~118)

工事立会い調査分における遺物出土層位は、上層からII層・V層・X層である。ただし、II層はC区でのみ確認され、E区では道路工事等に伴い削平されたと思われ、残存していなかった。また、C区ではX層を挟んでV層とX層に区分できる拠点もあったが、連続しており分層が困難であった。V層とX層の区分が不明瞭な点はE・F区も同様である。

第1表 土器組成比率

(1) 各地A遺跡全体

| 大別 | 種別 | 器種 | 口縁部 残存率/36 | 破片数 | 比率 (残存率) | 比率 (破片数) |
|-----|------|----|---------------|-----|-------------|-------------|
| 食膳具 | 土師器 | 杯 | 873 | 397 | 67.3 | 72.1 |
| | 黑色土器 | 碗 | 75 | 22 | 38 | 4.0 |
| | 須恵器 | 杯 | 45 | 15 | 3.5 | 2.7 |
| 煮沸具 | 土師器 | 甕 | 220 | 90 | 10.9 | 16.4 |
| | 土師器 | 小甕 | | | | |
| | 土師器 | 鍋 | 40 | 19 | 3.1 | 2.5 |
| 貯蔵具 | 須恵器 | 壺 | 5 | 1 | 0.4 | 0.2 |
| | 須恵器 | 壺 | 39 | 5 | 3.0 | 0.9 |
| | 須恵器 | ? | 1 | 1 | 0.1 | 0.2 |
| 合計 | | | 1298 | 550 | 100.0 | 100.0 |

(3) 本発掘調査範囲(A-D区)層位別

Ⅰ層

| 大別 | 種別 | 器種 | 口縁部 残存率/36 | 破片数 | 比率 (残存率) | 比率 (破片数) |
|-----|------|----|---------------|-----|-------------|-------------|
| 食膳具 | 土師器 | 杯 | 13 | 17 | 76.5 | 94.4 |
| | 黑色土器 | 碗 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| | 須恵器 | 杯 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 煮沸具 | 土師器 | 甕 | 4 | 1 | 23.5 | 5.6 |
| | 土師器 | 小甕 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| | 土師器 | 鍋 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 貯蔵具 | 須恵器 | 壺 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| | 須恵器 | 壺 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 合計 | | | 17 | 18 | 100.0 | 100.0 |

Ⅱ層

| 大別 | 種別 | 器種 | 口縁部 残存率/36 | 破片数 | 比率 (残存率) | 比率 (破片数) |
|-----|------|----|---------------|-----|-------------|-------------|
| 食膳具 | 土師器 | 杯 | 86 | 91 | 47.3 | 79.1 |
| | 黒色土器 | 碗 | 8 | 2 | 4.4 | 1.7 |
| | 須恵器 | 杯 | 4 | 1 | 2.2 | 0.9 |
| 煮沸具 | 土師器 | 甕 | 35 | 9 | 19.2 | 7.8 |
| | 土師器 | 小甕 | 12 | 8 | 6.6 | 7.0 |
| | 土師器 | 鍋 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 貯蔵具 | 須恵器 | 壺 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| | 須恵器 | 壺 | 37 | 4 | 20.3 | 3.5 |
| 合計 | | | 182 | 115 | 100.0 | 100.0 |

Ⅲ層

| 大別 | 種別 | 器種 | 口縁部 残存率/36 | 破片数 | 比率 (残存率) | 比率 (破片数) |
|-----|------|----|---------------|-----|-------------|-------------|
| 食膳具 | 土師器 | 杯 | 2 | 1 | 9.5 | 16.7 |
| | 黒色土器 | 碗 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| | 須恵器 | 杯 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 煮沸具 | 土師器 | 甕 | 19 | 5 | 90.5 | 83.3 |
| | 土師器 | 小甕 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| | 土師器 | 鍋 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 貯蔵具 | 須恵器 | 壺 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| | 須恵器 | 壺 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 合計 | | | 21 | 6 | 100.0 | 100.0 |

(4) 工事立会い地区別組成

C区

| 大別 | 種別 | 器種 | 口縁部 残存率/36 | 破片数 | 比率 (残存率) | 比率 (破片数) |
|-----|------|----|---------------|-----|-------------|-------------|
| 食膳具 | 土師器 | 杯 | 639 | 242 | 69.3 | 66.3 |
| | 黒色土器 | 碗 | 67 | 20 | 7.3 | 5.5 |
| | 須恵器 | 杯 | 35 | 13 | 3.8 | 3.6 |
| 煮沸具 | 土師器 | 甕 | 137 | 70 | 14.0 | 10.2 |
| | 土師器 | 鍋 | 37 | 18 | 4.0 | 4.9 |
| 貯蔵具 | 須恵器 | 壺 | 5 | 1 | 0.5 | 0.3 |
| | 須恵器 | 壺 | 2 | 1 | 0.2 | 0.3 |
| 合計 | | | 922 | 365 | 100.0 | 100.1 |

(2) 本発掘調査範囲(A-B区全体)

| 大別 | 種別 | 器種 | 口縁部 残存率/36 | 破片数 | 比率 (残存率) | 比率 (破片数) |
|-----|------|----|---------------|-----|-------------|-------------|
| 食膳具 | 土師器 | 杯 | 234 | 155 | 58.9 | 78.7 |
| | 黒色土器 | 碗 | 8 | 2 | 2.0 | 1.0 |
| | 須恵器 | 杯 | 10 | 2 | 2.5 | 1.0 |
| 煮沸具 | 土師器 | 甕 | 74 | 20 | 18.6 | 10.2 |
| | 土師器 | 小甕 | 30 | 12 | 7.6 | 6.1 |
| | 土師器 | 鍋 | 3 | 1 | 0.8 | 0.5 |
| 貯蔵具 | 須恵器 | 壺 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| | 須恵器 | 壺 | 37 | 4 | 9.3 | 2.0 |
| 合計 | | | 394 | 197 | 100.0 | 100.0 |

粗層

| 大別 | 種別 | 器種 | 口縁部 残存率/36 | 破片数 | 比率 (残存率) | 比率 (破片数) |
|-----|------|----|---------------|-----|-------------|-------------|
| 食膳具 | 土師器 | 杯 | 81 | 27 | 82.7 | 84.4 |
| | 黒色土器 | 碗 | 67 | 20 | 7.3 | 5.5 |
| | 須恵器 | 杯 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 煮沸具 | 土師器 | 甕 | 5 | 2 | 5.1 | 6.3 |
| | 土師器 | 小甕 | 9 | 2 | 9.2 | 6.3 |
| | 土師器 | 鍋 | 3 | 1 | 3.1 | 3.1 |
| 貯蔵具 | 須恵器 | 壺 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| | 須恵器 | 壺 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 合計 | | | 165 | 52 | 107.4 | 105.6 |

X層

| 大別 | 種別 | 器種 | 口縁部 残存率/36 | 破片数 | 比率 (残存率) | 比率 (破片数) |
|-----|------|----|---------------|-----|-------------|-------------|
| 食膳具 | 土師器 | 杯 | 52 | 19 | 65.8 | 73.1 |
| | 黒色土器 | 碗 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| | 須恵器 | 杯 | 6 | 1 | 7.6 | 3.8 |
| 煮沸具 | 土師器 | 甕 | 11 | 3 | 13.9 | 11.6 |
| | 土師器 | 小甕 | 9 | 2 | 11.4 | 7.7 |
| | 土師器 | 鍋 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 貯蔵具 | 須恵器 | 壺 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| | 須恵器 | 壺 | 0 | 0 | 0.0 | 0.0 |
| 合計 | | | 79 | 26 | 100.0 | 100.0 |

D区

| 大別 | 種別 | 器種 | 口縁部 残存率/36 | 破片数 | 比率 (残存率) | 比率 (破片数) |
|-----|------|----|---------------|-----|-------------|-------------|
| 食膳具 | 土師器 | 杯 | 22 | 2 | 76.6 | 40.0 |
| | 黒色土器 | 碗 | 6 | 3 | 21.4 | 60.0 |
| | 須恵器 | 杯 | | | | |
| 煮沸具 | 土師器 | 甕 | | | | |
| | 土師器 | 鍋 | | | | |
| | 須恵器 | 壺 | | | | |
| 貯蔵具 | 須恵器 | 壺 | | | | |
| | 須恵器 | 壺 | | | | |
| 合計 | | | 28 | 5 | 100.0 | 100.0 |

出土遺物はC区でも1~9グリッドで多く、10~15グリッドでは少ない。また、南側のD区、西側のF区に向かうに従い、遺物量は減少する。上記の本発掘調査の結果から見ても、遺跡の中心はA~C区であり、南側・西側に向うに従って、遺物量が少なくなる傾向にある。

2) 土器組成

土器には須恵器無台杯・長頸壺・甕・横瓶、土師器無台椀・長甕・小甕・鍋、黒色土器無台椀がある。

機能別の比率は口縁部残存率計測法によって、食膳具76.5%、煮炊具20.0%、貯蔵具3.5%である。食膳具が圧倒的に多い(第1表)。

食膳具の組成は、同じく口縁部残存率計測法で、須恵器無台杯3.5%、黒色土器無台椀5.8%、土師器無台椀が67.2%と圧倒的に多い。須恵器無台杯は胎土A群(佐渡小泊窯跡群)に限られ、B群は確認できなかつた。地点・層位毎の土器組成比率は「2 土器各説」で記す。

2 土器各説

A 本発掘調査範囲(A~D区 図版4~6 1~54)

出土層位毎ではⅦ層・Ⅸ層が多く、Ⅵ層・Ⅺ層はごく僅かである(第1表)。以下では遺構毎・出土層位毎に記す。

S C 1 出土(1~5) 土師器無台椀I類(1~3)、黒色土器有台椀(4)、土師器長甕(5)がある。土師器長甕は口縁部のみ残存するが、調整からII類に属するものと思われる。

S C 2 出土(6~18・43) Ⅸ層に所属する遺構で、遺物が最も多く出土した。食膳具に比して貯蔵具・煮炊具が多い。食膳具には土師器無台椀A I類(6)、A II類(7)、黒色土器無台椀A II類(8)がある。6は小形で、外面はロクロナデによる凹凸が著しい。7は口縁部が「く」の字状に屈曲する。煮炊具には小甕(9~11)、長甕(12~14)がある。9は口縁端部が上方に短く引き出されたa類である。一方、長甕の口縁端部の形態はb類である。貯蔵具には須恵器甕(15~17・18)・長頸壺(16・43)がある。このうち17は口径約27.0cmと18に比して大型である。いずれも胎土はA類で小泊産の可能性が高い。

S D 3 出土(19) Ⅸ層に所属する遺構である。土師器無台椀A I類(19)が出土した。また、S C 2出土須恵器甕18にS D 3~2層出土破片が接合した。

S D 4 出土(20) Ⅹ層に所属する遺構である。20は土師器長甕II a類で、口縁端部が上方に長く引き出され、体部の器壁が薄い。

S C 9 出土(21~24) Ⅹ層に所属する遺構である。いずれも土師器無台椀A I類である。底部まで残存する21は口径に比して底径が大きい。

S C 10 出土(25~28) Ⅹ層に所属する遺構である。土師器無台椀A I類(25)、土師器小甕II a類(26)、土師器長甕II a類(27)、須恵器長頸瓶(28)がある。

Ⅺ層出土(29~31) いずれも非ロクロ成形の土師器長甕I類で、内外面にはハケメが残る。口縁部は比較的長く、「く」の字状に大きく湾曲する特徴をもつ¹⁾。器壁はやや厚めで、31は口縁部・胴部・底部が観察できる資料である。底部は丸底になるものと思われ、胴部内面に比べ底部内面のハケメは条線が深い。

1) 既報の荒川2004・2005では、これらの土器を古墳時代前期としたが、9世紀中葉~後葉と訂正する。

口縁端部は面取りされる。胎土は砂粒を多く含み、X層より上位から出土した土師器窓とは異なる。

X層出土 (32~35) 土師器長甕I類 (32・33)、須恵器有台杯 (34)、土師器無台椀 (35) がある。32はハケ調整で、XI層出土の29~31に類似する。34は口縁上端部で屈曲して外へ開く。胎土B類で、佐渡小泊産以外のものと思われる。

IX層出土 (36~44) 須恵器無台杯 (36・37)、土師器無台椀 (38・39)、黒色土器無台椀 (40)、土師器長甕 (41)、須恵器長頭甕 (43・44)、須恵器甕 (42) がある。36・37は胎土A類で、小泊産と思われる。38は土師器無台椀A II類としたが、底部が広い杯の可能性がある。40は外面低位にヘラ削りが認められる。41は口縁端部のつまみ上げが顯著ではないb類である。42の須恵器甕は口径30cm未満の中型品である。

VII層出土ほか (45~54) 土師器に限定される。無台椀 (45~49)、長甕 (50~52・54) である。鍋 (53) がある。長甕はI類に限定されるが、口縁部形態はa類 (54) とも類 (50~52) に分かれる。本発掘調査範囲で唯一確認できた鍋はII b類である。

B 工事立会い調査分 (C・E区 図版7~9-55~118)

工事立会い調査出土土器の口縁部残存率を第1表に示した。C区が最も多く、特に1~9グリッドに基中する。土師器無台椀が最も多く、全体70%程度を占めている。以下では出土層位毎に概要を記す。

II層出土 (55~57) 須恵器・土師器のほか、近世陶磁器類が若干出土している。このうち須恵器・土師器を図化した。須恵器横瓶 (55)・甕 (56)、土師器無台椀 (57) があり、いずれも細片である。55は開窓部の破片で、残存部にはカキメが残る。56の外面には格子状タタキメ文、内面には同心円文が残る。

VII・X層出土 (58~118) C区とD区は直線距離で約50mは離れていることから、区分して出土遺物を掲載しているが、以下では一括して記す。

S D15出土 (58・59) 出土量は少ない。黒色土器無台椀 (58) と土師器小甕 (59) があるが、いずれも小破片である。59はロクロ成形で、端部上端が人さくつまみ出されたII a類である。

S D14出土 (60~64) 黒色土器無台椀 (60)、十師器無台椀 (61)・十師器長甕 (62・63)・十師器鍋 (64) がある。62は口縁端部上端がつまみ出されたa類である。64の鍋は口径約36cmと大型である。胴部外面下位にはタタキメが、同じく内面下位には当て具痕が残る。

S E23出土 (115) 略穿形の十師器無台椀が1点出土している。口径12.2cm、高さ4.2cm、底径4.6cmで、口縁部及び底部内面はロクロナデ、底部の切り離しは回転ヘラ削りである。

VII・X層出土 (65~114・116~118) 残存率が高い個体を中心に図化した。須恵器・黒色土器・土師器の各食膳具と、煮沸具、貯藏具が揃う。

須恵器無台杯 I (65~70・116~117) 底部まで復元できたのは3個体 (65~66・116) で、口径約12~13cm、高さ2.6~3.0cm、底径約7.0~7.6cmである。底部の切り離しは、いずれも回転ヘラ削りである。胎土はA類であり、佐渡小泊産と考える。

黒色土器無台椀 I (71~76) 底部まで復元できた3個体 (71~73) は、口径約12.6~13.8cm、高さ4.3~4.9cm、底径4.6~6.0cmに収まり、須恵器無台杯に比して大型である。内面のみ黒色処理されているが、ミガキの痕跡は明瞭でない。底部の切り離しは回転ヘラ削りである。ロクロの回転方向は左回転が多い。

土師器無台椀 (77~91) 器種別では最も出土量が多い。底部まで復元できた5個体 (81~85) はいずれもI類で、口径11.0~12.6cm、高さ3.1~3.9cm、底径4.8~5.6cmの幅で収まる。須恵器杯や黒色土器椀に比して、法量が小さい。ただし、底部が残存しないものの中には、口径15cm、底径6.0~6.2cm程と前者に比

して大型なⅡ類があり(77~80、90・91)、法量から大きくは二分される可能性がある。

口縁部形態は、大型品がほぼ直線的に外傾して立ち上がるのに対し、小型品は内湾して立ち上がるもの(81~87)と、ほぼ直線的に外傾するもの(88・89)がある。底部の切り離しは回転糸切りが主体であるが、底径6.0cmを超える大型品には回転ヘフ削りが施されている。摩耗が進み調整が明瞭でないものも少なくないが、ロクロの回転方向は左回転のものが多い。

須恵器壺(92~95・118) 長頸瓶の口縁部片(92)・胴部片(93・94・118)・底部付近の破片(95)がある。92は口径約16.0cmで、口縁端部下端がわずかに垂下する。胴部片は上位(93・118)、下位(94)に分かれると、内外面共にロクロナデが施されている。底部片(95)は高台が欠損している。

須恵器壺(96~101) 口縁部片(96)と胴部片(97~101)がある。96は口径約31.0cmと大型で、口縁端部は上下に拡張されて幅広い面を持つ。胴部外面のタタキメは、いずれも格子状である。胴部内面は同心円文と思われる當て具痕が1点(97)存在するが、タタキメが残るものが多く、平行タタキメ(98・101)と、格子状タタキメ(99・100)に分かれると。

土師器壺(102~110) 長壺(102~106)と小壺(107~110)がある。細片が多いため口径12cm程度のものを小壺とし、それよりも大きいものを長壺とした。いずれもロクロ成形されている。

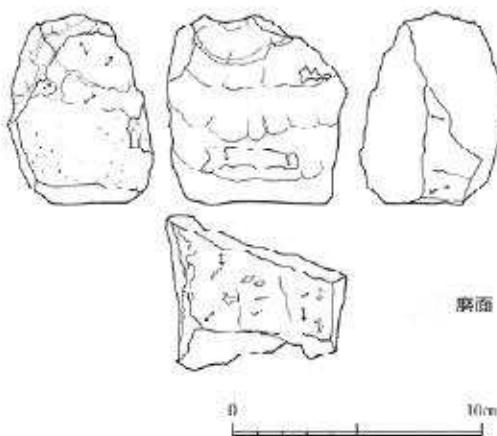
長壺は胴部の張り出しがわずかに認められるもの(102)と、口径が胴部最大径を上回るもの(105・106)がある。口縁端部の形態は上端の突出が大きいa類(105)、それほど大きくないb類(102~104・106)に分かれると。胴部の調整はロクロナデを基本とするが、カキメが残るものがある(102・106)。

小壺は、いずれも口径が胴部最大径を上回る。口縁端部の形態はいずれもa類で、上端が大きく突出するもの(107)と、わずかにつまみ上げられたもの(108)に分かれると。底部片(109・110)は、底径約6.0cmで、底部の切り離しは回転糸切りである。

土師器鍋(111~114) 口径は約30.0~44.0cmと幅がある。胴部との境界が比較的明瞭なもの(111・112)と、不明瞭なもの(113・114)がある。口縁端部は上端が大きく突出するa類(113)と、突出しないb類(111・112・114)に分かれると。b類は更に、口縁上端部が若干肥厚ないしき器壁程度の面をもつもの(111・114)、下端がわずかに垂下するもの(112)に分かれると。口縁部内外面及び胴部上位はロクロナデが施されており、下位にタタキメが残るもの(111・114)や、ヘフ削りが加わるもの(112)がある。

3 石 製 品(第6図)

S D11から砾石が1点出土している。長さ7.5cm、幅7.2cm、厚さ5.8cm、重さ約320gで、石材は凝灰岩である。合計4面で使用面が確認できるが、このうち自然面が残るのは両側面の2面のみである。このほかの使用面は剥離面を使用している。両側面の使用面と剥離面については、剥離面が使用面を切っている可能性があり、新たに使用面を作出するため意図的に剥離したものと推定される。



第6図 S D11出土砾石

第VI章 谷内A遺跡の科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

1 はじめに

谷内A遺跡は、新潟県燕市（旧西蒲原郡吉田町）吉田字富永に所在し、沖積平野の微高地上に立地する。本遺跡の発掘調査の結果、平安時代を中心とした（9世紀前葉～10世紀初頭）の遺物包含層が確認され、平安時代の土坑や溝状遺構、炭化物集中等の遺構や、須恵器、土師器といった遺物が確認されている。

本報告では、上述したように平安時代を中心とした遺物包含層が確認され、平安時代及びそれ以降の古環境の検討が課題されたことから、本遺跡の古環境、特に、堆積環境や古植生の情報を得るために自然科学分析を実施する。

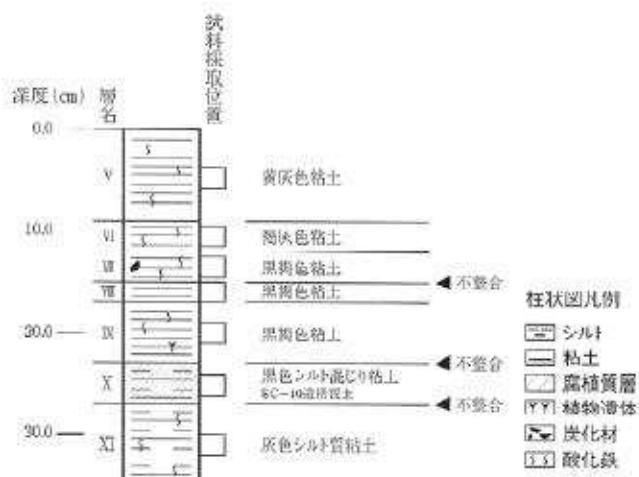
2 試 料

試料は、A区南端ヤンクションより柱状（高さ約35cm）で採取された土壤試料1点である。当試料は、本遺跡の基本土層のV～XI層に相当し、発掘調査時の所見によれば、XI層からは9世紀前葉～中葉の遺物が出土し、X層はSC10覆土、IX層からは土師器や須恵器等が出土することが指摘されている。以下に、当試料の層相観察所見を示す。

【A区南端センクション柱状試料】

最下部に相当するXI層は灰色シルト質粘土からなり、酸化鉄が認められる。XI層と不整合のX層は黒色シルト混じり粘土で、極めて腐植質である。IX層は黒褐色粘土からなり、下位の黒色土を巻き込み（不整合に堆積）、当土層下部に向かって黒色化する。酸化鉄、微細な炭化物、植物遺体を含む。VII層は黒褐色の粘土でIX層から漸移する状況が認められるが、下位の黒色土の影響は認められない。VII層の黒褐色粘土はIV層を不整合に覆い、粒状に堆積する。炭化材を含み、酸化鉄も認められる。VI層は褐灰色粘土であり、灰白色のシルトブロックが層状をなす。また、酸化鉄が認められる。当試料の最上部に相当するV層は黄灰色粘土であり、酸化鉄が認められる。

分析試料は、発掘調査所見及び上述の試料の観察所見をもとに、柱状試料より各層1点ずつ試料を採取し、計7点の土壤試料を対象に珪藻分析、花粉分析、植物珪酸体分析をそれぞれ行う。柱状試料の模式柱状図及び試料採取位置を第7図に示す。



第7図 模式柱状図及び試料採取位置

3 分析方法

A 珪藻分析

試料を湿重で7g前後秤量し、過酸化水素水、塩酸処理、自然沈降法の順に物理・化学処理を施して、珪藻化石を濃集する。検鏡に適する濃度まで希釈した後、カバーガラス上に滴下し乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入して、永久プレパラートを作製する。検鏡は、光学顕微鏡で油浸600倍あるいは1000倍を行い、メカニカルステージでカバーガラスの任意の測線に沿って走査し、珪藻殻が半分以上残存するものを対象に200個体以上同定・計数する（化石の少ない試料はこの限りではない）。種の同定は、原口ほか（1998）、Krammer（1992）、Krammer & Lange-Bertalot（1986, 1988, 1991a, 1991b）、Witkowski et al.（2000）などを参照する。

同定結果は、海水生種、淡水～汽水生種、淡水生種の順に並べ、その中の各種類をアルファベット順に並べた一覧表で示す。なお、淡水生種はさらに細かく生態区分し、塩分・水素イオン濃度（pH）・流水に対する適応能についても示す。また、環境指標種についてはその内容を示す。そして、産出個体数100個体以上の試料については、産出率2.0%以上の主要な種類について、主要珪藻化石群集の層位分布図を作成する。また、産出化石が現地性か異地性かを判断する目安として、完形殻の出現率を求める。堆積環境の解析は、海水～汽水生種については小杉（1988）、淡水生種については安藤（1990）、陸生珪藻については伊藤・堀内（1991）、汚濁耐性については、Asai & Watanabe（1995）の環境指標種を参考とする。

B 花粉分析

試料約10gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛、比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による歯物質の除去、アセトリンス（無水酢酸9、濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のヒルコースの分解を行い、物理・化学的処理を施して花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下でプレパラート全面を走査し、出現する全ての種類を対象に500個体以上同定・計数する（化石の少ない試料ではこの限りではない）。また、花粉・胞子量のほかに、試料中に含まれる炭片量の割合も求める。炭片は20 μm 以上を対象とし、それ以下のものは除外する。

結果は同定・計数結果の一覧表、および主要花粉化石群集の層位分布図として表示する。炭片量の割合は、植物遺体（花粉、胞子、植物片、炭片）の総数を基数として百分率で示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

C 植物珪酸体分析

湿重5g前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、沈降法、重液分離法（ボリタンクスチレン酸ナトリウム、比重2.5）の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、およびこれらを含む珪化組織片を近藤・佐瀬（1986）の分類に基づいて同定し、計数する。

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生について検討するために、植物珪酸体群集と珪化組織片の産状を図化する。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基數とする百分率で求める。

4 結果

A 珊藻分析

結果を第2表、第8図に示す。XI層だけ珪藻化石の产出が少なかったが、この他の6試料(X-V層)では堆積環境を検討する上で有意な量の化石が産出した。完形殻の出現率は50%前後で、化石の保存状態は不良である。产出分類群数は、合計で40属108分類群である。珪藻化石群集は、VII層とVI層を境に差異が認められる。

X-VII層は、陸上のコケや土壤表面など多少の湿り気を保持した好気的環境に耐性のある陸生珪藻と、淡水域に生育する水生珪藻とがほぼ同率で産出する。淡水性種の生態性（塩分濃度、水素イオン濃度、流水に対する適応能）の特徴は、貧塩不定性種（少量の塩分には耐えられる種）、真+好アルカリ性種（pH7.0以上のアルカリ性水域に最もよく生育する種）、流水不定性種（流水域にも止水域にも普通に生育する種）が優占する。主な産出種の特徴は、陸生珪藻の中でも耐乾性の高い陸生珪藻A群の *Hantzschia amphioxys* が30-40%と優占し、これに付随して流水性で中～下流性河川指標種群の *Cymbella sinuata*、*Cymbella turgidula*、上流性河川指標種群の *Gomphonema sumatrense*、流水不定性

卷之三

| | | | |
|---------|--------------|----------------------|------------------|
| H.R. | 脂分過剰に対する調節作用 | pH: 酸性オランジ部分に対する調節作用 | pH: 高温下で持続する過酸化物 |
| Eth. | 油溶性生葉 | al-hi: 草原山カリ性質 | 1-hi: 防止不活性質 |
| Gly-Mch | 油溶性・水溶性生葉 | al-al: 好アルカリ性質 | 1-ph: 好アルカリ性質 |
| Oxital | 脂肪酸不溶性 | 100: 防止活性質 | 1-ph: 防止不活性質 |
| Oxital | 酵素不溶性 | ac-ac: 防止活性質 | 1-ph: 防止不活性質 |
| Oxital | 酵素可溶性 | ac-bi: 不活性質 | 1-ph: 防止不活性質 |
| Oxital | 酵素可溶性 | bi-bi: 防止活性質 | 1-ph: 防止不活性質 |
| Oxital | 酵素不溶性 | bi-bi: 防止活性質 | 1-ph: 防止不活性質 |

www.ijerph.com

六、三井住友信託銀行、E:\\75\\信託總管（其上様小抄）[1991]

J:上流性河阳指标植物, K:中~下流性河阴指标植物, M:漂砾冲积性植被, N:河流冲积带植被。

丁巳年秋月于上海寓所作于华德（以上经寄附，1900）

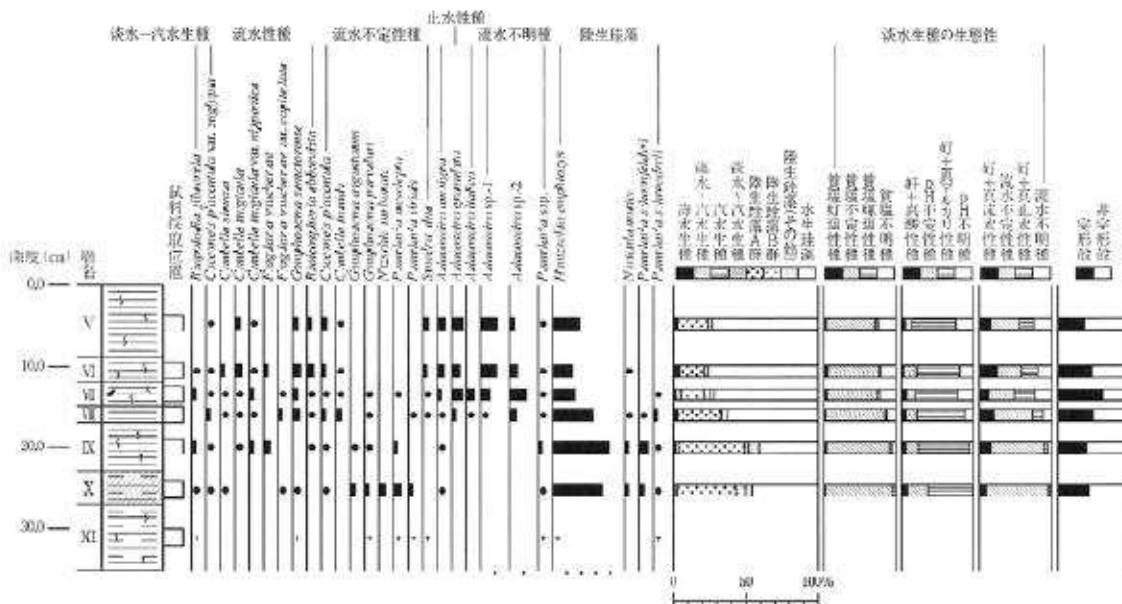
3: 活潑性格，U：沉鬱性格。T：好清潔性格（以上）Anne and Waddington, 1975）
 R：助產婦（R.A. A型：R.B. B型：R.C. C型：R.D. D型：R.E. E型）。

R·胡塞諾夫 (RA: A. Huseynov, R2: D. Serebryakov, R1: I. V. Gorbunov, T. V. Kostyleva - 编译, 1991)

薦分析結果

第十一章

第2表 珪藻分析結果



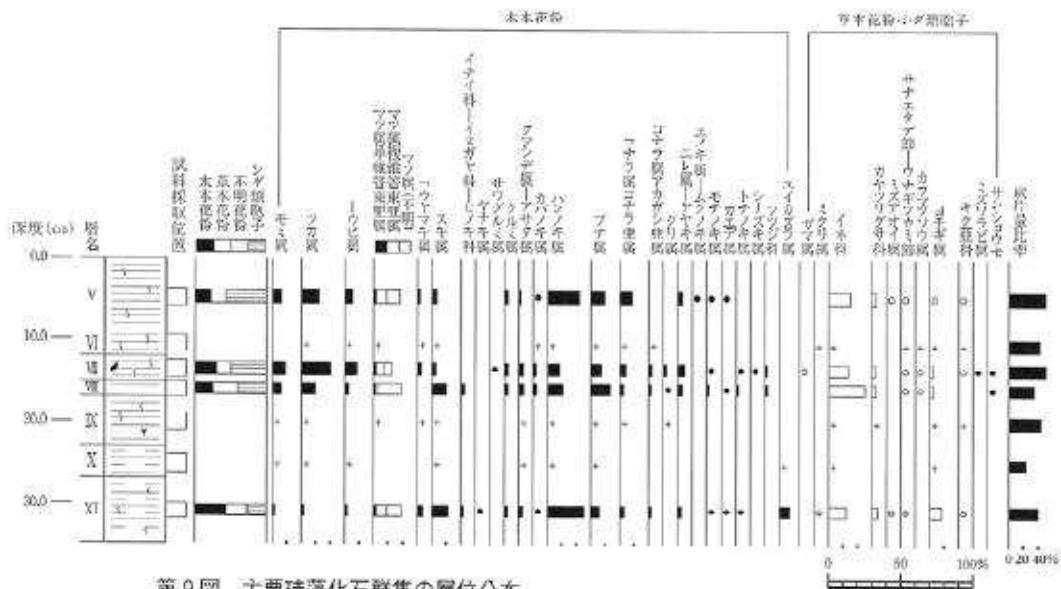
第8図 主要珪藻化石群集の層位分布

海水一海水一海水生産率出率、各種生産率、実形態生産率平手合体個数、淡水生産の生態系の比率は淡水生産の合計を基準として百分率で算出した。いずれも100個体以上検出された試料について示す。なお、●は2%未満、十は100個体未満の試料について検出した種類を示す。

のCoccconeis placentula、Gomphonema parvulum、それに計水性で湖沼沼澤湿地指標種群のAulacoscira ambigua等を伴う。中～下流性河川指標種群とは、河川中～下流部や河川沿いの河岸段丘、扇状地、自然堤防、傍背湿地などに集中して出現することから、その環境を指標することができる種群、上流性河川指標種群とは河川上流部の峡谷部に集中して出現することから上流部の環境を指標する可能性の大きい種群とされている〔安藤1990〕。

V-V層では、淡水域に生育する水生珪藻が約70%を優占し、陸生珪藻も約20%産出する。淡水生種の生態性の特徴は塩分濃度と水素イオン濃度に対しては変わらないが、流水に対しては、真+好流水性種、流水不定性種、真+好止水性種が高い割合で産出する。産出種は、流水性で中・下流性河川指標種群の *Cymbella sinuata*、*Cymbella turgidula*、*Rhoicosphenia abbreviata*、上流性河川指標種群の *Gomphonema sumatrense*、流水不定性の *Coccconeis placentula*、*Synechra ulna*、*Gomphonema parvulum*、それに止水性で湖沼浮遊性種群の *Aulacoseira granulata*、湖沼沼澤湿地指標種群の *Aulacoseira ambigua*等を伴う。湖沼浮遊性種群とは、水深が約1.5m以上ある湖沼環境を指標することのできる種群、湖沼沼澤湿地指標種群とは湖沼における浮遊生種としても沼澤湿地の付着生種としても優勢に出現することから、その環境を指標すること

第3表 花粉分析結果



第9図 主要珪藻化石群集の層位分布

山羽寺は、木本花粉は木本花粉化石地帯、草本花粉・シダ類微子は基部より不明花粉を除く数を基準として百分率で算出した。なお、●○は木本花粉、△は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。また、斜片量比率は矯結體の斜片を基準として、百分率で算出した。

のできる種群とされている [安藤1990]。また、種までの同定に至らなかったが *Aulacoseira* sp.-1, *Aulacoseira* sp.-2 が産出した。陸生珪藻では前層で優占した *Hantzschia amphioxys* が多産した。

なお、XI層は、珪藻化石の産出の少なく、その特徴を把握するに至らないが、上述した流水性種、止水性種それに陸生珪藻が混在して産出する状況が認められた。

B 花粉分析

結果を第3表、第9図に示す。図表中で複数の種類をハイノオノで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。なお、木本花粉総数が100個体未満のものは、統計的に扱うと結果が歪曲する恐れがあるので、出現した種類を+で表示するに留めている。いずれの試料も花粉化石の保存状態は不良であり、かろうじて定量解析ができる程度の花粉化石の産出がみられる試料も多く、XI・X・VI層では産出個体数が少なく、定量解析を行うことは不可能であった。

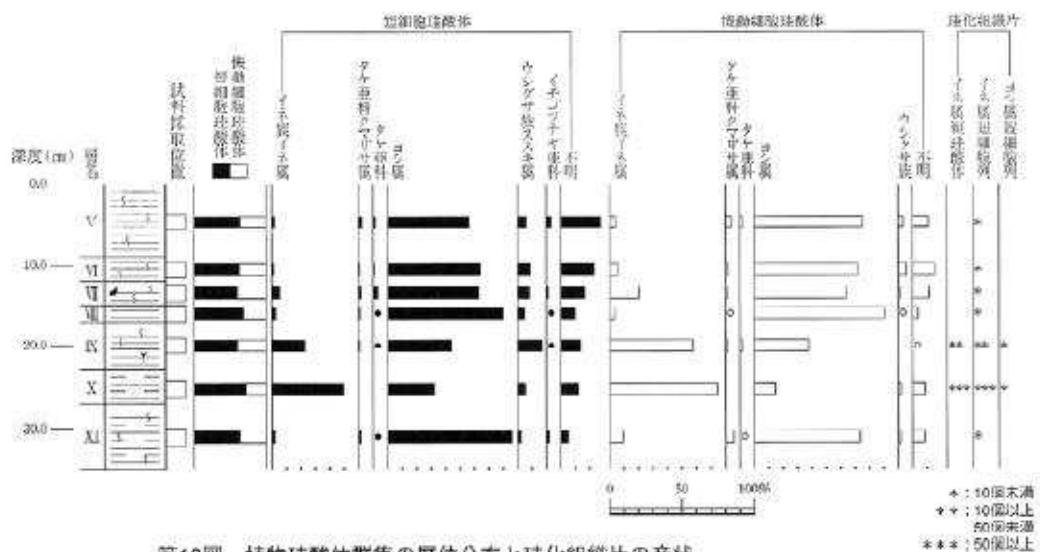
XI層は、木本花粉ではハンノキ属が最も多く産出し、マツ属、スギ属、ブナ属、スイカズラ属などを伴う。草本花粉ではイネ科、カヤツリグサ科、ヨセギ属等が多く、水生植物であるミクリ属、ミズアオイ属なども僅かに検出される。

VII・VIII層は、花粉化石群集が類似し、セミ属、ツガ属、トウヒ属、マツ属、スギ属、ハンノキ属、ブナ属等が産出し、コナラ属コナラ亞属、ハンノキ属などを伴う。草本花粉ではイネ科が多く、カヤツリグサ科、ヨモギ属等のほか、ガマ属、ミズワラビ属、サンショウウチなど水湿地生植物に由来する花粉・胞子も認められる。

V層は、木本花粉ではハンノキ属が最も多く産出し、モミ属、ツガ属、トウヒ属、マツ属、ブナ属、コナラ亞

| 種名 | 試料番号 | V層 | VI層 | VII層 | VIII層 | X層 | XI層 |
|-----------|------|-----|-----|------|-------|-----|-----|
| 木本花粉 | | | | | | | |
| 木本花粉 | 3 | 9 | 9 | 6 | 42 | 127 | 4 |
| シダ類微子 | 5 | 2 | 3 | 3 | 2 | - | 3 |
| タケ類微子 | 4 | 2 | 6 | 1 | 3 | - | 1 |
| ゴツ類 | 118 | 118 | 106 | 102 | 79 | 83 | 109 |
| ムハサキロココモリ | 53 | 16 | 11 | 11 | 33 | 34 | 4 |
| イネ科 | 7 | - | 2 | 1 | 1 | - | 1 |
| 不規則型 | 60 | 26 | 21 | 20 | 20 | 14 | 5 |
| 小形ビンバク | 10 | 4 | 1 | 2 | 2 | 13 | 2 |
| 小形コリケン | 8 | 7 | 6 | 1 | 3 | 4 | 3 |
| 草本花粉 | | | | | | | |
| イネ科 | 5 | 6 | 23 | 4 | 70 | 76 | 10 |
| タケ類微子 | 5 | 2 | 2 | 1 | 2 | - | 6 |
| タケ類微子 | 12 | - | - | - | 2 | - | 1 |
| ゴツ類 | 50 | 36 | 32 | 34 | 45 | 13 | 30 |
| カシキサ属 | 4 | 6 | 2 | 1 | - | 9 | 2 |
| 水生 | 13 | 16 | 33 | 4 | 1 | 9 | 9 |
| 合計 | | | | | | | |
| 木本花粉 | 409 | 331 | 284 | 221 | 180 | 288 | 289 |
| 草本花粉 | 118 | 106 | 112 | 101 | 101 | 102 | 106 |
| 合計 | 527 | 437 | 396 | 322 | 301 | 390 | 395 |
| 珪藻類 | | | | | | | |
| 木本花粉比 | - | - | - | - | 48 | 126 | - |
| 木本花粉総数 | 3 | 1 | 6 | 3 | 32 | 90 | 1 |
| 木本花粉微子 | - | - | - | - | 9 | 5 | - |

第4表 植物珪酸体分析結果



第10図 植物珪酸体群集の層位分布と珪化組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類を示す。また、珪化組織片の産状を*で示す。

属などを伴う。草本花粉ではイネ科が多産し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、ミズアオイ属などが検出される。

いずれの試料も、シダ類胞子が多く検出され、再堆積したと考えられる極めて保存状態の悪い花粉も産出する。なお、各試料の炭片量比率は、XI層は39.5%、X層は24.3%、IX層は43.5%、VII層は34.1%、V層は50.7%、VI層は42.5%、V層は50.1%である。

C 植物珪酸体分析

結果を第4表、第10図に示す。各試料からは保存状態の良好な植物珪酸体が検出される。また、検出される種類は試料間で類似し、栽培植物のイネ属、クマザサ属を含むタケ亜科、コシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などが検出されるが、その産状は、層位的な変化が認められる。

XI層では、ヨシ属の短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体の産出が目立ち、イネ属短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体、クマザサ属を含むタケ亜科の短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体、ウンクサ族の短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体、イチゴツナギ亜科の短細胞珪酸体などを伴う。

X・IX層では、ヨシ属の短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体は少ない、あるいは産出せず、栽培植物のイネ属の短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体の産出が目立つ。また、イネ属の糊部に形成される頸珪酸体や葉部に形成される短細胞列の珪化組織片も多産する。特に、X層ではこのような産出状況が顕著である。VII-V層では、XI層と同様にヨシ属の短細胞珪酸体・機動細胞珪酸体の産出が目立ち、イネ属、クマザサ属を含むタケ亜科、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科などを伴う。

5 考 察

A 堆積環境

基本土層を対象とした珪藻分析の結果、珪藻化石群集はⅦ層を境として水生珪藻と陸生珪藻の割合に差異が認められた。ただし、いずれの土層も上流性河川指標種群、中～下流性河川指標種群を含む流水性種、湖沼浮遊性種群、湖沼沼沢湿地指標種群を含む止水性種、それに水生珪藻とは生育環境を異なる陸生珪藻とが混在する、いわゆる混合群集の特徴が示唆され、珪藻化石の産出が少なかったX-T層も、産出された種類を見る限りでは混合群集の特徴が認められる。この混合群集とされる。

組成を示す珪藻化石群集は、洪水等により短期間に堆積した一過性の堆積物中に認められる群集〔堀内ほか1996〕であることから、本分析結果によれば、各土層は洪水等の氾濫による堆積物と考えられる。

本遺跡及び周辺地域の地形等を考慮すると、西蒲原地域は、信濃川分流の中ノ口川、西川に囲まれ、分水町熊ノ森を頂点として北側に傾斜した中州の島（西蒲原輪中）を形成しており、輪中の外側は昔から河川の氾濫の起き易い場所であったとされている〔松島2001〕。本遺跡は信濃川の分流である西川にも近く、南北に列状に分布する自然堤防あるいは微高地上に立地することから、河川氾濫等の影響を受け易い場所であったと推測される。

なお、Ⅶ層とⅧ層を境として認められた水牛珪藻と陸牛珪藻との割合の差異の要因としては、堆積時の洪水の頻度等や、陸生珪藻が多産するX・IX層では花粉化石の産出状況も悪く、一般的に花粉やシダ類胞子の堆積した場所が、常に酸化状態にあるような場合、花粉は酸化や土壤微生物によって分解・消失するとされる〔中村1967；徳永・山内1971〕ことや、X・IX層では遺構・遺物が確認されることから、他の土層と比べ長時間、好気的環境にあったことが推測される。

B 森林植生

花粉分析の結果、いずれも花粉化石の保存状態は不良であり、シダ類胞子も多産した。また、産出状況も不良であり、定量解析が行うための個体数が得られない試料も認められた。一般に、花粉やシダ類胞子は、腐蝕に対する抵抗性が種類により異なり、落葉広葉樹に由来する花粉よりも針葉樹に由来する花粉やシダ類胞子の方が酸化に対する抵抗性が高いとされている〔中村1967；徳永・山内1971〕。

保存状態及び産出状況の比較的悪いⅣ-V層では、モミ属、ツガ属、トウヒ属といった針葉樹起源の花粉化石や、シダ類胞子の割合が高かった。これらの土層では、珪藻分析結果によれば、洪水等の影響が認められ、洪水後に好気的環境に晒されていてことを考慮すると、花粉化石群集組成は、経年変化による分解の影響を受け、抵抗性の高い花粉が相対的に多く検出していると推測され、当時の植生を正確に反映していない可能性がある。本項では、上述の点を考慮し、考察を行う。

XI-V層の花粉分析結果では産出割合に差異が認められるが、その種類は類似し、いざれもモミ属、ツガ属、マツ属、スキ属、ハンノキ属、ブナ属、コナラ属コナラ虫属等が検出される。これらのうち、ブナ属、コナラ虫属などは冷温帶性落葉広葉樹林の主要構成要素であり、モミ属、ツガ属、スキ属などは温帯針葉樹林の構成要素である。このことから、後背の丘陵や山地、集水域等にはブナ属をはじめとする落葉広葉樹林が成立し、部分的にモミ属、スキ属などの温帯針葉樹がモザイク状に林分を形成していたと考えられる。ハンノキ属はクルミ属、ニレ属-ケヤキ属等とともに、渓谷や河畔沿いあるいは低湿地などの

適湿地に林分を形成する種群であることから、周辺の河畔や低湿地に生育していたと推測される。マツ属は生育の適応範囲が広いことから、尾根筋や湿地周辺など他の広葉樹の生育に不適な立地にも生育が可能である。さらに極端な陽樹であることから、やせた裸地等でもよく発芽・生育し、伐採された土地などに最初に進入する二次林の代表的な種類とされる。またマツ属は、自然干渉の結果として、二次林や植林が増加したことによる急増が知られている（たとえば【波田1987】など）が、本分析結果では、マツ属の増加を指摘するに至らない。恐らく、落葉広葉樹林の林縁や遺跡周辺に生育していたと推測される。

ところで、近隣の三角田遺跡（熊市）の7～8世紀と考えられる掘立柱建物跡の柱材の調査成果によれば、低地の湿地林や河畔林を形成する種類が多く認められ、特にトネリコ属、ヤマグワを中心とした広葉樹材を利用する傾向が認められている【パリノ・サ ヴェイ株式会社2001】。本遺跡の花粉分析結果では、クリ科は検出されるがトネリコ属は検出されていない。ただし、トネリコ属は花粉分析から推定されるハンノキ属、クルミ属、ニレ属－ケヤキ属などの河畔林・湿地林に普通に生育する種類であることから、前述の広葉樹からなる湿地林・河畔林が成立していたことが推測され、当地域周辺では7世紀頃にはこのような河畔林・湿地林が存在し、10世紀初頭にも同様の湿地林や河畔林が存在していたと推測される。

C 周辺植生

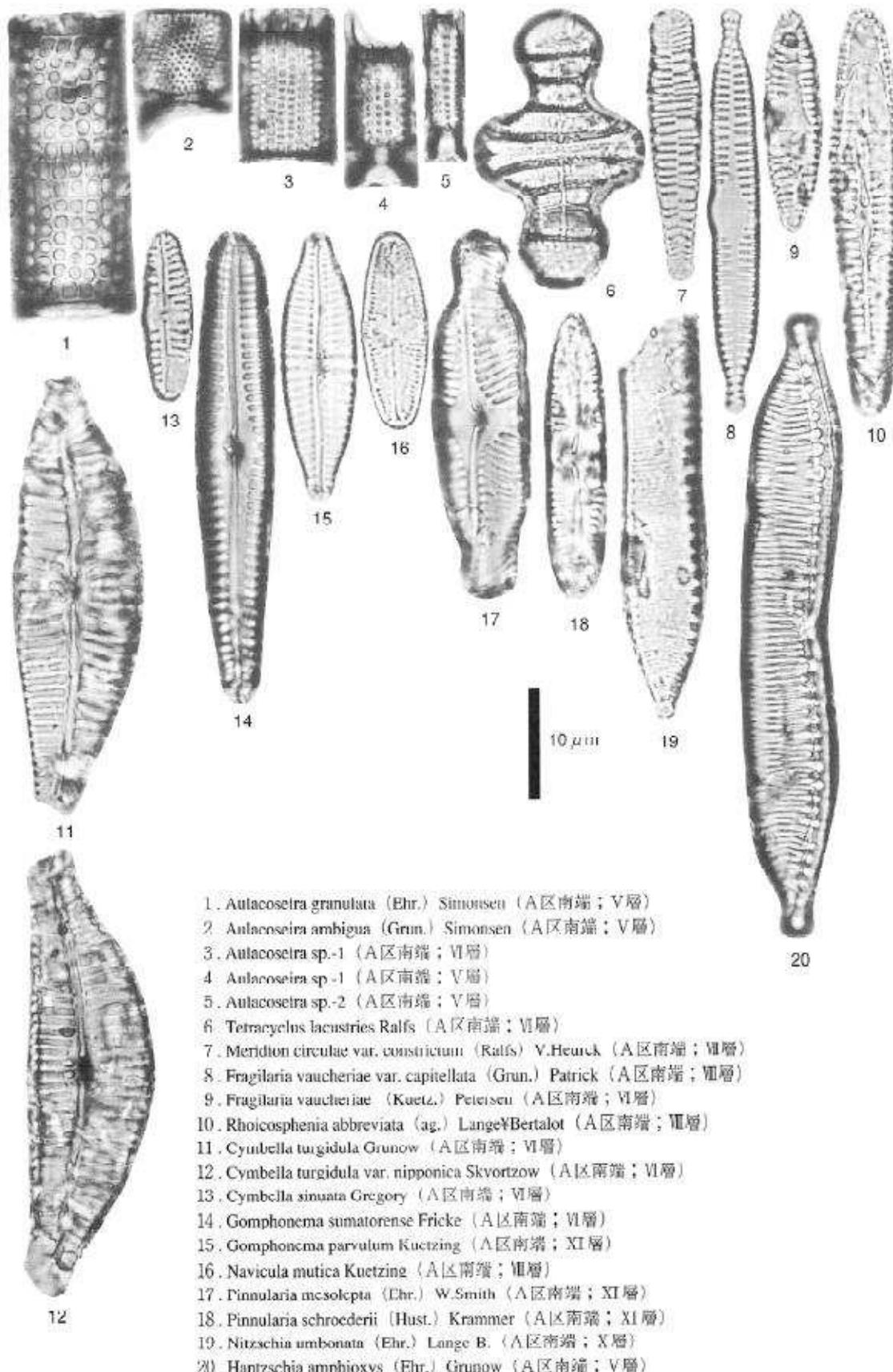
花粉分析結果では草本類はイネ科、カヤツリグサ科、ヨモギ属などが多く認められ、植物珪酸体分析ではクマザサ属などのタケ亜科、ウシクサ族やイチヅツナギ亜科などが検出された。これらは開けた明るい場所を好む、いわゆる人里植物を含む分類群であり、周囲の草地等に生育していた可能性がある。なお、本遺跡の立地や珪藻分析結果を考慮すると、基本土層のXI～V層はいずれも洪水等の堆積物を母材とする土層であることから、洪水等の後の乾いた環境化で生育したことが推測される。一方、湿润な場所に生育するヨン属の植物珪酸体の産出が目立つことや、ガマ属、ミクリ属、ミズアイイ属、ミズワラビ属、リシショウモなどの水湿地生植物に由来する花粉・孢子が検出されることから、ヨシ属を含むイネ科、カヤツリグサ科の一部、ガマ属、ミズアオイ属、サンショウモ等は、周辺の河川やその周囲の湿地などに生育したものに由来すると考えられる。

ところで、SC10覆土であるX層からは、栽培植物であるイネ属の植物珪酸体や、イネ属の穂穀や葉部に形成される珪化組織片が多産した。このことから、稲穂穀や稻藁の灰が含まれることが示唆され、遺跡内でのイネの利用が示唆される。また、IX層からもイネ属の植物珪酸体や珪化組織片の多産が認められるが、ヨシ属が多産することや、層相観察ではX層を巻き上げ堆積する状況も認められている。しかがって、IX層堆積時もイネを利用した可能性があるが、X層を母材とする堆積物の影響を反映している可能性もあり、その評価は慎重に行う必要がある。

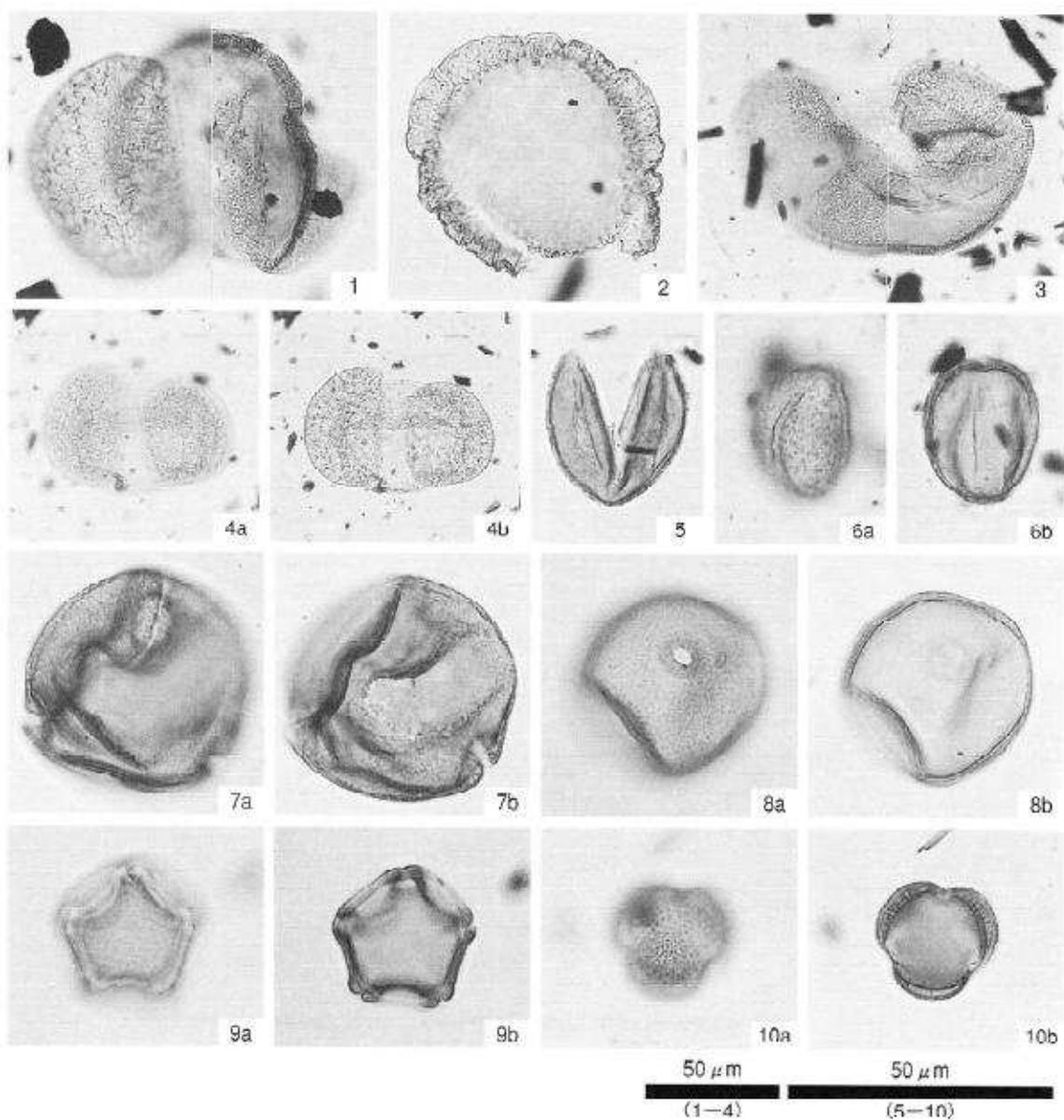
炭片量比率では、定量解析ができる程度の花粉化石の産出が認められたXI・VII・VIII・V層では40-50%を示した。炭片は人間活動と密接に関係しているとみられ、鳥浜貝塚（福井県）では6000年前から炭片量が増加することから、山野を焼き払っていたことが推測されている【安田1987】。また、このような炭片は黒ボク十中にも多量に含まれ【山野井1996；井上ほか2002】、黒ボク十の成因の一つとして、火入れによるイネ科草本類を主とする草原の維持が推定されている【松井・近藤1992】。ただし、本遺跡では上述した土層において、人間活動等を示す遺構は確認されておらず、現時点ではその要因は不明である。堆積環境を考慮すると、集水域における影響も考えられるが、この点について、本遺跡及び周辺地域における遺跡の動態等を含め、改めて検討したい。

引用・参考文献

- 安藤一男 1990「淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復元への応用」『東北地理』42 p73-88
 Asai, K. and Watanabe, T.
- 1995 Statistic Classification of Epilithic Diatom Species into Three Ecological Groups relating to Organic Water Pollution (2) Saprophytic and saproxenous taxa. *Diatom* 10, p35-47
- 波田善夫 1987「松くい虫被害対策として実施される特別防除が自然生態系に与える影響評価に関する研究」『—松くい虫等被害に伴うマツ林生態系の擾乱とその動態について—資料集』日本自然保護協会 p11-49
- 原口和夫・三友清史・小林 弘 1998「埼玉の藻類 珪藻類」『埼玉県植物誌』埼玉県教育委員会 p527-600
- 井上 淳・吉川周作・十々和一 肇 2002「琵琶湖周辺域に分布する黒ボクト中の黒色木片について」『日本第四紀学会講演要旨集』 p32, 74-75
- 伊藤良水・堀内誠示 1991「陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用」『珪藻学会誌』 p6, 23-45
- 近藤鉢三 坂瀬 隆 1986「植物珪酸体分析、その特性と応用」第四紀研究 p25, 31-64
- 小杉正人 1988「珪藻の環境指標種群の設定と古環境復元への応用」第四紀研究 p27, 1-20.
- Krammer, K.
- 1992 PINNULARIA. eine Monographie der europäischen Taxa. BIBLIOTHECA DIATOMOLOGICA BAND 26. J. CRAMER, p353
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.
- 1986 Bacillariophyceae. I. Teil : Naviculaceae. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/1. Gustav Fischer Verlag, p876
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.
- 1988 Bacillariophyceae. 2. Teil : Epithemiaceae, Bacillariaceae, Suricellaceae.
 In : Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/2. Gustav Fischer Verlag, 536p.
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.
- 1991a Bacillariophyceae. 3. Teil : Centrales, Fragilariaeae, Eunotiaceae. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/3. Gustav Fischer Verlag, 230p
- Krammer, K. and Lange-Bertalot, H.
- 1991b Bacillariophyceae. 4. Teil : Achmanthaceae, Kritsche-Frgaenzungen zu Navicula (Lineolatae) und Gomphonema. In : Suesswasserflora von Mitteleuropa. Band 2/4. Gustav Fischer Verlag 248p
- 堀内誠示・高橋 敦・橋本真紀夫 1996「珪藻化石群集による低地堆積物の古環境推定について—混合群集の認定と堆積環境の解釈—」『日本文化財科学会 第13回大会研究発表要旨集』 p62-63
- 松島悦子 2001「第Ⅱ章 遺跡の位置と環境」『三角田遺跡、国営新荒井川排水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 燕市埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集』 p3-7
- 中村 純 1967「花粉分析」 古今書院 p232
- パリソ・データイ株式会社 2001「三角田遺跡から出土した木材の樹種」『燕市埋蔵文化財発掘調査報告書 第1集 新潟県燕市 三角田遺跡 国営荒井川排水路工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』
 燕市教育委員会・吉田町教育委員会 p45-49
- 徳永重元・山内輝了 1971「花粉・胞子」『化石の研究法』共立出版株式会社 p50-73
- Witkowski, A. and Lange-Bertalot, H. and Metzeltin, D.
- 2000 Iconographia Diatomologica 7. Diatom flora of Marine coast L. A. R. G. Gantner Verlag K.G. p881
- 山野井徹 1996「黒土の成因に関する地質学的検討」『地質学雑誌』 p102, 526-544
- 安田喜憲 1987「文明は緑を食べる」 読売新聞社 p227

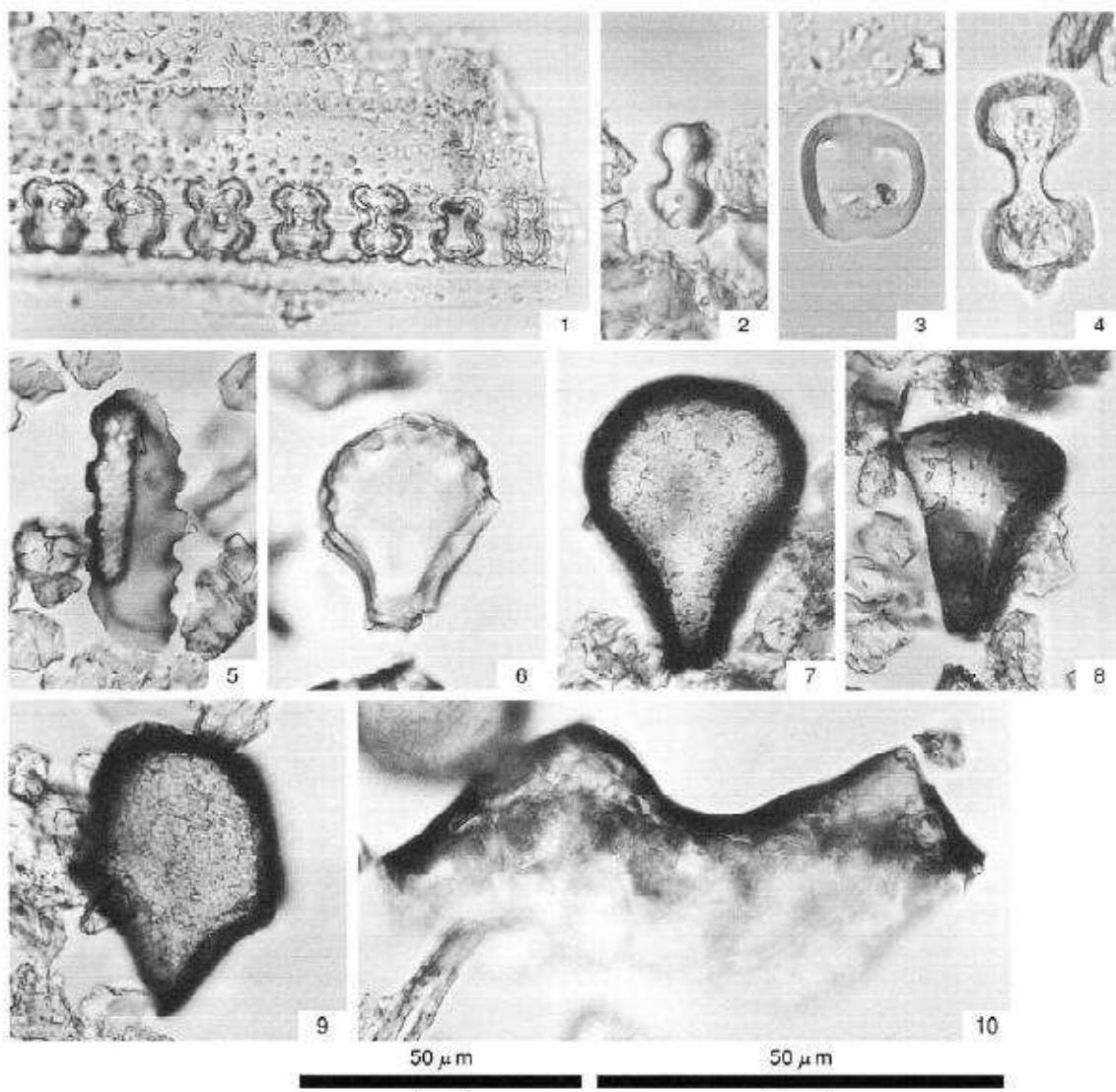


第11図 姥浜化石



- | | |
|----------------------|-------------------------|
| 1. モミ属 (A区南端; VI層) | 2. ツガ属 (A区南端; VI層) |
| 3. トウヒ属 (A区南端; V層) | 4. マツ属 (A区南端; V層) |
| 5. スギ属 (A区南端; XI層) | 6. コナラ属コナラ亜属 (A区南端; V層) |
| 7. ブナ属 (A区南端; XI層) | 8. イチイ科 (A区南端; XI層) |
| 9. ハンノキ属 (A区南端; VI層) | 10. ヨモギ属 (A区南端; XI層) |

第12図 花粉化石



- | | |
|------------------------------|----------------------------|
| 1. イネ属短細胞列 (A区南端; X層) | 2. イネ属短細胞壁酸体 (A区南端; VII層) |
| 3. ヨシ属短細胞壁酸体 (A区南端; XI層) | 4. ススキ属短細胞壁酸体 (A区南端; XI層) |
| 5. イナコツナギ重卦短細胞壁酸体 (A区南端; V層) | 6. イネ属機動細胞壁酸体 (A区南端; X層) |
| 7. イネ属機動細胞壁酸体 (A区南端; VII層) | 8. ウシクサ族機動細胞壁酸体 (A区南端; V層) |
| 9. コシ属機動細胞壁酸体 (A区南端; XI層) | 10. イネ属頸壁酸体 (A区南端; X層) |

第10図 植物壁酸体

第VII章 まとめ

1 出土遺物について

A 出土遺物の時期

調査面積は限定されること、遺構一括遺物も少ないので、土器は複数層にわたって検出されており、西蒲原郡域の土器様相を検討する場合に少なからず重要な意義を持つと考える。以下では、春日真実氏による西蒲原地域の土器編年〔春日2000〕を基に、出土土器の編年的位置付けを検討する。

谷内1期：本遺跡で最下層にあたるXI層とX層出土土器である。XI層は食膳具を含まず、壺に限定される。壺は井口クロ成形で、口縁部が長く端部は面取りされ、器壁が厚い特徴をもつ。この壺は西古志型壺とされている〔坂井1990〕。X層も同じく壺は西古志型である。食膳具は乏しいものの須恵器有台杯の可能性がある34を含む。長胴壺を比較すると、X層出土の32とXI層出土の29～30では胴部の張り出しに違いがあり、時期差を反映している可能性もあるが比較資料が少ないので括した。

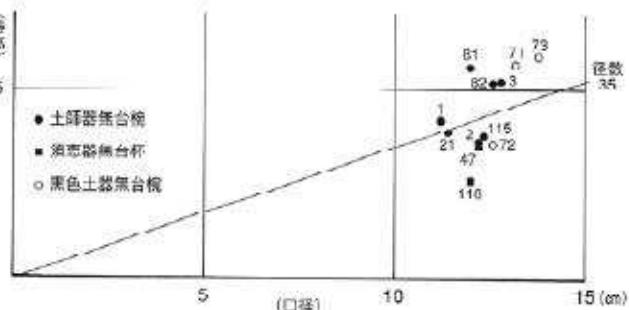
本期の特徴は土師器壺が西古志型で占められること、食膳具は小泊産須恵器有台杯、土師器無台碗が存在する段階とする。

谷内2期：SC1・SC2・SC9・SC10、IX層出土土器を本期とした。食膳具は小泊窯産の須恵器無台杯や黒色土器無台碗が少量認められるが、主体となるのは土師器無台碗である。煮炊具は西古志型壺が確認できず、いずれもロクロ成形のものに限られる。一部で口縁上端部をつまみ上げたIIa類が加わる。

谷内3期、VII層出土土器を本期とした。食膳具は土師器無台碗に限定される。土師器者炊具はロクロ成形に限定されるようである。形態が把握できるのは長胴壺のみであるが、口縁上端が大きくつまみ上げられたものがある。谷内2期と比較すると、3期の47は口径／器高の係数が後出的と考える¹⁾。

工事立会い分のものは、谷内2・3期でありのSD14・15などは谷内3期頃の年代を想定したい。

春日編年との対応関係については第15図に示したものから、谷内1期は春日編年V期頃、谷内2期がVI期前半、谷内3期がVI期2～3期頃と考える²⁾。

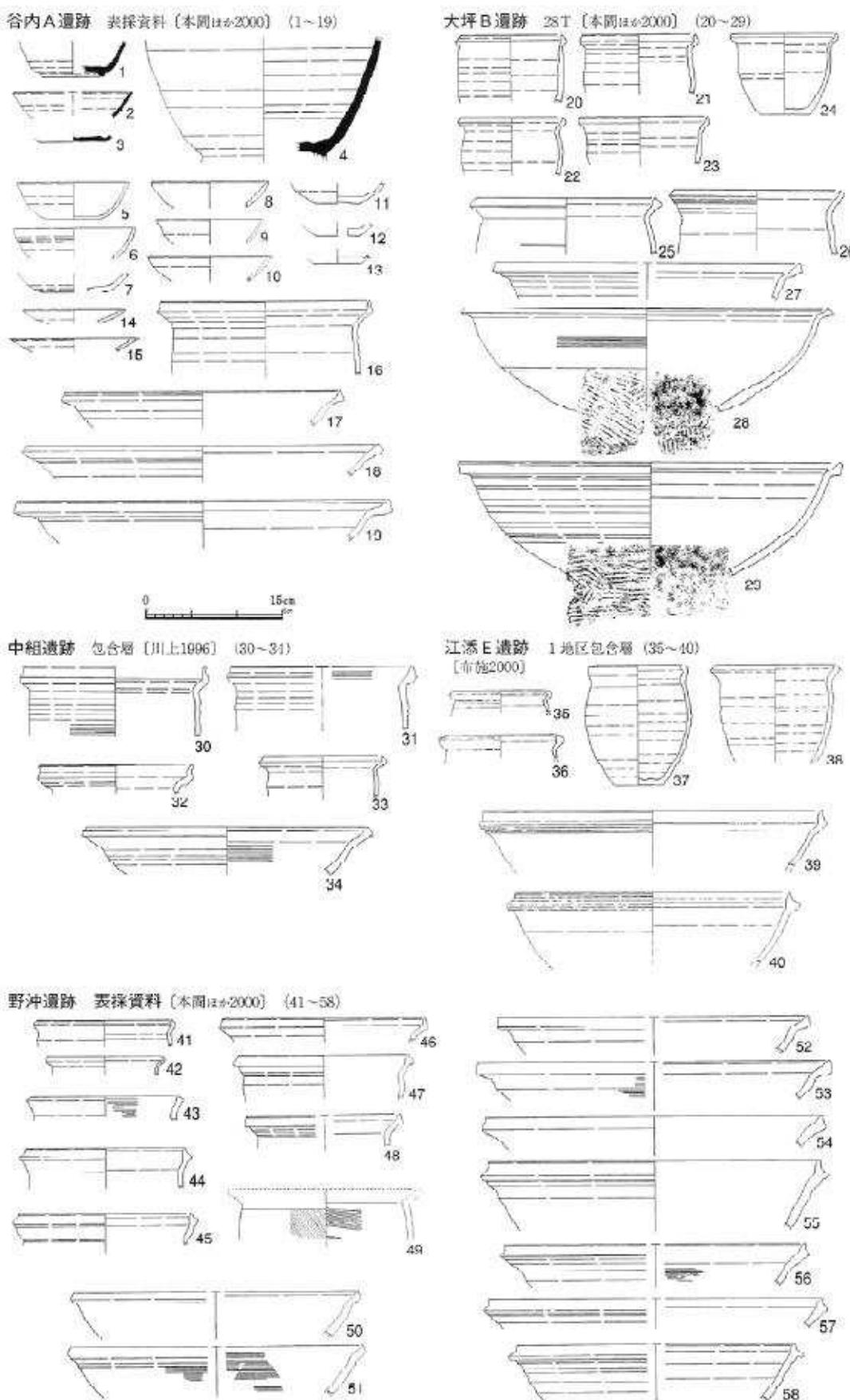


第14図 谷内A遺跡出土食膳具の法量分布図

1) 本遺跡出土食膳具の法量分布を第14図に示した。蒲原郡域の出土資料について検討した春日氏の分析では、土師器無台碗の係数が35を越えるのは、9世紀後半～10世紀前半（春日氏のVI2～3期頃か）に限定されるという〔春日1997〕。

2) 春日氏は「佐渡小泊産須恵器・土師器・黒色土器食膳具の量比及び形態から3期に細分できる」とし、「食膳具の大半を小泊窯産須恵器有台杯・無台杯が占め（中略）、土師器長胴壺・小壺に西古志型のものを定量含む」ものをVI1期、「土師器・黒色土器無台碗が定量確認でき、土師器者炊具に口縁部を上方につまみ上げるもののが多」の時期をVI2期、「小泊窯産須恵器杯類・土師器煮炊具が大幅に減少し、土師器・黒色土器無台碗が食膳具の主体を占める」時期をVI3期とする〔春日2000〕。

1 出土遺物について



第15図 旧吉田町内における春日編年VI期の土器 (S=1/8)

B 須恵器の胎土・ロクロの回転方向について

1) 須恵器の胎土について

第V章の記述とおり、須恵器の産地は胎土からA類が佐渡小泊黒産の可能性が高いもの、B類が佐渡小泊黒産以外の可能性が高いものとした。観察結果は第5表のとおりである。食膳具では須恵器無台杯の10点がいずれも胎土A類、有台杯(34)は胎土B類であった。貯蔵具では21点中、胎土A類が15点(71.4%)、胎土B類が6点(28.6%)と胎土A類が多い。食膳具は胎土A類が主体、貯蔵具は食膳具に比して胎土B類の比率が高い傾向にある。

胎土B類は新津丘陵産の可能性が高いものが序例的に多く、筆神丘陵産の可能性が高いものは皆無であった。食膳具は小泊産、貯蔵具は佐渡小泊産に加え新津丘陵産のものが一定量使用されたものと推測される。

2) 回転方向について

ロクロ成形されたものについては、胎土粒子の移動からロクロの回転方向を観察した。観察結果は第6表のとおりである。残存率の高い個体が限られ、ロクロの回転方向が明確でないものが多い。判別できたものは須恵器無台杯5点、須恵器壺1点、長頸壺1点、土師器無台碗3点、黒色土器無台碗3点である。

食膳具のうち須恵器無台杯は5点中3点(60%)が右回転、2点(40%)が左回転である。一方、土師器無台碗は3点とも左回転、黒色土器無台碗は3点中2点が左回転である。個体が限られるが、土師器無台碗・黒色土器無台碗は左回転が多い。この結果は本遺跡と同様に浦原郡に属する旧新津巾冲ノ羽遺跡地区の分析結果とは異なる〔春日2003a〕。

貯蔵具では須恵器壺・長頸壺の各1点であるが、壺が左回転、長頸壺が右回転であった。

C 黒色土器の焼成について

黒色土器無台碗の黒斑を観察した(第7表)。口縁部外面における黑色処理は、外面にはみ出たものが圧倒的に多く、8点中6点で認められた。また、底部外面に棒状黒斑が認められるものは3点に認められた(第

第5表 須恵器の器種別胎土

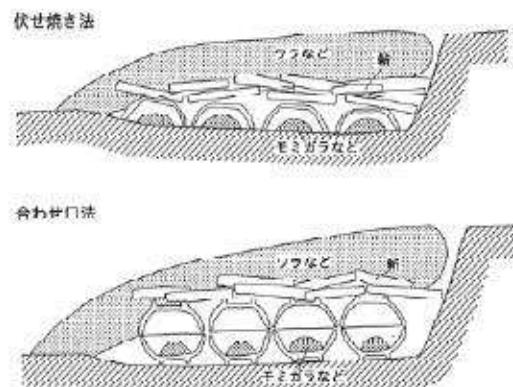
| 大別 | 器種 | 胎土A類 | 胎土B類 | 合計 |
|-----|-----|------|------|----|
| 食膳具 | 無台杯 | 10 | 0 | 10 |
| | 有台杯 | 0 | 1 | 1 |
| 貯蔵具 | 壺 | 8 | 4 | 12 |
| | 長頸壺 | 3 | 1 | 4 |
| | 横瓶 | 0 | 1 | 1 |
| | 甕 | 3 | 1 | 4 |
| 合計 | | 24 | 8 | 32 |

第6表 器種別にみたロクロの回転方向

| 器種 | 右回転 | 左回転 |
|---------|-----|-----|
| 須恵器無台杯 | 3 | 2 |
| 須恵器壺 | 0 | 1 |
| 須恵器長頸壺 | 1 | 0 |
| 土師器無台碗 | 0 | 3 |
| 黒色土器無台碗 | 1 | 2 |
| 合計 | 5 | 8 |

第7表 黒色土器の黒色化・黒斑

| 口縁部外面のはみ出し | | | |
|------------|-----|----|----|
| 出る | 出ない | 不明 | 合計 |
| 6 | 1 | 1 | 8 |
| 底部外面の棒状黒斑 | | | |
| 有り | なし | 不明 | 合計 |
| 3 | 0 | 3 | 6 |

第16図 黒色土器の焼成方法
(春日2003より転載)

17図)。観察できた数量が少ないので、「伏せ焼き法」(第16図)の特徴を有するものが多い「久世ほか1996」。旧新津市沖ノ羽遺跡C地区の状況と一致する[春日2003b]。ほぼ同時期の加賀で多いとされる「合わせ口法」(第16図)で焼成されたものは明確でなく、蒲原郡内では「伏せ焼き法」が主体であったと考えるが、一部で口縁部外面にまで黒斑がはみ出ないもの(図版4の8)があり、伏せ焼き法も否定できない。今後、数多くの資料の観察・検討が課題と考える。

D 煮炊具の形態について

谷内A遺跡出土の土師器煮炊具には長甕・小甕・鍋がある。このうち、長甕・小甕にはロクロ成形(ロクロナデ、カキメ、タタキなど須恵器の成形技法)で製作されたものと、口縁端部に面を持ち、ハケ成形された非ロクロ成形のいわゆる西古志型甕がある。また、鍋を含めてロクロ成形されたものの中には、口縁端部が大きく突出したものが認められる。V期における西古志型甕の卓越、VI期における端部つまみ上げ成形の煮炊具の卓越については、既に春日氏が指摘しており[春日2003]。古代に蒲原郡に属する当地域において、西川流域と新津丘陵周辺における諸遺跡とでは様相が異なるとしている。

昭和30年代後半に採集された谷内A遺跡の土器や、旧吉田町の諸遺跡で検出されたVI期頃の煮炊具を第15図に示した。長甕・小甕では谷内A遺跡[本間ほか2000]の16、大坪遺跡[本間ほか2000]の20・21、中組遺跡[川上1996]の30・32・33などが、鍋では江添E遺跡[布施ほか2000]の30・40や野沖遺跡[本間ほか2000]の55~58など、春日氏の指摘するとおり西川流域では端部が上方に大きく突出するものが多い。特に谷内A遺跡で長甕・小甕・鍋の全てに認められ、小甕で特に顕著である。西川流域の一つのタイプとして提示できよう。(仮称)谷内Aタイプの煮炊具と呼称したい。

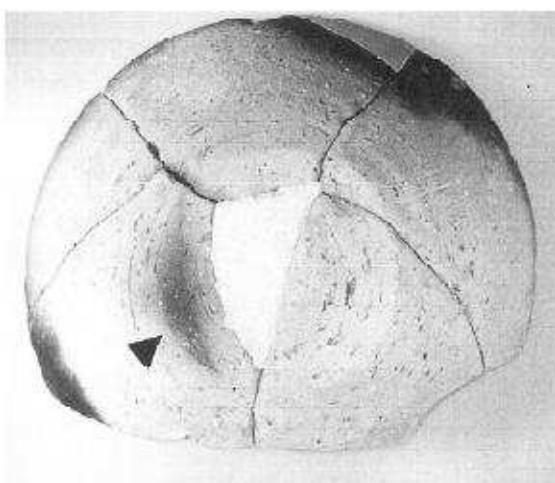
V期における西古志型甕の卓越、VI期における谷内Aタイプの煮炊具の卓越は、同じく蒲原郡に属する新津丘陵とは様相が異なることについて、春日氏は「古墳時代前期(後半)は小型精製器種の形態」の違いも指摘する[春日2003b]。両地域の違いは、更に時代が遡る弥生時代後期後半にも東北南部系土器の受容・防御的集落の機能停止時期等にも現れているようにも思われる。

西川流域において、春日編年VI期で「谷内Aタイプ」の煮炊具が多いことは春日氏の指摘を追認できる。ただし、現状においてこのタイプの広がりは、旧古志郡西部にまで及んでいたか否かは明確でなく、西古志型甕の主要分布範囲と東なるか等、検討すべき問題も多い。

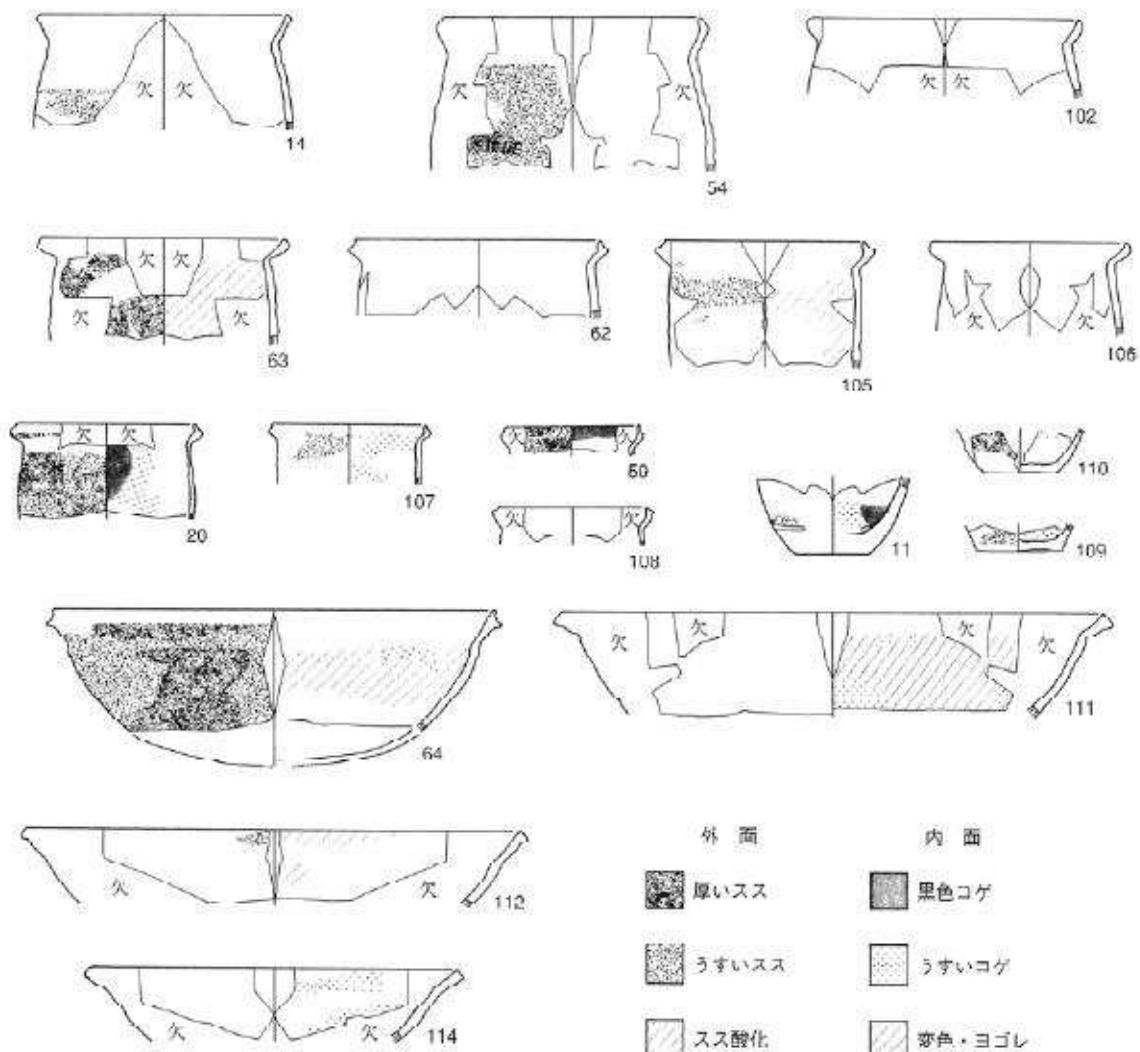
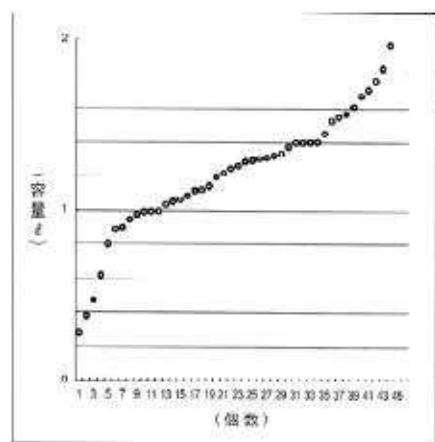
E 煮炊具の使用痕跡について

本遺跡からは数量こそ少ないものの、土師器長甕・小甕・鍋が出土している。残存率は高くないものの、残存部の内外面には黒色付着物が認められる。外面のものがスス、内面のものがコゲで、煮込みに使用された結果、付着したものと考える。

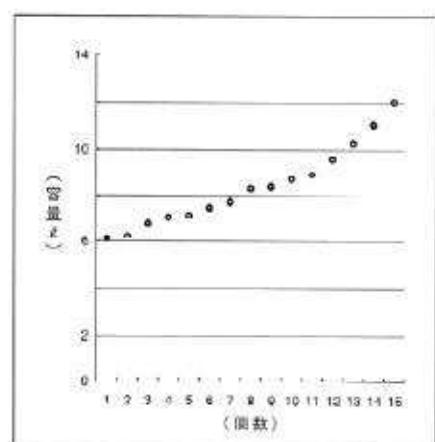
土師器煮炊具の使用方法については、坂井秀弥氏の重要な指摘がある。坂井氏は煮込み具の使用痕跡を



第17図 黒色土器の黒斑(図版7の71)

第18図 谷内A遺跡出土煮炊具の使用痕 ($S = 1/6$)

第19図 小壺の容量分布図



第20図 壺の容量分布図

観察し、長甕と小甕の違いを指摘した。すなわち、長甕は内面にコゲがつかないのに対し、小甕はコゲが付着する。古墳時代後期には竈の導入に伴い飯が出現するが、古代では明瞭でない。この点については木製瓶の存在を推定し、古代の炊飯は長甕で湯沸しを行って蒸した「飯」であり、小甕は「汁物を煮た」ものと推定している〔坂井1988b〕。坂井氏の指摘以来、県内では資料数が飛躍的に増加しているものの、新たな分析例は乏しい。坂井氏が指摘していない煮炊具のうち本稿の鍋について、春日氏が「湯沸」用」と指摘しているにとどまる〔春日2003a〕。全国に目を転じると、小林正史氏による縄文時代・古墳時代前期の甕について一連の研究がある〔小林1997ほか〕。以下では坂井・小林岡氏の研究を参考にしつつ、谷内A遺跡出土の煮炊具の使用方法について検討を試みる。

(1) 谷内A遺跡出土の煮炊具の使用痕跡について

谷内A遺跡出土の煮炊具のうち、比較的残存率が高い個体の使用痕跡を示したのが第18図である。長甕は胴部外面上位から中位にかけて薄いススが付着するものが多いが(54・63・105など)、内面のコゲは明確でなく、わずかに変色が認められる程度である(63・105)。一方で小甕は、口縁部及び胴部外面上位にススが付着したもの(20・59)や、胴部下位の底部付近にススが認められるもの(11・109・110)があるが、底部外面に付着するものは確認できなかった。このことから小甕は地下置きで使用されたと考える。一方、内面のコゲは多くの個体に認められる(20・59・11など)。口縁部に認められるもの(59)、胴部上位に認められるもの(20)、胴部下位に認められるもの(11など)に分かれる。このことから、坂井氏の指摘どおり長甕と小甕では使用痕跡は明確に異なる〔坂井1988b〕。

次に鍋4点についてみてみたい。胴部外面に厚くススが付着する例は1点のみであり、これ以外は残存部においてススが明確でなかった。一方、内面のコゲは比較的薄くパッチ状に付着したもの・変色程度にとどまるものが多い。残存部において胴部内面にコゲが認められるものの、外面にススの痕跡が明瞭でない111・114などは、破損した外面底部付近が被熱してススが付着していた可能性があろう。

(2) 小甕・鍋の大きさと使用痕跡から推定される使用方法について

小甕46個体、鍋16個体の十器容量を求めたのが第19・20図である。計測資料は越後平野に分布し、県埋蔵文化財センター保管の北蒲原郡聖籠町山三賀II遺跡〔坂井ほか1988〕、旧新津市細池・寺道上遺跡〔小池ほか1994〕、沖ノ羽遺跡C地区〔春日2003〕・上浦遺跡〔坂上2003〕、旧黒崎町羽迦堂遺跡〔江口ほか2000〕、旧横越町牛道遺跡〔立木(土橋)1999〕・川根谷地遺跡〔江口2001〕・上郷遺跡〔春日ほか1997〕である。

小甕の容量は0.38~2.4Lまで認められるが、0.9L・1.5L・2.0L付近に断絶が認められ、0.9~1.5Lに30個体(65.2%)が分布する。鍋は6.1~15.0Lまで認められるが、6.5L・8.0L・9.0L付近に緩やかな断絶が認められる。6~9Lに11個体(68.8%)が分布する。

これらの使用痕跡は紙面の関係から図示していないが、小甕44点、鍋15点の使用痕跡を観察した。小甕は外面に上位～下位にかけてススが付着し、内面は口縁部を中心にコゲが付着する例が多い。外面のススは胴部最大径付近に付着するものが多いが、底部外面には認められない。このことから、地下置きで使用されていたと考える。また、内面のコゲについては摩耗が著しく使用痕跡が明確でない4点を除き、40点中23点(57.5%)で認められる。内面のコゲが胴部上位～下位に認められるものは少なく、口縁部付近にコゲが集中する傾向にある。また、小林正史氏により米の炊飯の根柢の一つとされる側面加熱の痕跡は認められなかった〔小林・柳瀬2002〕。吹きこぼれも顯著でないことから、小甕による米炊飯の可能性は低

いと考える。なお、容量と使用痕跡の相関関係については、顕著な傾向が認められなかった。むしろ今回対象とした資料では、細別時期と使用痕跡の関連がありそうである。

鍋は15点の観察を行った。外面のススは口縁部上位から下位まで、底部が残存するものの中では丸底の底面にまで認められるものもあった。このことから、地下置きのものに加え、浮き置きにより加熱されたものもあると考える。内面のコゲは小甕ほど顕著ではない。残存部においてコゲが観察できなかつたものも15点中5点(33.3%)存在する。変色程度のものもあり、内面にコゲが付く例は15点中6点(40.0%)と低い数値を示した。このことから鍋も谷内A遺跡の分析結果と同様に、外面のススは認められるものの、内面のコゲはバッチ状に付くものが多く、内容物はコゲ付く可能性が低いスープ状のもので、水分量が甚だしく低下するものではないと考える。なお、容量と使用痕跡の相関関係については、小甕と同様に顕著な傾向が認められなかった。

最後に小甕・鍋の使用場所についてであるが、古代において確認される竈に設置された可能性は低いと考える。小甕は胴部最大径が長胴甕に比して小さく、鍋は逆に大きいことから竈に固定することは難しい。また、小甕・鍋共に浮き置きでの使用の結果を示す底面の被熱が明瞭でないことからも、竈での使用を肯定できる材料はないといえる。集落内での煮炊き場所については明確にできないが、例えば本遺跡で検出された炭化物集中地点(SC)等での煮炊きを想定すべきであろうか。今後の課題の一つである。

2 遺跡の動向について

遺跡は遺構・遺物の密度から、A・B区に挟まれた県道部分とA区南端の範囲を中心があるものと推定される。ただし、工事立会い調査ではA区より南側では遺構・遺物がほとんど認められないことから、むしろ西側に遺跡が広がる可能性がある。

遺跡の時期は、遺物包含層の最下層X・XI層に9世紀前様～中様の遺物がわずかに認められるが、主体は9世紀後葉～10世紀前葉である。春日2000によれば、本遺跡周辺では該期の遺跡が多数確認され、その多くは存続時期の短く、10世紀前半～12世紀前半の遺跡が減少すると指摘されている。本遺跡もこうした状況を示している。遺構は炭化物集中範囲や溝のはか、工事立会い調査では柱穴が検出されており、周溝がめぐる平地式住居があつた可能性がある。谷内A遺跡の北東2km程にあるほぼ同時期の江添遺跡や大橋遺跡では住居跡などが多数見つかっており、本遺跡もこうした集落跡である可能性が高い。

土壤の科学分析によれば、遺跡の土層は周辺の河川の影響を受けた氾濫性堆積物であり、近くに湿地帯が広がっていたものと推定される。遺跡の中心となるIX・X層は、陸生の珪藻が4割ほどを占め、地表面は安定していた可能性が高い。イネ属の植物珪酸体が本層から多量に検出されたことは、安定した立地環境下で稻作が行われていたのであろう。しかし、Ⅸ層から上位では、水生珪藻が7～8割近くを占め、植物珪酸体もイネ属に代わりコシ属が増加するなど、湿地化していく状況がうかがえる。遺跡もこれに合わせるように衰退している。10世紀以降の遺跡数が減少する原因はさまざま考えられるが、沖積地が湿地化した立地環境もその要因の一つとして挙げられるであろう。

要 約

- 1 谷内A遺跡は、燕市（旧西蒲原郡吉田町）吉田字谷内に所在する。標高は約4.4~5.0mである。
- 2 発掘調査は、国道116号宮永交差点改良事業に伴い平成16年度に実施した。また、同事業に伴い平成16・17年度に工事立会い調査を実施した。調査面積は本発掘調査が360m²、工事立会い調査が195m²、合わせて555m²である。
- 3 遺跡は西川・大通川により形成された自然堤防からやや離れた沖積平野に位置する。
- 4 調査の結果、9世紀前葉~10世紀初頭の遺構・遺物を確認した。
- 5 遺構として土坑1基、溝7条、炭化物集中範囲5か所、井戸1基、柱穴7基、性格不明遺構2基（焼土1か所、粘土ブロック1か所）である。
- 6 遺物は9世紀後半を主体として、須恵器・土師器・黒色土器がある。
- 7 須恵器の食膳具は佐渡小泊産、貯蔵具は佐渡小泊産のはか、新津丘陵産と思われるものが若干出土している。
- 8 上師器の煮炊具のうち長甕では、西古志型甕が認められる。また小甕・鍋を含め、口縁端部上端が上方につまみ上げられたものが目立つ。古代蒲原郡に位置する当施において、地域性を検討する場合に特に重要な形態と考える。

引用参考文献

- 荒川隆史 2004 「谷内A遺跡」『埋文にいがた』47号 財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 2005 「谷内A遺跡」『第12回遺跡発掘調査報告会資料』財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 荒川隆史 2004 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第133集 青田遺跡」新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 江口友子 2000 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第100集 和道堂遺跡」新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 江口友子 2001 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第102集 川根谷内墓所遺跡」新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1997 「第Ⅷ章まとめ 1 土器 B平安時代」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第87集 上郷遺跡Ⅱ』新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1999 「第4章古代 第2節土器編年と地域性」『新潟県の考古学』高志書院
- 春日真実 2000 「第5章まとめ」『吉田町史』資料編1 原始・古代・中世 新潟県吉田町
- 春日真実 2002 「古代吉志郡の考古学的検討－在地努力の動向を中心に－」『新潟考古学講話会』第24号 新潟考古学講話会
- 春日真実 2003a 「第V章遺物 3 下層の土器」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第123集 沖ノ羽遺跡Ⅲ(C地区)』新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 2003b 「第VI章まとめ」『新潟県埋蔵文化財調査報告書第123集 沖ノ羽遺跡Ⅲ(B地区)』新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実 1997 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第87集 上郷遺跡Ⅱ」新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 春日真実・寺崎裕助 1997 「新潟県二島郡和鳥村大武遺跡」『日本考古学年報』40 日本考古学協会

- 川上貞雄 1996 「吉田町文化財調査報告書 第4集 中組遺跡」新潟県吉田町教育委員会
- 久世健二 小林正史・橋場和彦・北野博司 1996 「内面黒色土器の焼成方法」「日本考古学協会第62回総会研究発表要旨」日本考古学協会
- 小池義人(ほか) 1994 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第50集 細池遺跡 寺道上遺跡」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 小林正史 1997 「炭化物からみた弥生時代の器の使い分け」「北陸古代土器研究」第7号 北陸古代土器研究会
- 小林正史・柳瀬明彦 2002 「ヤケとススからみた弥生時代の米の調理方法」「日本考古学」第13号 日本考古学協会
- 坂井秀弥 1988a 「越後・佐渡における古代土器の生産と流通」「シンポジウム北陸の古代土器研究の現状と課題」報告編 石川県考古学研究会・北陸古代土器研究会
- 坂井秀弥 1988b 「古代のごはんは蒸した「飯」であった—古代の米調理法復原メモー」「新潟考古学談話会会報」第2号 新潟考古学談話会
- 坂井秀弥 1990 「新潟県三島郡与板町の製鉄遺跡」「新潟考古」第1号 新潟県考古学会
- 坂井秀弥(ほか) 1988 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第5集 山三賀Ⅱ遺跡」新潟県教育委員会・建設省北陸地方建設局新潟国道工事事務所
- 坂上有紀 2003 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第118集 上浦遺跡」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高濱信行・卜部厚志・寺崎裕助 1999 「味方村排水機場遺跡調査報告書」「味方村史」新潟県味方村
- 高沢規朗 2000 「第4章 吉田町周辺の遺跡」「吉田町史」資料編1 原始・古代・中世 新潟県吉田町
- 立木(上橋)由里子(ほか) 1999 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第91集 牛追遺跡」新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 寺崎裕助 2002a 「沖積地における绳文時代の調査」「新潟県考古学談話会会報」第24号 新潟県考古学談話会
- 寺崎裕助 2002b 「新潟平野の遺跡」「新潟考古」第13号 新潟県考古学会
- 中村孝三郎(ほか) 1986 「根立遺跡」新潟県二島町教育委員会
- 新潟県農地部農地計画課 1974 「下越開発地域 土地分類基本調査 内野 弥彦 5万分の1」
- 長谷川晴一 2000 「第1章 吉田町周辺の地形と遺跡」「吉田町史」資料編1 原始・古代・中世 新潟県吉田町
- 布施智也(ほか) 2000a 「吉田町文化財調査報告書 第5集 江添C遺跡」新潟県吉田町教育委員会・山武考古学研究所
- 布施智也(ほか) 2000b 「吉田町文化財調査報告書 第6集 江添D遺跡」新潟県吉田町教育委員会・山武考古学研究所
- 布施智也(ほか) 2000c 「吉田町文化財調査報告書 第7集 江添E遺跡」新潟県吉田町教育委員会・山武考古学研究所
- 布施智也(ほか) 2002a 「吉田町文化財調査報告書 第8集 江添C・江添D遺跡」新潟県吉田町教育委員会・有限会社日本芸術文化文化財総合研究所
- 布施智也(ほか) 2002b 「吉田町文化財調査報告書 第9集 北小脇遺跡・天神堂遺跡・館屋敷遺跡・大橋遺跡」新潟県吉田町教育委員会・有限会社日本芸術文化文化財総合研究所
- 布施智也(ほか) 2003 「吉田町文化財調査報告書 第11集 十二田遺跡・江添E遺跡」新潟県吉田町教育委員会・加藤建設株式会社
- 本間敏則 2000 「第3章 第1節吉田町の遺跡概観」「吉田町史」資料編1 原始・古代・中世 新潟県吉田町
- 本間敏則 2003 「第2章 第2節古代人の暮らし」「吉田町史」通史編上巻 新潟県吉田町
- 本間敏則・春日真実・布施智也・鳴海忠大・春日優子 2000 「第3章 第3節遺跡各説」「吉田町史」資料編1 原始・古代・中世 新潟県吉田町
- 本間信明・家田順一郎 1976 「新潟県埋蔵文化財調査報告書第5 茶院遺跡」新潟県教育委員会
- 前山耕明 1994 「御井戸遺跡」「卷町史」資料編1 考古 新潟県卷町
- 前山耕明・小野 哲 1994 「豊原遺跡」「卷町史」資料編1 考古 新潟県卷町
- 松島悦了 2001 「燕市埋蔵文化財調査発掘調査報告書第1集 三角田遺跡」新潟県燕市教育委員会
- 山口栄一 1994 「下福場遺跡」「卷町史」資料編1 考古 新潟県卷町
- 山田英雄 1986 「第5章2節 国郡制の成立整備」「新潟県史」通史編1 原始・古代 新潟県

土器觀察表

凡例

- 1 法量 () は推定値である。
- 2 調整 「口」は口縁部、「胴」は胴部、「底」は底部、「外」は外側、「内」は内側を表す。
- 3 口残 口縁部残存率を $x/36$ で表した。
- 4 脱土 土師器・黒色土器の脱土は、石英・雲母・長石を含むが、粘土粒を含むものをA類、含まないものをB類とした。
概してA類の素地は粒子が粗い傾向にある。

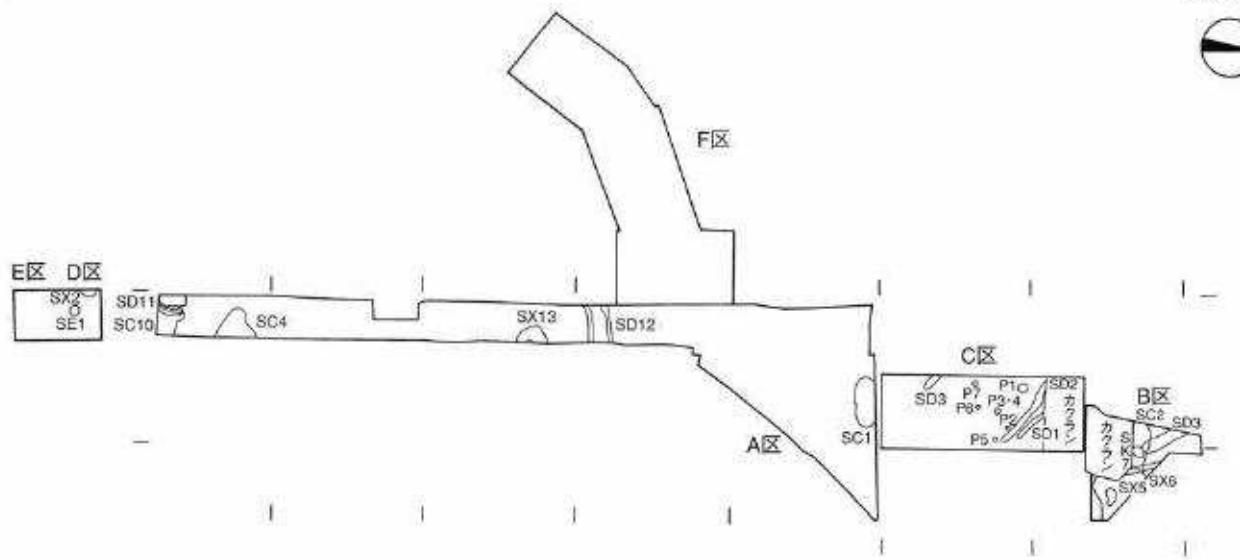
| 報告 No | 種類 | 器種 | 出土位置 | | | 法量 | | 脱 土 | 色 調 | 感 度 | 調整 | 口 残 | 備考 | |
|----------|------|-------|------------------|------------------------|------|------|-----|--------|--------|--------|-------|--------------------------|--------------------------|--------------|
| | | | グリッド等 | 遺構 | 層位 | 口径 | 器高 | | | | | | | |
| 1 | 土師器 | 無台輪I | 4A21 | SC1 | 1 | 11.2 | 4.2 | 5.2 | 2 | 暗橙色 | 良 | ロクロナデ、底部外側回転ヘラ削り | 10 ロクロの回転方向(左) | |
| 2 | 土師器 | 無台輪I | 4A21 | SC1 | 1 | 12.2 | 3.7 | 6.2 | 1 | 棕色 | 良 | ロクロナデ、底部外側回転系切跡 | 5 | |
| 3 | 土師器 | 無台輪I | 4A16 | SC1 | 1 | 12.8 | 6.2 | 6.2 | 1 | 暗橙色 | 良 | ロクロナデ、底部外側回転系切跡 | 4 | |
| 4 | 黒色土器 | 台付碗 | 4A21 | SC3 | 1 | | | | 5.6 | 1 | 暗褐色 | 良 | ロクロナデ、内曲ミカギ、底部外側回転ヘラ削り | 底面張糊なし |
| 5 | 土師器 | 長甕IIa | 4A11 | SC1 | 1 | 18.4 | | | 1 | 褐色 | 良 | ロクロナデ、凹線 | 6 | |
| 6 | 土師器 | 無台輪I | 2B8 | SC2 | 1 | 11.6 | | | 1 | 暗褐色 | 良 | ロクロナデ | 2 | |
| 7 | 土師器 | 無台輪II | 2B8 | SC2 | 1 | 14.2 | | | 2 | 暗褐色 | 良 | ロクロナデ | 3 | |
| 8 | 黒色土器 | 無台輪II | 2B8 | SC2 | 1 | 15.3 | | | 1 | 暗褐色 | 良 | ロクロナデ | 6 | |
| 9 | 土師器 | 小甕IIa | 2B2 | SC2 | 1 | 11.8 | | | 2 | 暗橙色 | 良 | ロクロナデ | 4 | |
| 10 | 土師器 | 小甕 | 2B2 | SC2 | 1 | | | | 1 | 褐色 | 良 | 底部外側ヘラケズリ | | |
| 11 | 土師器 | 小甕 | 3A28、 3B2-8 | SC3、 SD5 | 1 | | | | 5.9 | 2 | 褐色 | 良 | 脇部下径、底部外側ヘラケズリ、 ロクロナデ | ロクロの回転方向(左)? |
| 12 | 土師器 | 長甕IIb | 2B8 | SC2 | 1 | 17 | | | 1 | 褐色 | 良 | ロクロナデ | 4 | |
| 13 | 土師器 | 長甕IIb | 2B8 | SC2 | 1 | 21 | | | 2 | 褐色 | 良 | ロクロナデ、凹線 | 3 | |
| 14 | 土師器 | 長甕IIb | 2B1-7 | SC2 | 9、IX | 20.9 | | | 1 | 褐色 | 良 | ロクロナデ | 9 | |
| 15 | 頬窓器 | 甕 | | SC2 | 2 | | | | D | 暗褐色灰色 | 良 | 外：平行タタキ、内：同心円当て具 | | |
| 16 | 頬窓器 | 長甕 | 2B8 | SC2 | 1 | | | | A | 青灰褐色 | 良 | ロクロナデ | | |
| 17 | 頬窓器 | 甕 | 2B8 | SC2 | 1 | 27.9 | | | A | 淡青灰褐色 | 良 | ロクロナデ、 脇部外側・平行タタキ | 4 | |
| 18 | 頬窓器 | 甕 | 2A21、 2B1-4-8 | SC2、 SD1+2号、 SD3 | 1 | | | | A | 暗青灰褐色 | 良 | 脇部内側：同心円当て具、 その他ロクロナデ | ロクロの回転方向(左) | |
| 19 | 土師器 | 無台輪I | 2A21 | SD3 | 2 | 16.4 | | | 1 | 褐色 | 良 | ロクロナデ | 7 | |
| 20 | 土師器 | 長甕IIa | 2B2 | SD4 | 1、IX | 14.4 | | | 1 | 暗褐色 | 良 | ロクロナデ | 4 | |
| 21 | 土師器 | 無台輪I | 8A7 | SC9 | 1 | 11.4 | 3.9 | 5.8 | 1 | 褐色 | 良 | ロクロナデ、底部外側回転系切跡 | 5 | |
| 22 | 土師器 | 無台輪I | 8A7 | SC9 | 1 | 13.3 | | | 1 | 褐色 | 良 | ロクロナデ | 6 | |
| 23 | 土師器 | 無台輪I | 8A7 | SC9 | 1 | 12.2 | | | 1 | 褐色 | 良 | ロクロナデ | 3 | |
| 24 | 土師器 | 無台輪I | 8A7 | SC9 | 1 | 11.5 | | | 1 | 褐色 | 良 | ロクロナデ | 9 | |
| 25 | 土師器 | 無台輪I | 8A4 | SC10 | 1 | 11.6 | | | 1 | 褐色 | 良 | ロクロナデ | 5 | |
| 26 | 土師器 | 小甕IIa | 8A4 | SC10 | 1 | 12.4 | | | 1 | 褐色 | 良 | ロクロナデ | 5 | |
| 27 | 土師器 | 長甕IIa | 6A9 | SC10 | 1 | 17.2 | | | 1 | 褐色 | 良 | ロクロナデ | 3 | |
| 28 | 頬窓器 | 長甕 | 8A9 | SC10 | 1、IX | | | | A | 青灰褐色 | 良 | ロクロナデ | | |
| 29 | 土師器 | 長甕I | 4A17 | | XI、X | 17.9 | | | 1 | 暗橙色 | 良 | 脇部外側：ハケメ | 4 | |
| 30 | 土師器 | 長甕I | 6A16 | | XI | 21.2 | | | 1 | 褐色 | 良 | 脇部内側：ハケメ | 16 | |
| 31 | 土師器 | 長甕I | 4A16-17.5A5 | | XI | 22 | | | 1 | 暗橙色 | 良 | 脇部内外面：ハケメ | 16 | |
| 32 | 土師器 | 長甕I | 4A14 | | X | 21.2 | | | 1 | 褐色 | 良 | 脇部内側：ハケメ | 9 | |
| 33 | 土師器 | 長甕I | 4A16 | | X | 16.9 | | | 2 | 褐色 | 良 | ロクロナデ | 3 | |
| 34 | 頬窓器 | 有台杯 | 5A5 | | X | 11.2 | | | B | 淡青灰褐色 | 良 | ロクロナデ | 6 | |
| 35 | 土師器 | 無台輪 | 9A21 | | Y | | | | 5.4 | 1 | 褐色 | 良 | ロクロナデ | |
| 36 | 頬窓器 | 無台杯 | 6A10 | | X | | | | 6.8 | A | 淡青灰褐色 | 良 | ロクロナデ | ロクロの回転方向(右) |
| 37 | 頬窓器 | 無台杯I | 8A4 | | X | 11.4 | | | A | 淡青灰褐色 | 良 | ロクロナデ | 3 ロクロの回転方向(右) | |
| 38 | 土師器 | 無台輪I | 6A1 | | X | 14.2 | | | 1 | 褐色 | 不良 | ロクロナデ | 4 | |
| 39 | 土師器 | 無台輪 | 8A6 | | X | | | | 5.8 | 1 | 暗橙色 | 不良 | ロクロナデ | |
| 40 | 黒色土器 | 無台輪 | 8A4 | SD11 | 1 | | | | 5 | 2 | 暗橙色 | 良 | ロクロ内外面：ガサ、 底部外側ヘラ削り | 底部外側に黒運 |
| 41 | 土師器 | 長甕IIa | 8A9 | | X | 17.4 | | | 1 | 褐色 | 不良 | ロクロナデ | 8 | |
| 42 | 頬窓器 | 甕 | 4A23 | | X | 27 | | | B | 暗青灰褐色 | 良 | ロクロナデ | 5 | |
| 43 | 執事器 | 長甕臺 | 2B2-3 | SC2 | 1 | 10 | | | B | 暗青灰褐色 | 良 | ロクロナデ | 25 | |
| 44 | 頬窓器 | 長甕臺 | 4A21、 包凸唇上面 | | X、IX | | | | 10.2 | A | 青灰褐色 | 自 柄部底辺回転ヘラ削り | ロクロの回転方向(右) | |
| 45 | 土師器 | 無台輪I | 4A17 | | X | 10 | | | 1 | 褐色 | 不良 | ロクロナデ | 6 | |
| 46 | 土師器 | 無台輪I | 4A16 | | X | 11.8 | | | 1 | 褐色 | 不良 | ロクロナデ | 3 | |
| 47 | 土師器 | 無台輪I | 3B1 | | X | 12.3 | 2.5 | 5.8 | 1 | 褐色 | 良 | ロクロナデ | 20 | |
| 48 | 土師器 | 無台輪 | 4A21 | | X | | | | 4.2 | 1 | 暗橙色 | 良 | ロクロナデ | |
| 49 | 土師器 | 無台輪 | 4A11 | | X | | | | 5.5 | 2 | 暗橙色 | 良 | ロクロナデ | |
| 50 | 土師器 | 長甕IIb | 1A25 | | X | 18 | | | 2 | 暗橙色 | 良 | 脇部内側：カキメ・ロクロナデ | 4 | |
| 51 | 土師器 | 長甕IIb | 4A16 | | X | 22.1 | | | 1 | 褐色 | 良 | ロクロナデ | 3 | |
| 52 | 土師器 | 長甕IIb | 3B13 | | X | 23.8 | | | 1 | 褐色 | 不良 | ロクロナデ | 3 | |
| 53 | 土師器 | 鍋IIb | 4A23 | | X | 35 | | | 1 | 暗橙色 | 良 | ロクロナデ | 3 | |
| 54 | 土師器 | 長甕IIa | 8A4 | 搅乱 | 21 | | | | 1 | 褐色 | 良 | 脇部内外面：カキメ・ロクロナデ | 3 | |
| 55 | 頬窓器 | 接瓶 | C IX.5 | | X層 | | | | B | 青灰褐色 | 良 | 外面：滑子目状タタキ、 内面：カキメ | | |
| 56 | 頬窓器 | 甕 | C IX.4 | | II層 | | | | A | 青灰褐色 | 良 | 外面：滑子目状タタキ、 内面：同心円文 | | |

| 報告 番 | 種 類 | 時 代 | 出土位置 | | | 法 量 | 胎 土 | 色 調 | 焼 成 | 調 査 | 口 径 | 備 考 | |
|---------|--------|--------|---------|------|------|--------|--------|--------|--------|-------------|-------------------------------|-------------|--------------------|
| | | | グリッド等 | 遺構 | 層位 | | | | | | | | |
| 57 | 土師器 | 無台碗 | C区6 | II層 | | 5.0 | | 1 橙色 | 不良 | 底:回転名切り | | 摩耗激しい | |
| 58 | 黒色土器 | 無台碗I | C区 | SD15 | | (13.0) | | 2 咬合色 | 良 | 口:ロクロナデ | 1 | | |
| 59 | 土師器 | 小盃IIa | C区 | SD15 | | (11.0) | | 2 咬合色 | 良 | ロクロナデ | 3 | | |
| 60 | 黒色土器 | 無台碗I | C区 | SD14 | | (13.0) | | 2 橙色 | 良 | 口:ロクロナデ | 1 | | |
| 61 | 土師器 | 無台碗I | C区 | SD14 | | (11.0) | | 2 橙色 | 良 | 口:ロクロナデ | 5 | | |
| 62 | 土師器 | 長盃IIa | C区3 | SD14 | Ⅶ-X層 | 20.0 | | 3 赤褐色 | 良 | 胴部内面:ハケ | 11 | | |
| 63 | 土師器 | 長盃IIb | C区3・8 | SD14 | Ⅶ-X層 | (20.0) | | 3 咬合色 | 良 | 胴部内外面:ロクロナデ | 2 | | |
| 64 | 土師器 | 碗IIb | C区2・6・8 | SD14 | Ⅶ-X層 | 30.0 | | 1 橙色 | 良 | 胴部下位内外面:タタキ | 11 | | |
| 65 | 須恵器 | 無台杯I | C区6 | | Ⅶ-X層 | 13.0 | 7.0 | 2.8 | A 青灰色 | 良 | 口:ロクロナデ。底:回転ヘラ削り | 6 | ロクロの回転方向(右) |
| 66 | 須恵器 | 無台杯I | C区6 | | Ⅶ-X層 | 17.0 | 7.0 | 3.0 | A 淡青灰色 | 良 | 口:ロクロナデ。底:回転ヘラ削り | 12 | ロクロの回転方向(左) |
| 67 | 須恵器 | 無台杯I | C区6 | | Ⅶ-X層 | 12.0 | | | A 淡青灰色 | 良 | ロクロナデ | 5 | |
| 68 | 須恵器 | 無台杯I | C区5 | | Ⅶ-X層 | (12.0) | | | A 淡青灰色 | 良 | ロクロナデ | 3 | |
| 69 | 須恵器 | 無台杯I | C区1・2 | | Ⅶ-X層 | 12.0 | | | A 白灰色 | 不良 | 口:ロクロナデ | 5 | |
| 70 | 須恵器 | 無台杯I | C区8 | | Ⅶ-X層 | 7.0 | | | A 淡青灰色 | 良 | 口:ロクロナデ。底:回転ヘラ削り | ロクロの回転方向(左) | |
| 71 | 黒色土器 | 無台碗I | C区4 | | Ⅶ-X層 | 13.2 | 5.6 | 4.3 | 2 咬合色 | 良 | ロクロ部外面低位:ヘラ削り | 21 | ロクロの回転方向(右) |
| 72 | 黒色土器 | 無台碗I | C区6 | | Ⅶ-X層 | 12.5 | 4.6 | 4.9 | 1 白棕色 | 良 | 口:ロクロナデ。底:回転ヘラ削り | 8 | ロクロの回転方向(左),底部外周黒度 |
| 73 | 黒色土器 | 無台碗I | C区8 | | Ⅶ-X層 | (13.5) | 6.0 | 4.8 | 2 咬合色 | 良 | ロクロ部外面低位:ヘラ削り,剥落か所存り | 3 | ロクロの回転方向(左) |
| 74 | 黒色土器 | 無台碗I | C区7 | | Ⅶ-X層 | (14.0) | | | 2 咬合色 | 良 | ロクロナデ | 3 | |
| 75 | 黒色土器 | 無台碗I | C区6 | | Ⅶ-X層 | (12.0) | | | 1 咬合色 | 良 | ロクロナデ | 4 | |
| 76 | 黒色土器 | 無台碗I | C区8 | | Ⅶ-X層 | | 6.0 | | 2 咬合色 | 不良 | 底:回転ヘラ削り | 摩耗激しい | |
| 77 | 土師器 | 無台碗II | C区1・2 | | Ⅶ-X層 | (15.0) | | | 1 橙色 | 良 | ロクロナデ | 4 | |
| 78 | 土師器 | 無台碗II | C区8 | | Ⅶ-X層 | 15.4 | | | 1 咬合色 | 不良 | ロクロナデ | 17 | 摩耗激しい |
| 79 | 土師器 | 無台碗II | C区一括 | | Ⅶ-X層 | (15.0) | | | 1 混色 | 不良 | ロクロナデ | 4 | 摩耗激しい |
| 80 | 土師器 | 無台碗II | C区4 | | Ⅶ-X層 | 14.0 | | | 1 咬合色 | 良 | ロクロナデ | 7 | |
| 81 | 土師器 | 無台碗I | C区3 | | Ⅶ-X層 | 12.0 | 5.6 | 3.1 | 1 橙色 | 不良 | 口:ロクロナデ。底:回転条切り | 5 | 摩耗激しい |
| 82 | 土師器 | 無台碗I | C区1・2 | | Ⅶ-X層 | 12.5 | 5.2 | 3.9 | 1 棕色 | 良 | ロクロナデ | 13 | |
| 83 | 土師器 | 無台碗I | C区4 | | Ⅶ-X層 | 12.0 | 6.0 | 3.8 | 1 棕色 | 良 | ロクロナデ。底:回転条切り | 4 | |
| 84 | 土師器 | 無台碗I | C区4 | | Ⅶ-X層 | 11.0 | 4.8 | 3.6 | 1 棕色 | 良 | ロクロナデ。底:回転条切り | 2 | |
| 85 | 土師器 | 跳台碗I | C区1・2 | | Ⅶ-X層 | 11.4 | 5.2 | 3.8 | 1 咬合色 | 小良 | ロクロナデ。底:回転条切り | 7 | |
| 86 | 土師器 | 無台碗I | C区1・2 | | Ⅶ-X層 | 12.0 | | | 1 棕色 | 良 | ロクロナデ | 8 | |
| 87 | 土師器 | 無台碗I | C区8 | | Ⅶ-X層 | 11.0 | | | 1 棕色 | 不良 | ロクロナデ | 5 | |
| 88 | 土師器 | 無台碗I | C区4 | | Ⅶ-X層 | 13.0 | | | 1 咬合色 | 不良 | ロクロナデ | 6 | |
| 89 | 土師器 | 無台碗I | C区9 | | Ⅶ-X層 | (12.0) | | | 1 赤褐色 | 良 | ロクロナデ | 2 | |
| 90 | 土師器 | 無台碗I | C区8 | | Ⅶ-X層 | | 6.2 | | 1 棕色 | 不良 | 底部外面ヘラ削り | ロクロの回転方向(左) | |
| 91 | 土師器 | 無台碗I | C区1・2 | | Ⅶ-X層 | | 6.0 | | 1 棕色 | 良 | 底部外面ヘラ削り 内:縫隙外周及び底部外周+ヘラ削り | ロクロの回転方向(左) | |
| 92 | 須恵器 | 甕 | C区8 | | Ⅶ-X層 | 16.0 | | | A 青灰色 | 良 | ロクロナデ | 5 | |
| 93 | 須恵器 | 甕 | C区8 | | Ⅶ-X層 | | | | A 青灰色 | 良 | ロクロナデ | | |
| 94 | 須恵器 | 甕 | C区10 | | Ⅶ-X層 | | | | A 紫灰色 | 良 | ロクロナデ | | |
| 95 | 須恵器 | 甕 | C区8 | | Ⅶ-X層 | | | | B 青灰色 | 良 | ロクロナデ | | |
| 96 | 須恵器 | 甕 | C区8 | | Ⅶ-X層 | (31.0) | | | B 青灰色 | 良 | ロクロナデ | 3 | |
| 97 | 須恵器 | 甕 | C区? | | Ⅶ-X層 | | | | A 深褐色 | 良 | 外:脂子タタキ、内:脂押さえ・平行タタキ | | |
| 98 | 須恵器 | 甕 | C区1・2 | | Ⅶ-X層 | | | | A 青灰色 | 良 | 外:格子タタキ、内:平行タタキ | | |
| 99 | 須恵器 | 甕 | C区 | | Y層 | | | | A 青灰色 | 良 | 外:格子タタキ、内:格子タタキ | | |
| 100 | 須恵器 | 甕 | C区1・2・3 | | Ⅶ-X層 | | | | A 青灰色 | 良 | 外:格子タタキ、内:笛子アラベ | | |
| 101 | 須恵器 | 甕 | C区 | | Ⅶ-X層 | | | | A 青灰色 | 良 | 外:格子タタキ、内:笛子アラベ | | |
| 102 | 土師器 | 長盃IIb | C区1・2 | | Ⅶ-X層 | 20.0 | | | 1 橙色 | 良 | 胴部外周:カキメ | 5 | |
| 103 | 土師器 | 長盃IIb | C区8 | | Ⅶ-X層 | (22.0) | | | 1 白棕色 | 不良 | ロクロナデ | 3 | |
| 104 | 土師器 | 長盃IIb | C区8 | | Ⅶ-X層 | 17.0 | | | 1 咬合色 | 良 | ロクロナデ | 5 | |
| 105 | 土師器 | 反甕IIa | C区8 | | Ⅶ-X層 | (16.0) | | | 1 咬合色 | 不良 | 胴部外周:ロクロナデ | 4 | |
| 106 | 土師器 | 長甕IIb | C区8 | | Ⅶ-X層 | 14.0 | | | 1 咬合色 | 良 | 胴部外周:カキメ | 5 | |
| 107 | 土師器 | 小甕IIa | C区3 | | Ⅶ-X層 | 12.4 | | | 1 咬合色 | 良 | 胴部内外面:ロクロナデ | 15 | |
| 108 | 土師器 | 小甕IIa | C区一括 | | Ⅶ-X層 | (12.0) | | | 1 棕色 | 不良 | 底部外周:回転条切付 | 2 | |
| 109 | 土師器 | 甕 | C区8 | | Ⅶ-X層 | 6.0 | | | 2 咬合色 | 不良 | 底部外周:回転条切付 | | |
| 110 | 土師器 | 甕 | C区8 | | Ⅶ-X層 | 5.0 | | | 1 咬合色 | 良 | 底部外周:回転条切付 | | |
| 111 | 土師器 | 甕IIb | C区1・2・3 | | Ⅶ-X層 | 44.0 | | | 2 咬合色 | 良 | 胴部下位内外面:タタキ | 7 | |
| 112 | 土師器 | 甕IIb | C区2・4・8 | | Ⅶ-X層 | (40.0) | | | 2 咬合色 | 良 | ロクロナデ | 4 | |
| 113 | 土師器 | 甕IIa | C区6・8 | | Ⅶ-X層 | 35.0 | | | 1 棕色 | 不良 | ロクロナデ | 8 | |
| 114 | 土師器 | 甕IIb | C区1・4 | | Ⅶ-X層 | (30.0) | | | 1 咬合色 | 良 | 胴部下位内外面:タタキ | 4 | |
| 115 | 土師器 | 無台碗I | D区 | SE23 | | 12.2 | 4.6 | 4.2 | 2 咬合色 | 良 | 口:ロクロナデ、底:回転名切り | 20 | |
| 116 | 須恵器 | 無台杯I | D区4 | | X層 | (12.0) | 2.6 | 7.6 | A 青灰色 | 良 | 口:ロクロナデ、底:回転ヘラ削り | 3 | |
| 117 | 須恵器 | 無台杯I | D区2 | | X層 | (12.0) | | | A 青灰色 | 良 | ロクロナデ | 2 | |
| 118 | 須恵器 | 甕 | D区2 | | X層 | | | | A 青白灰色 | 良 | 胴部内外面:ロクロナデ | | |

図 版

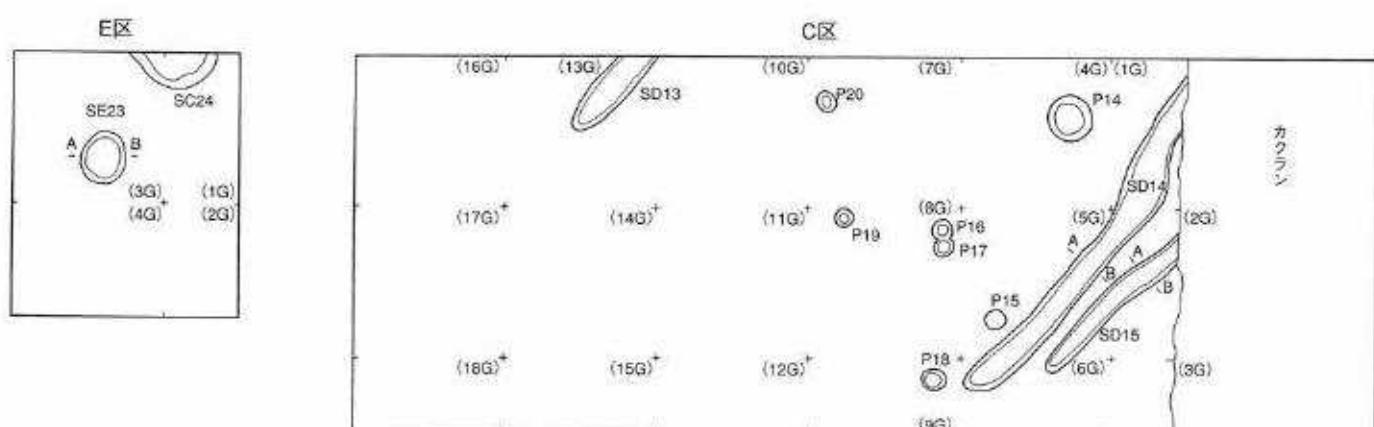
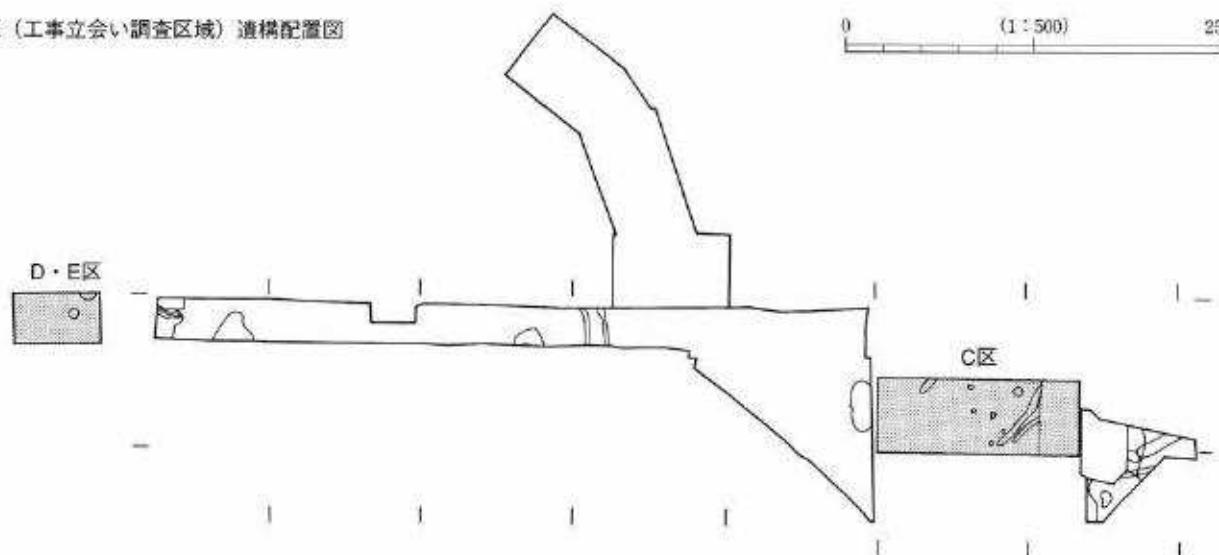
凡 例

1. 各図版には縮尺率及びスケールを付した。
2. 土器図版のうち、黒色土器の黒色部にはスクリーントーンを付した

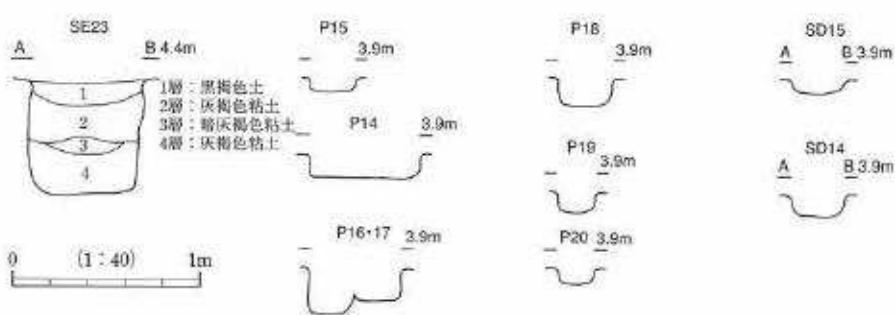


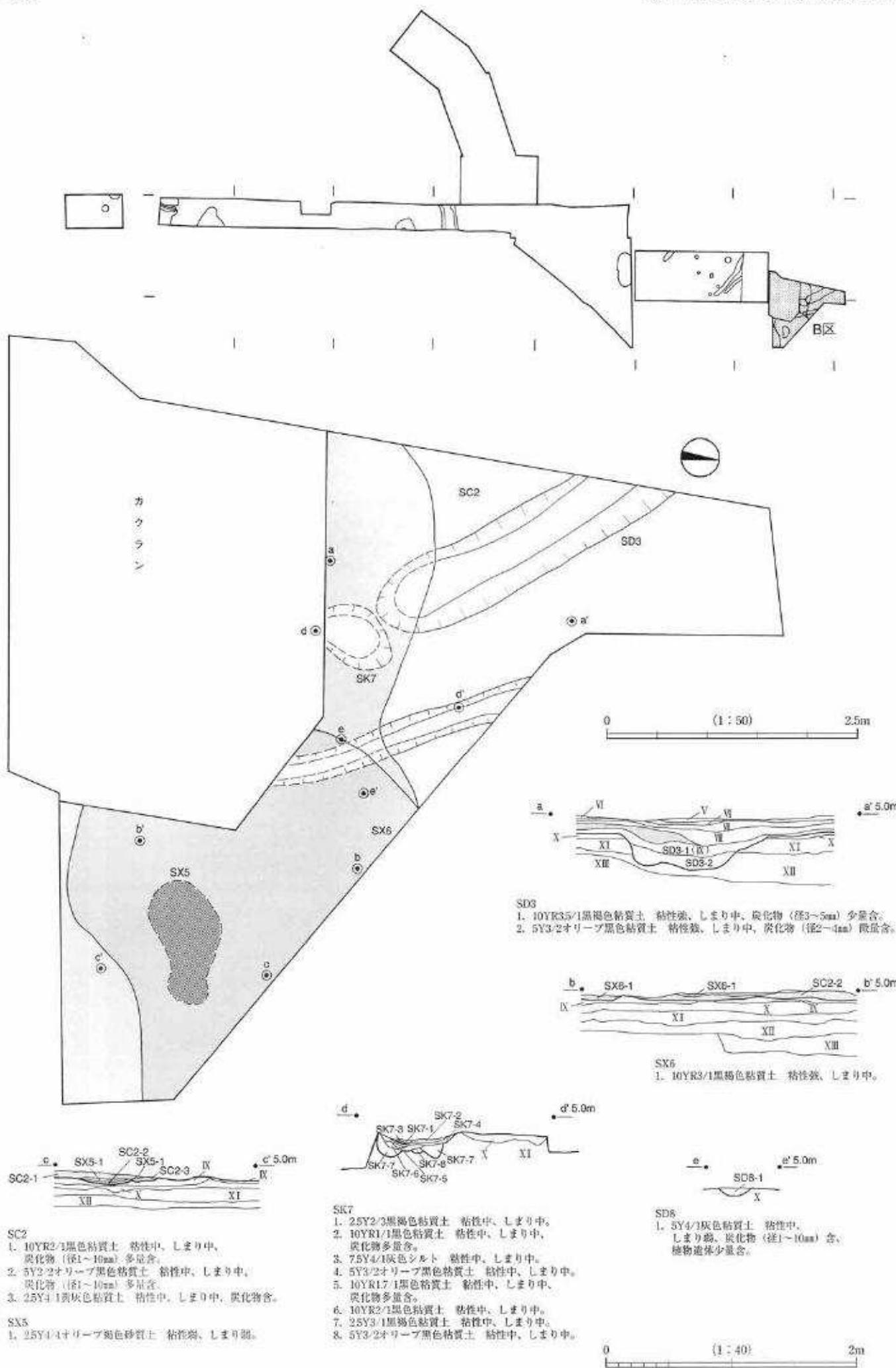
C・D・E区（工事立会い調査区域）遺構配置図

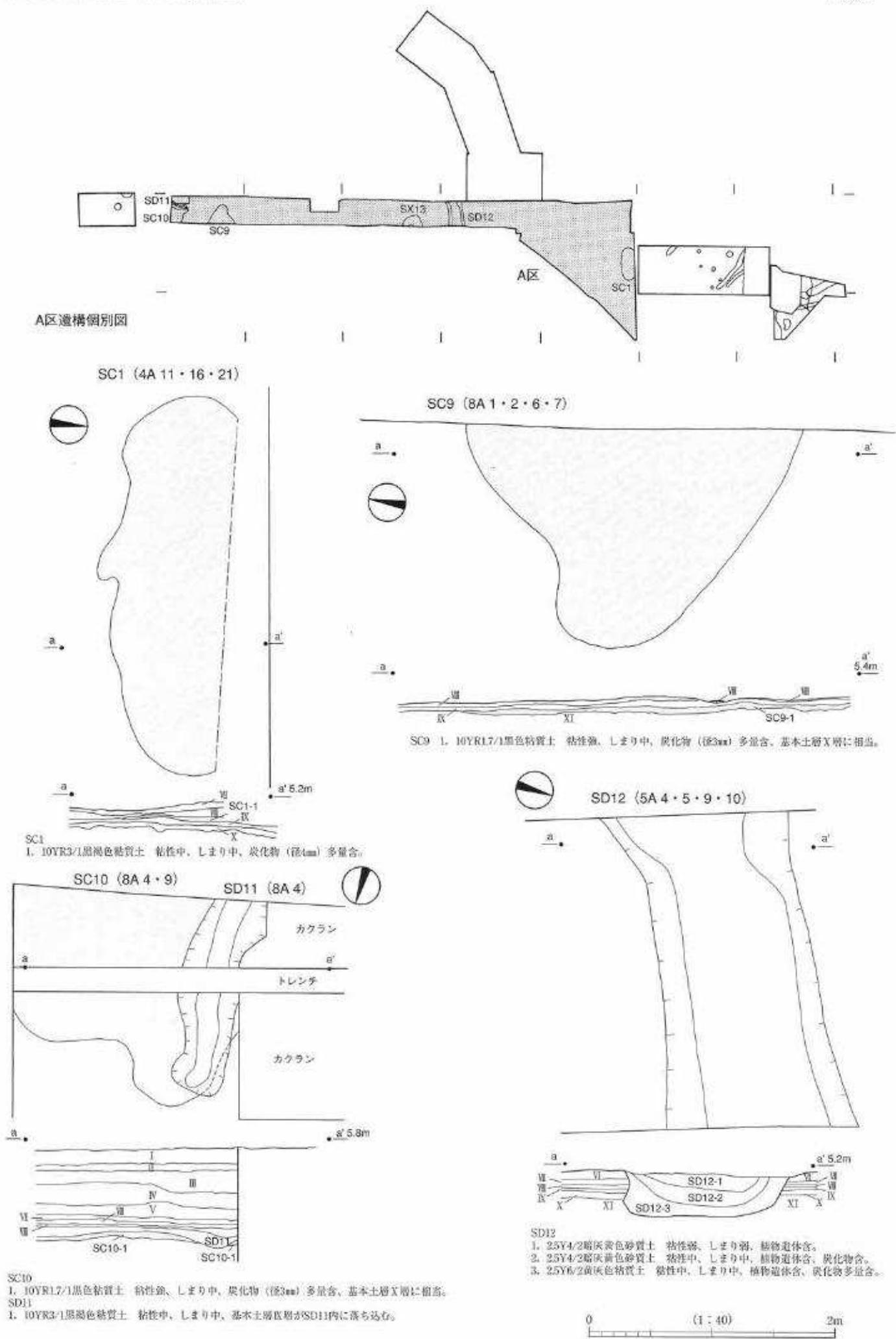
0 (1:500) 25m



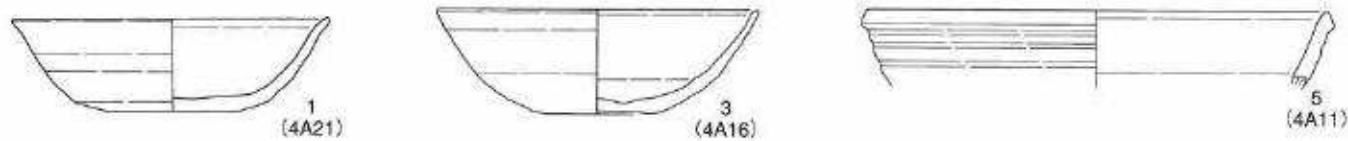
0 (1:100) 5m



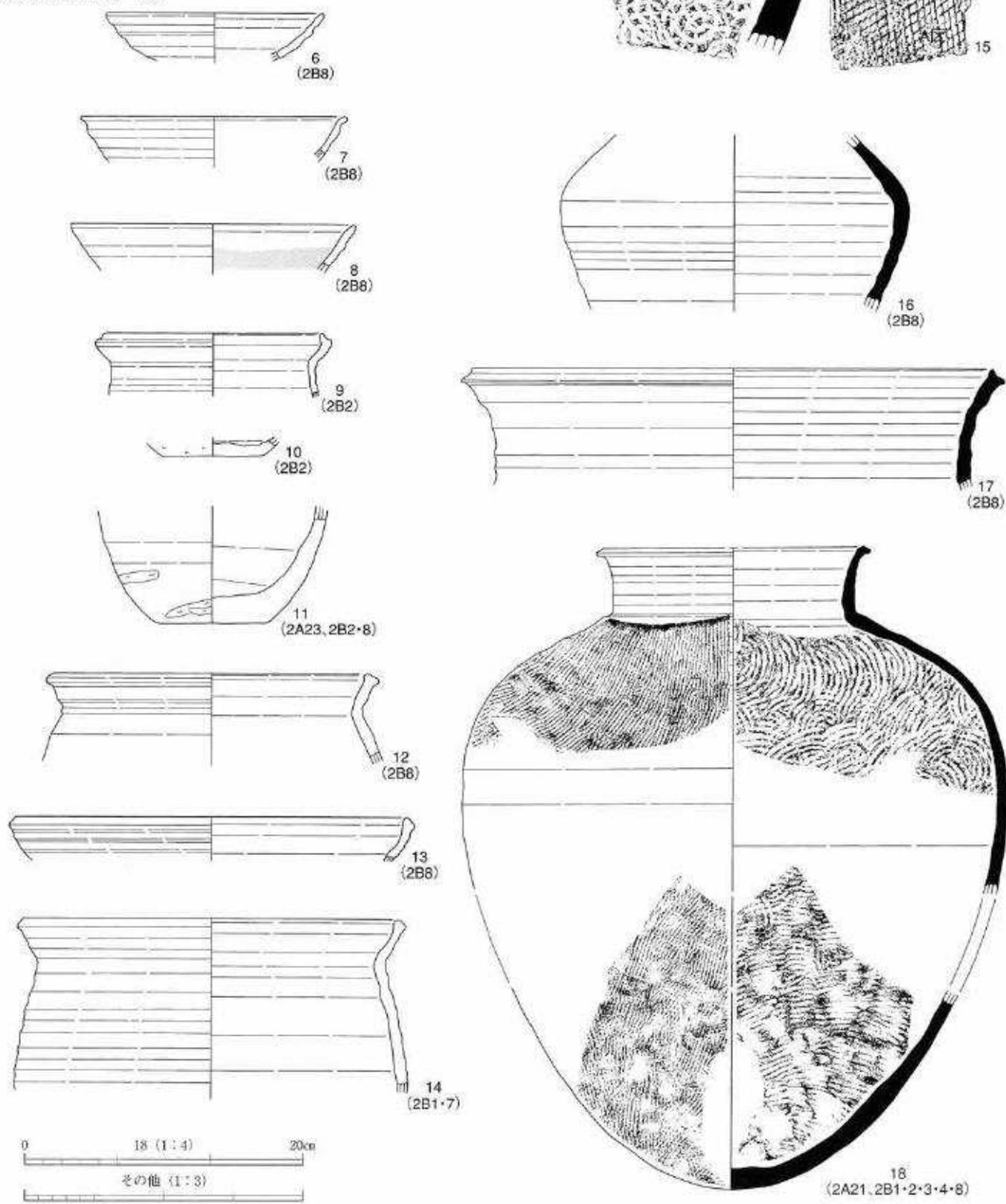


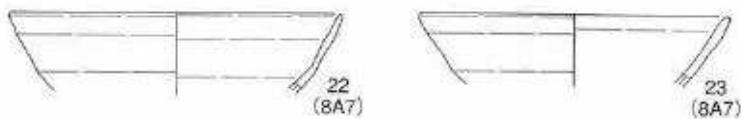
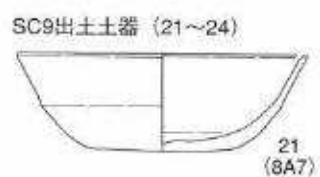


SC1出土土器 (1~5)

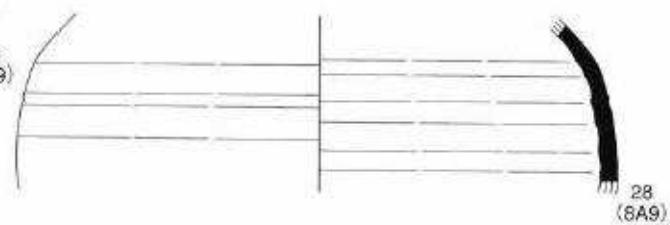
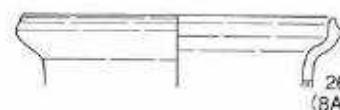
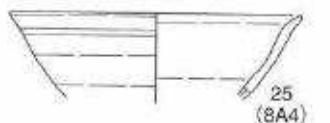


SC2出土土器 (6~18)

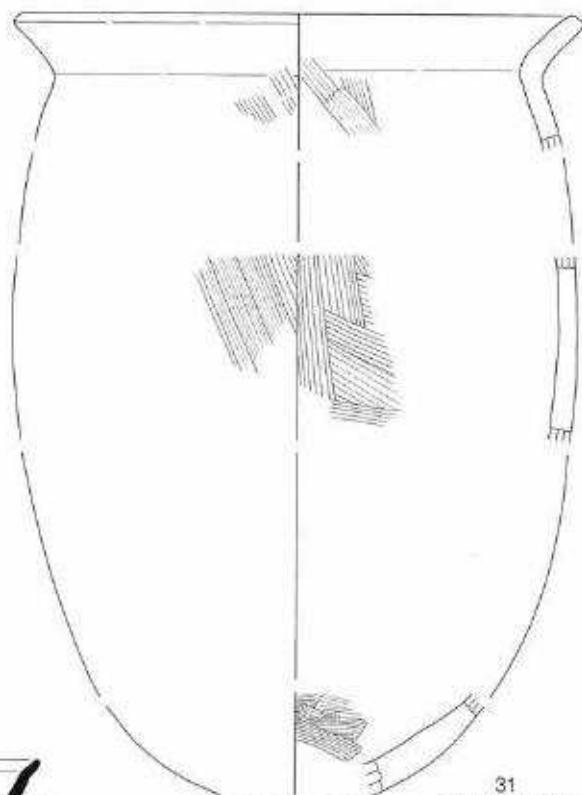
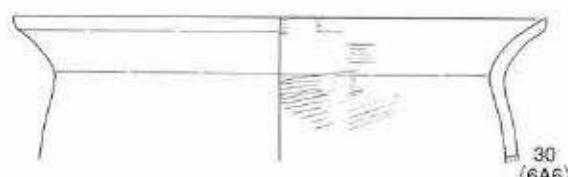
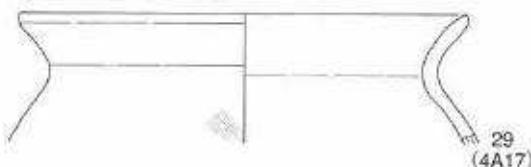




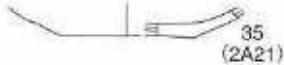
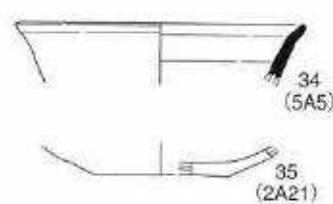
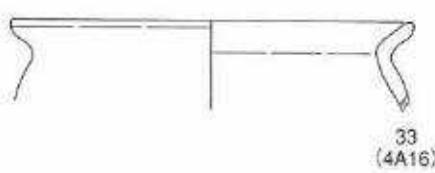
SC10出土土器 (25~28)



XI層出土土器 (29~31)

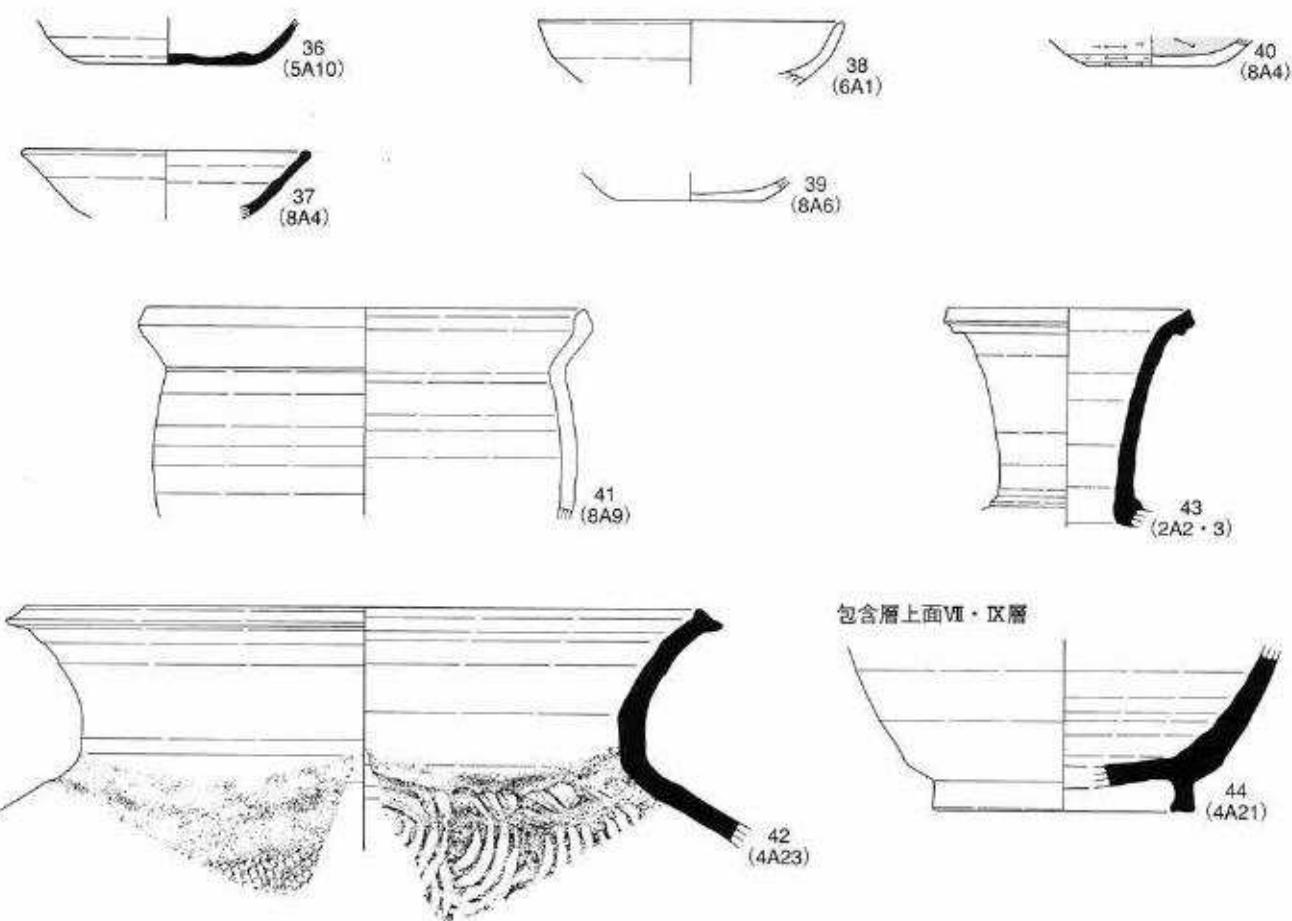


X層出土土器 (32~35)

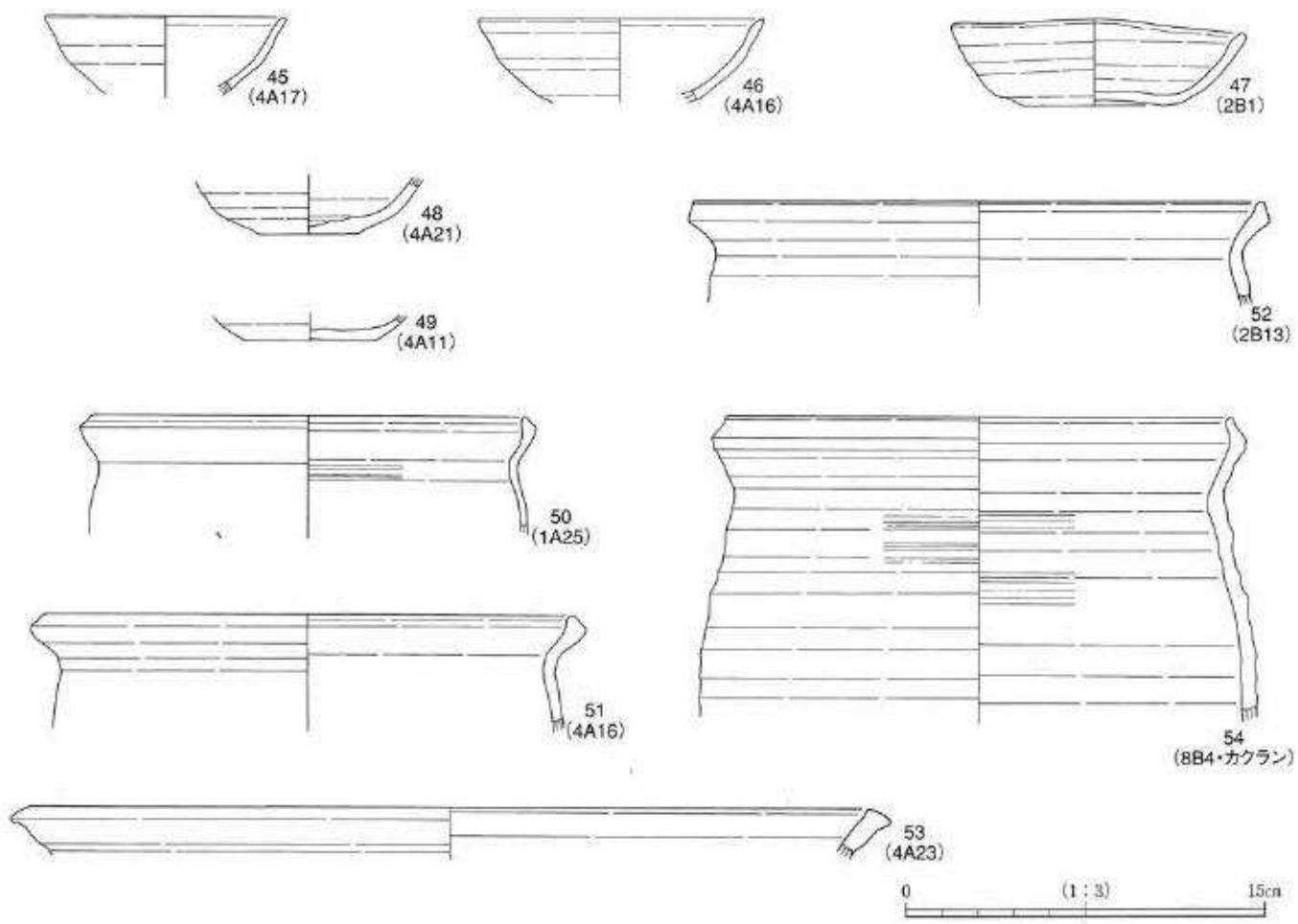


0 (1 : 3) 15cm

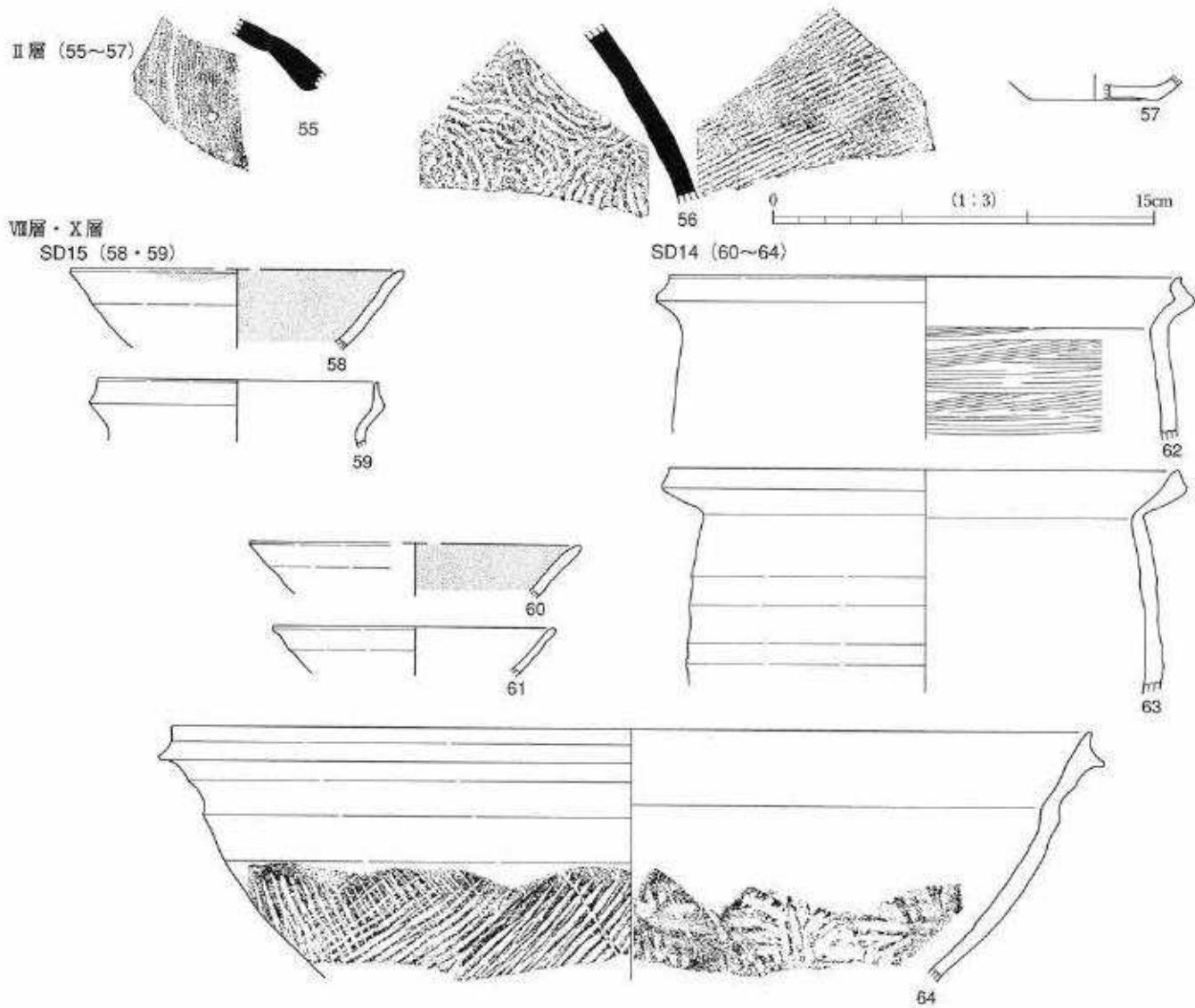
IX 层出土土器 (36~44)



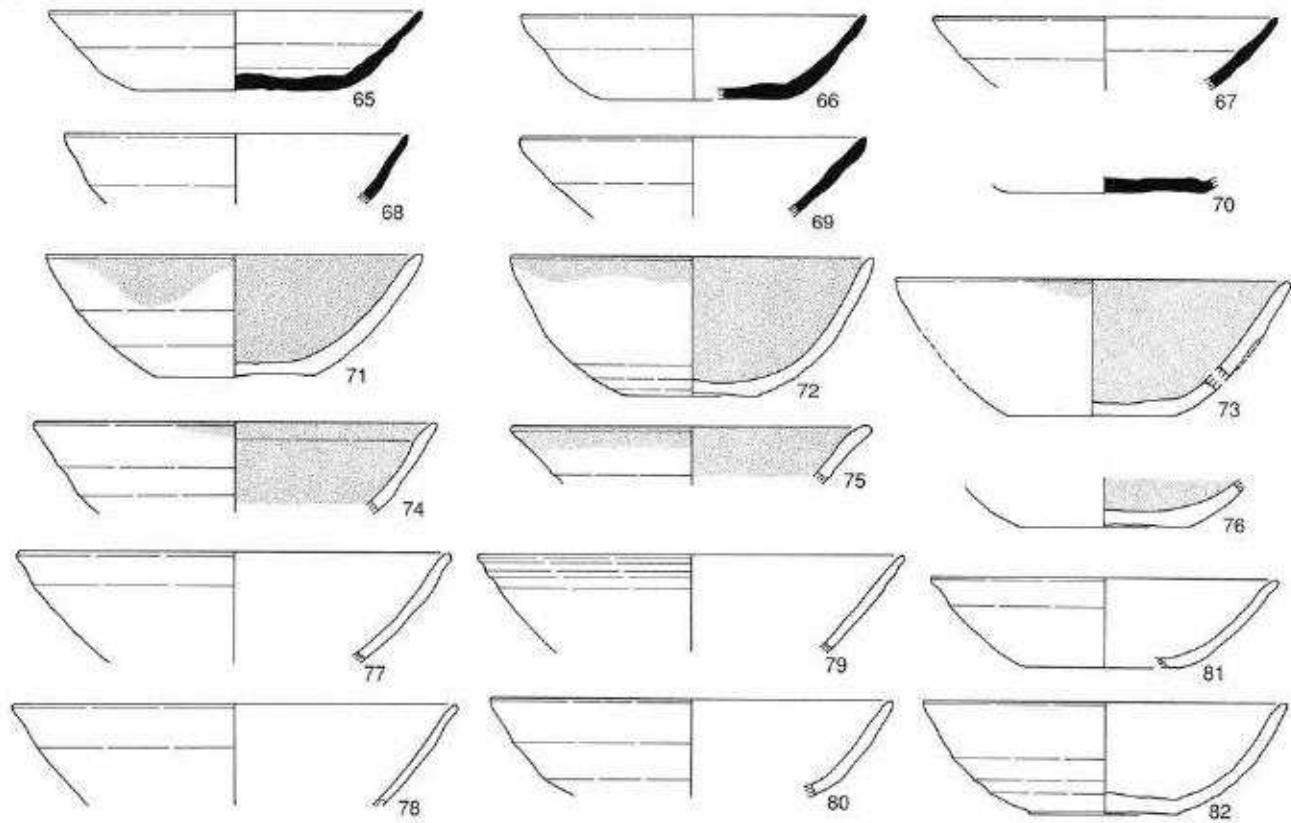
VII 层出土土器 (45~53)

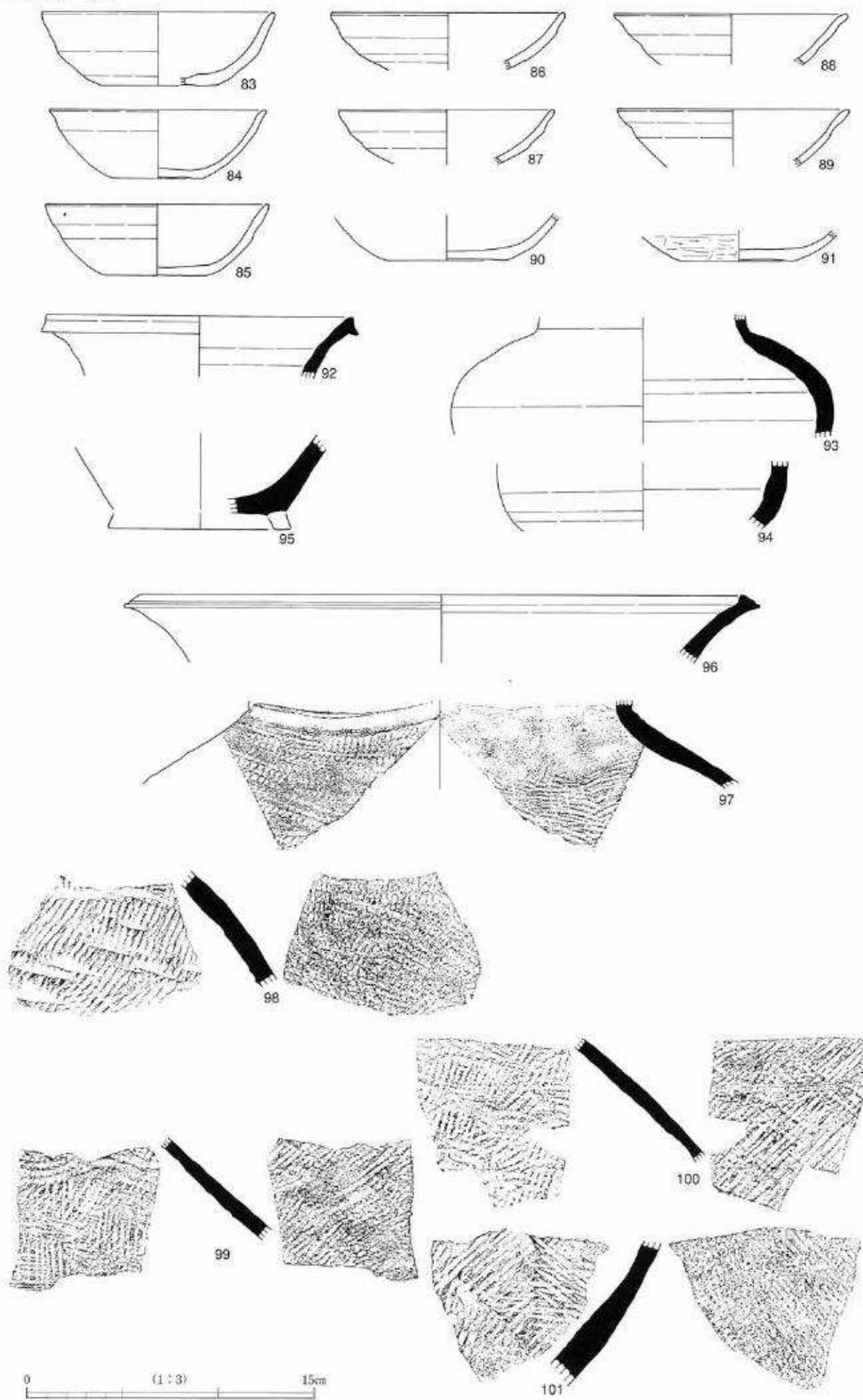


0 (1 : 3) 15cm

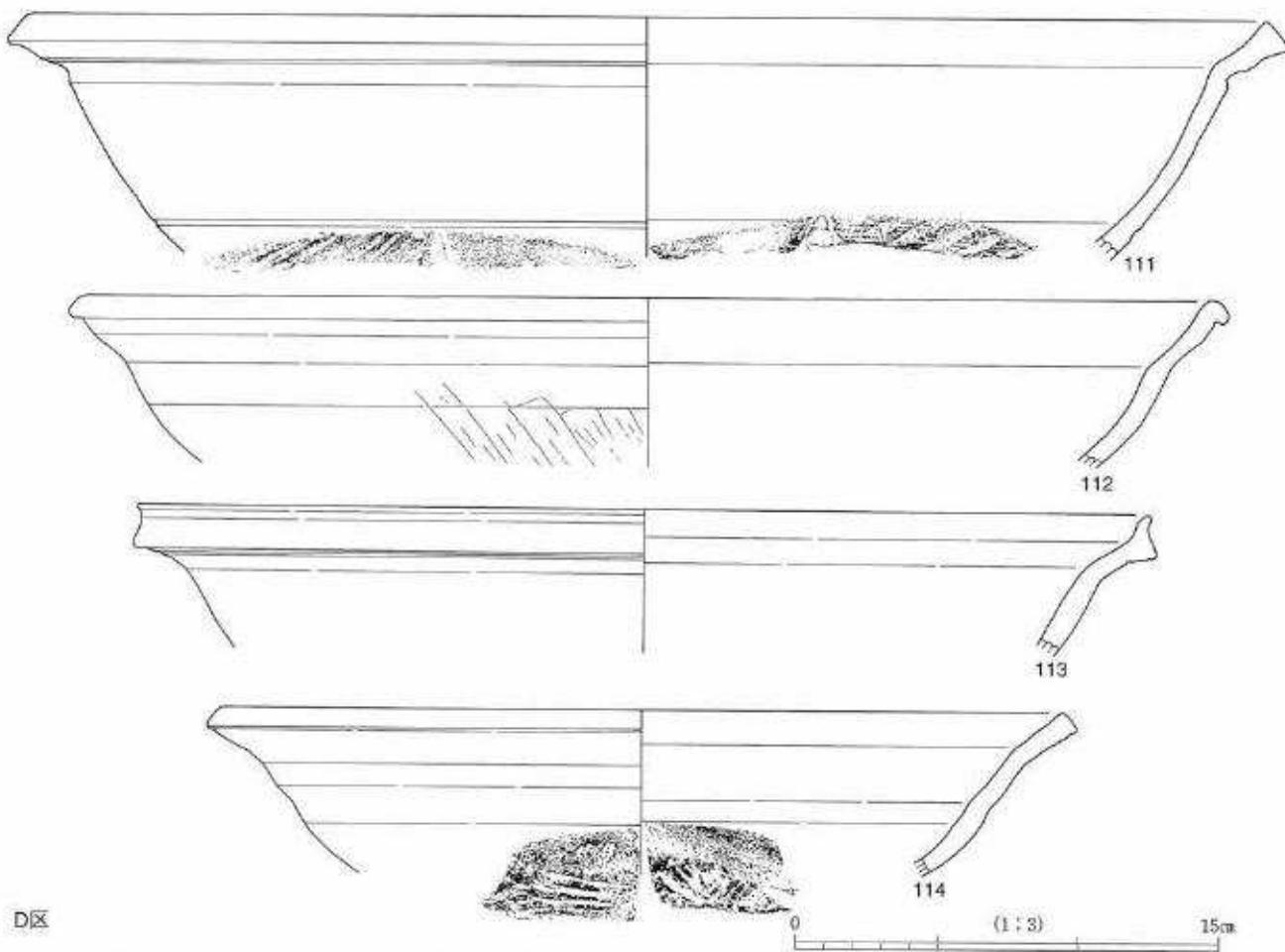
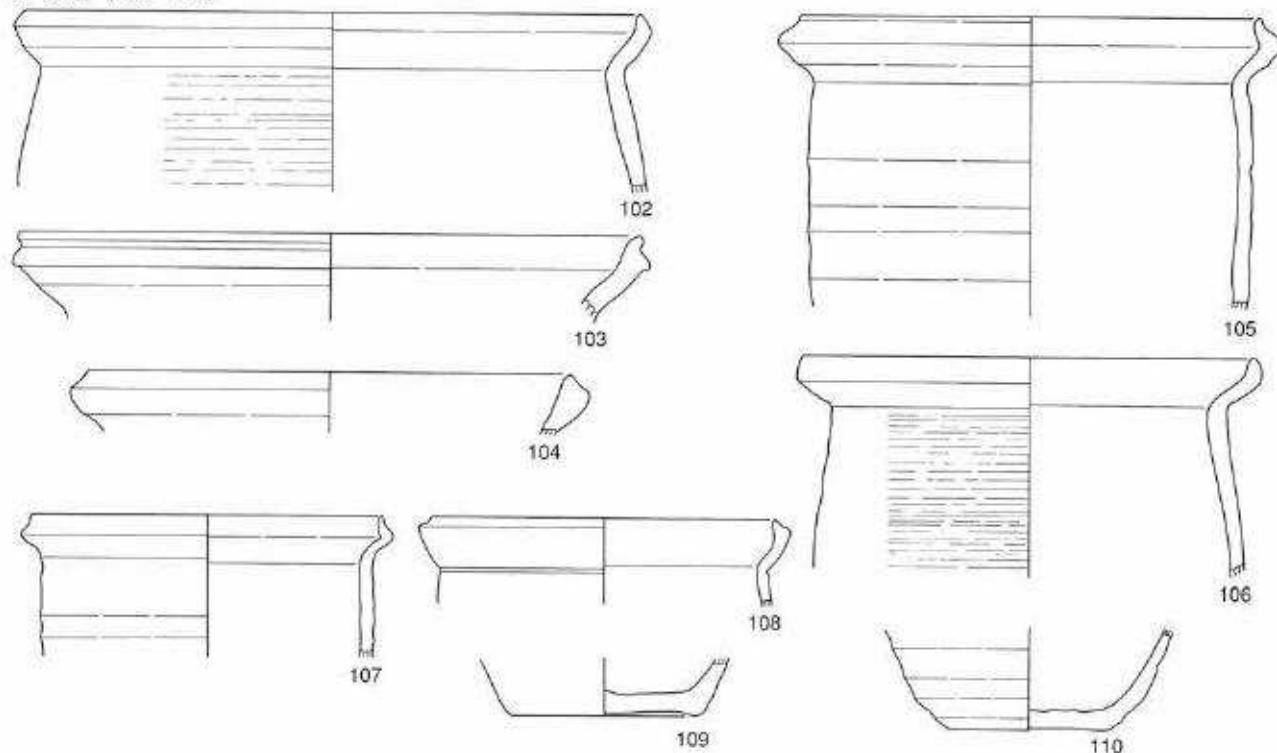


VII・X層 (65~82)



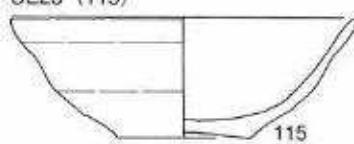


VII・X層 (102~114)

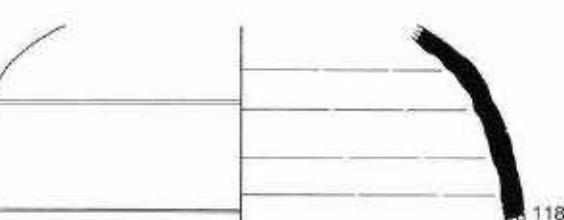
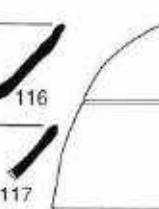
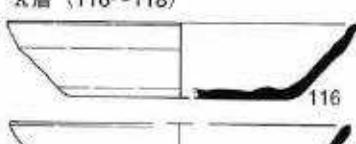


D区

SE23 (115)



X層 (116~118)

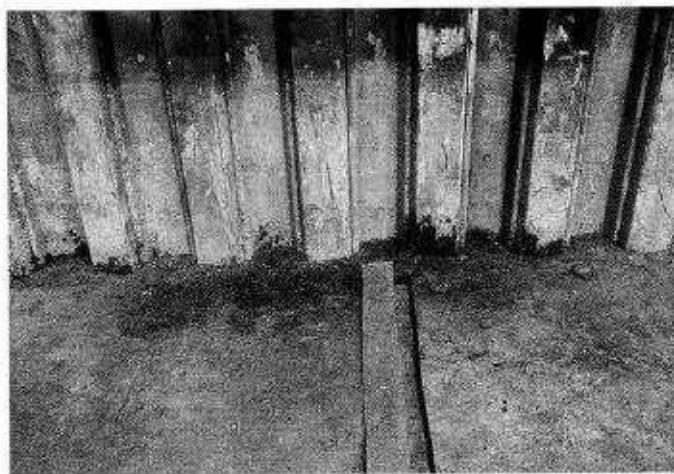




遺跡全景 北から



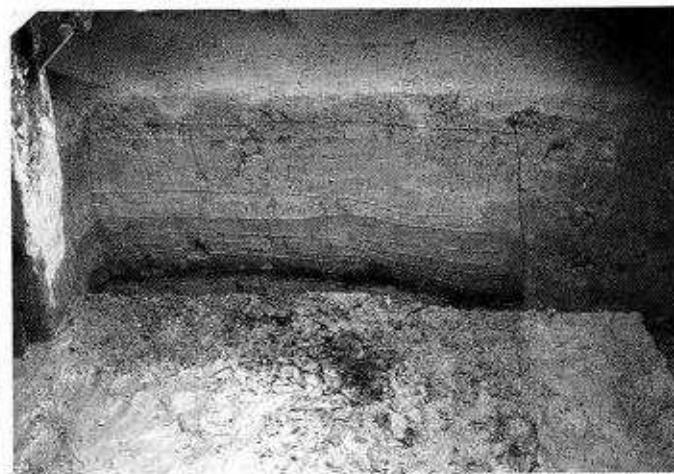
基本土層セクション (4B6) 東から



SC1検出 (4A11・16・21) 南から



SC1セクション (4A11・16・21) 東から



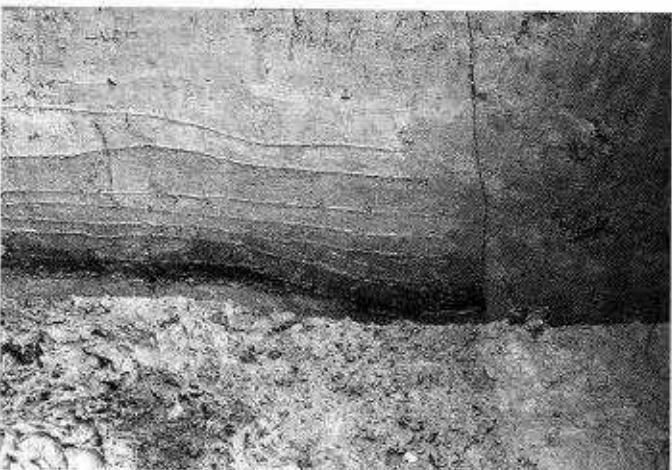
基本土層セクション (8B4・9) 北から



SC 9 検出状況 (8 A 1・2・6・7) 北西から



SC10 検出状況 (8 A 4・9) 北西から



SD11 検出状況及びセクション (8 A 4・9) 北西から



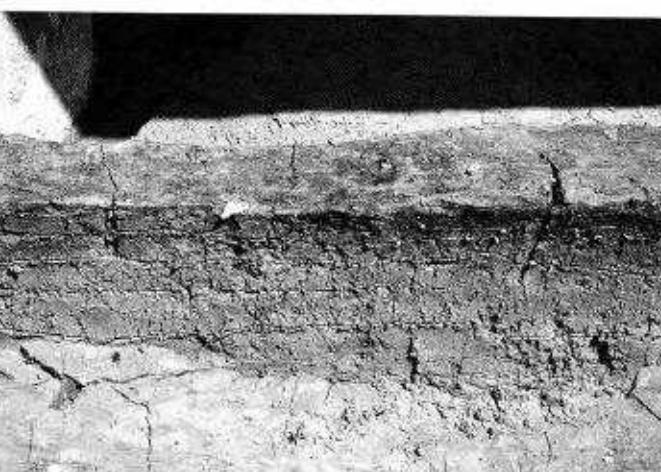
B区完掘 南から



A区完掘 北から



SC 2 遺物出土状況 (2 A 22、2 B 2・3・7・8・9・13・14) 北西から



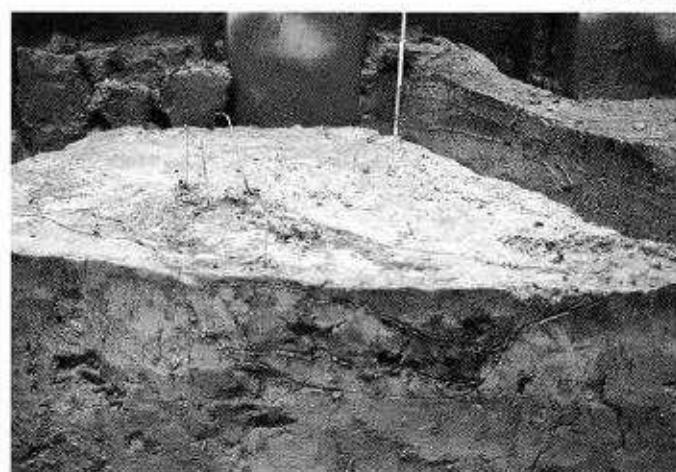
SC 2・SX 5・SX 6 セクション (2 B 8) 西から



SX5 (2 B 8) 検出状況



SK7セクション (2B2) 南東から



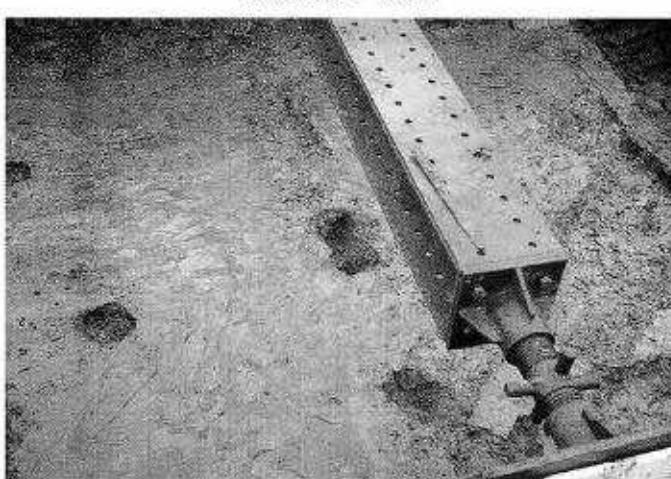
SD8セクション (2B1・2) 南から



B区遺構検出 東から



C区完掘 南東から



C区完掘2 東から



C区セクション 東から

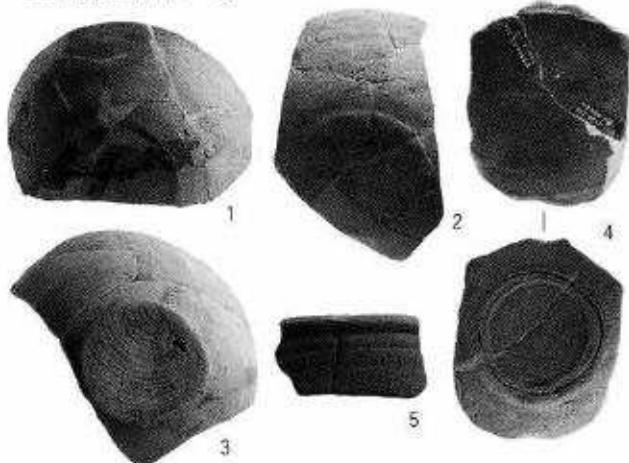


D区遺構検出状況 東から

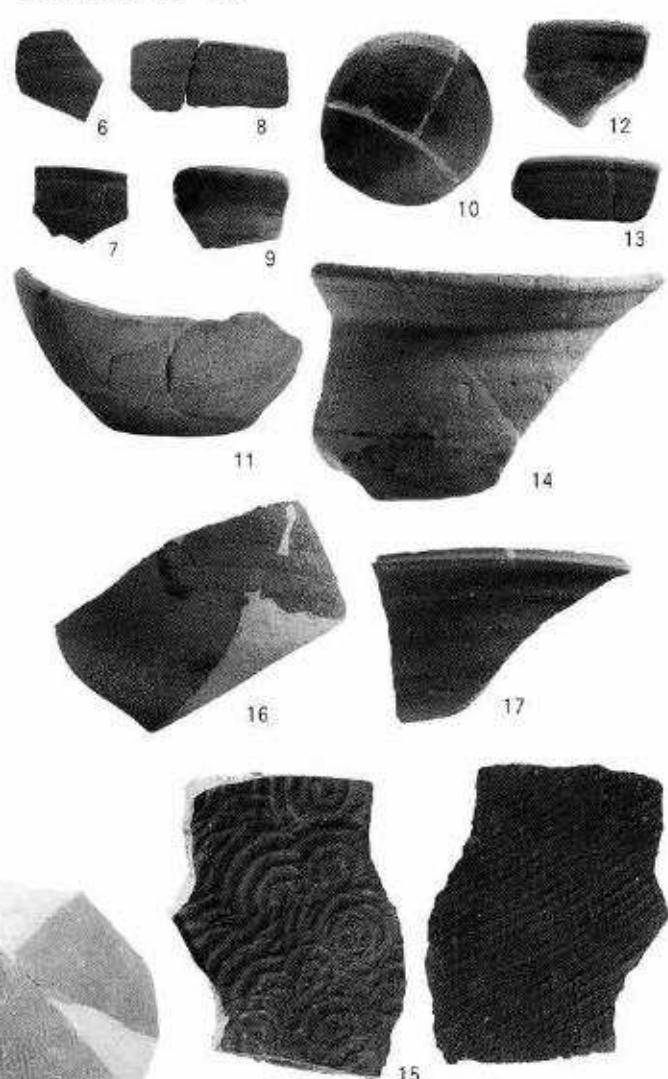


F区西側 北東から

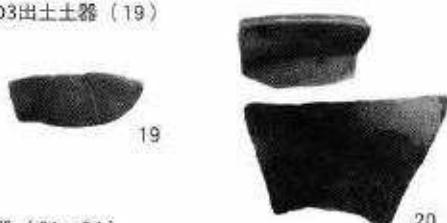
SC1 出土土器 (1~5)



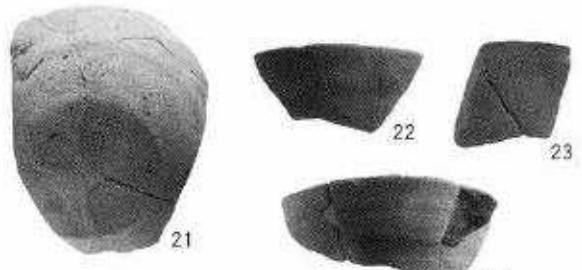
SC2 出土土器 (6~18)



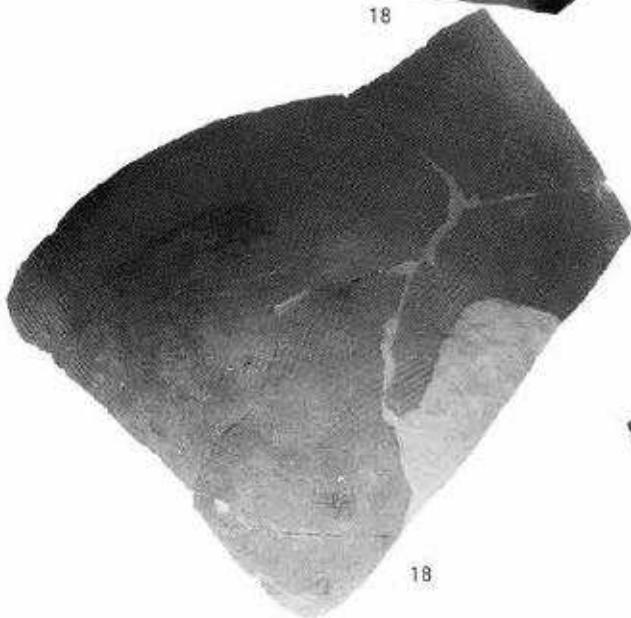
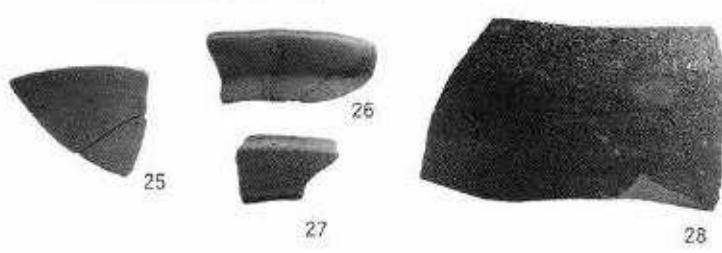
SD4 出土土器 (19)



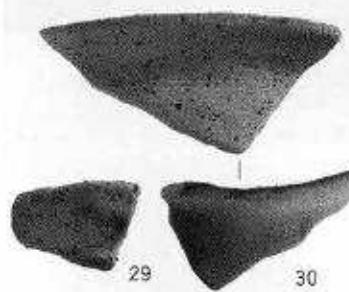
SC9 出土土器 (21~24)



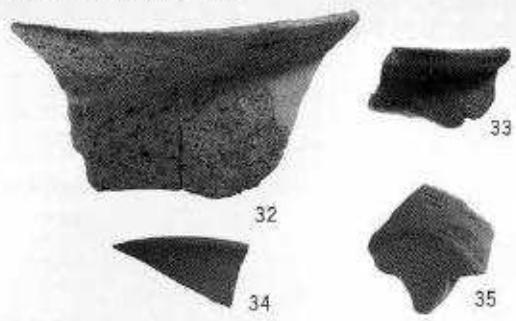
SC10 出土土器 (25~28)



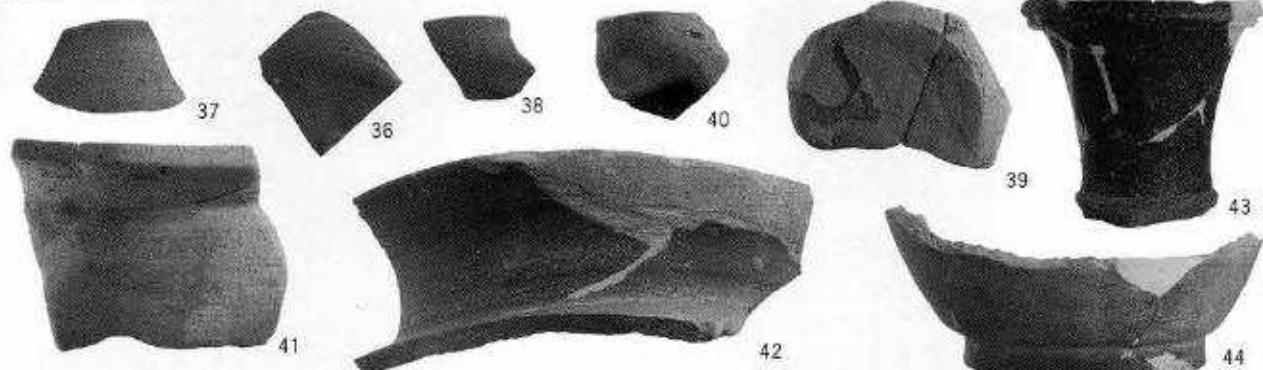
X層出土土器 (29~31)



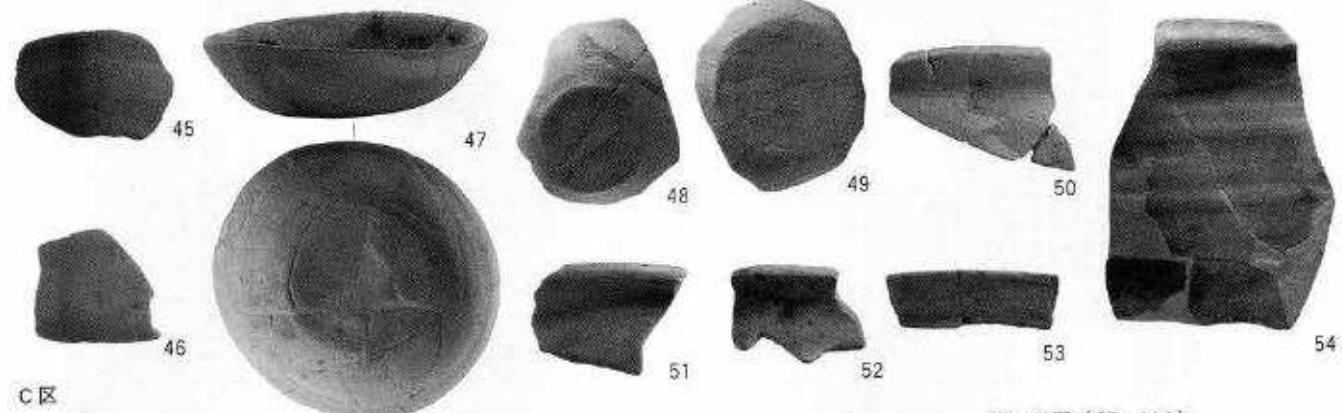
X層出土土器 (32~35)



IX層出土土器 (36~44)

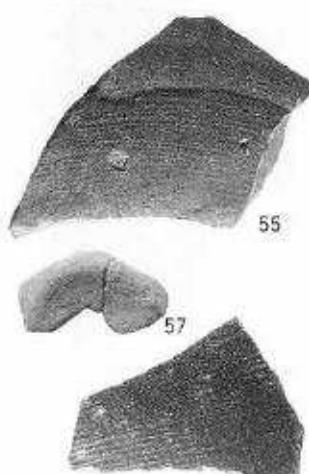


VII層出土土器 (45~53)

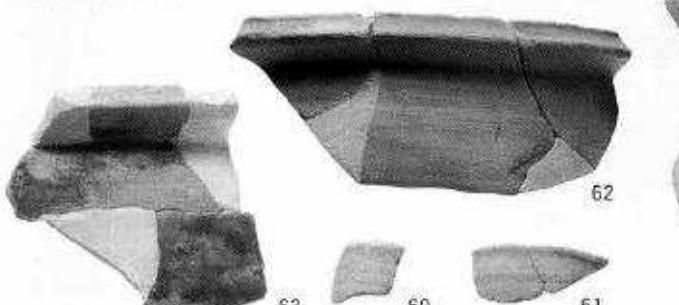


C区

II層 (55~57)

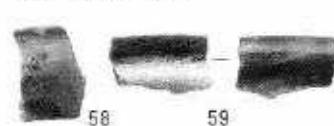


S D14 (60~64)

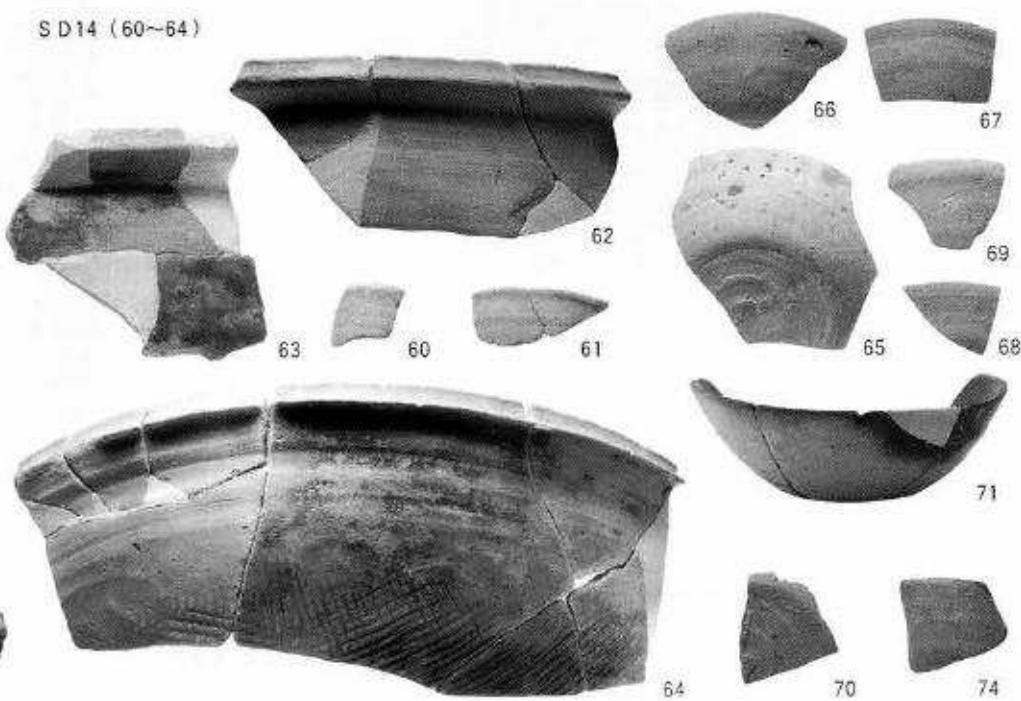


VII・X層 (58~64)

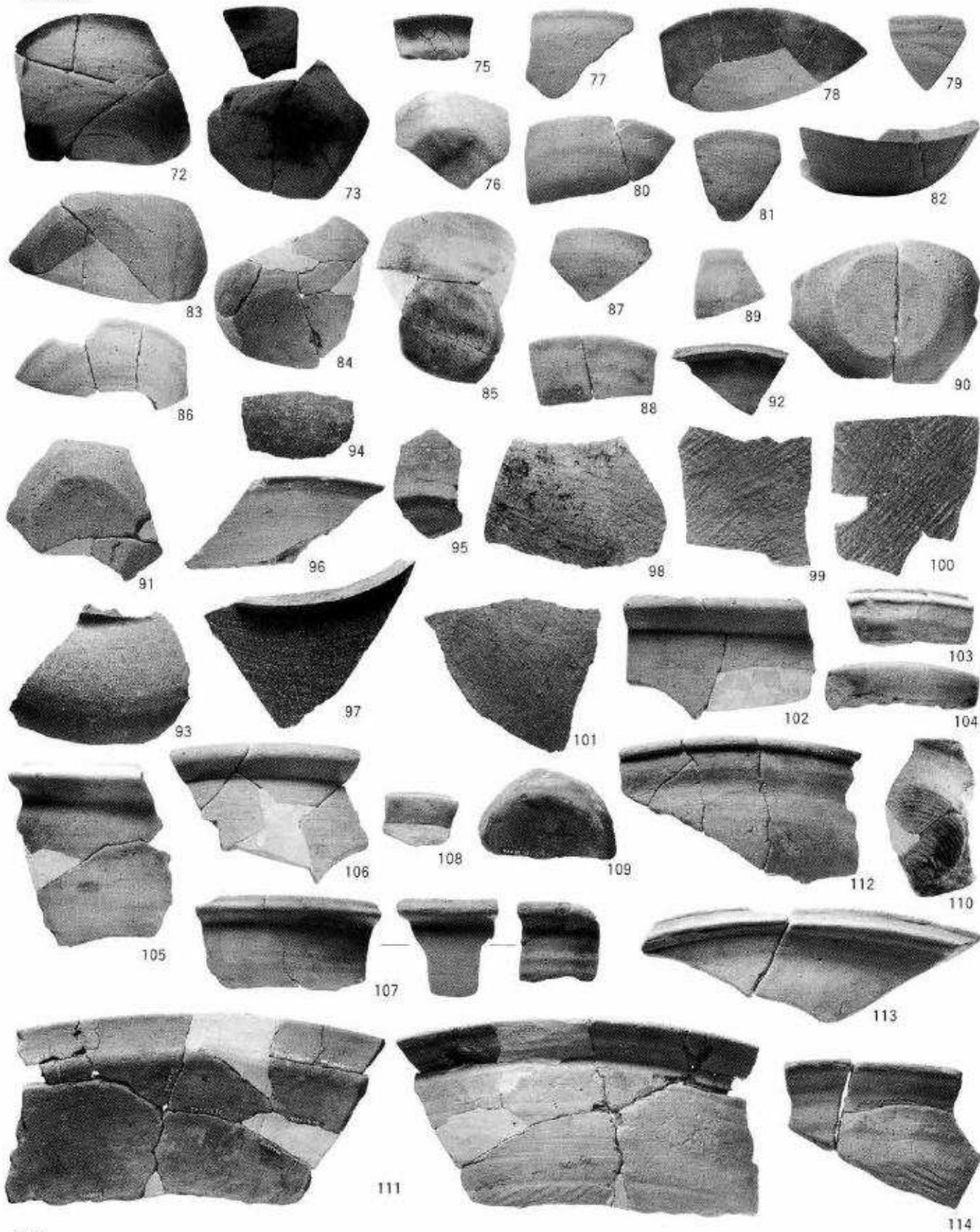
SD15 (58+59)



VII・X層 (65~114)



VII・X層



D区

S E23 (115)



VII・X層 (116~118)



A区 S D11 (第6図P.18)



報告書抄録

| | | | | | | | | |
|--------------|--|------------|------------|-------------------|--------------------|---|-------------------|-------------------------|
| ふりがな | やちえーいせき | | | | | | | |
| 書名 | 谷内A遺跡 | | | | | | | |
| 副書名 | 一般国道116号富永交差点改良関係発掘調査報告書 | | | | | | | |
| 巻次 | | | | | | | | |
| シリーズ名 | 新潟県埋蔵文化財調査報告書 | | | | | | | |
| シリーズ番号 | 第175集 | | | | | | | |
| 編著者名 | 流沢規朗・荒川義史・河崎昭一・島津賢男・清田明子・齊藤準 | | | | | | | |
| 編集機関 | 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団 | | | | | | | |
| 所在地 | 〒956-0845 新潟県新潟市金津93番地1 TEL 0250 (25) 3981 | | | | | | | |
| 発行年月日 | 西暦2007(平成19)年3月9日 | | | | | | | |
| ふりがな 所取遺跡 | ふりがな 所在地 | コード 市町村 | 北緯 遺跡番号 | 東経 ... | 調査期間 | 調査面積 m ² | 調査原因 | |
| 谷内A遺跡 | 新潟県燕市吉田 字谷内内 | 15344 | 72 | 37度 41分 38秒 | 138度 53分 10秒 | 平成16年度 本発掘調査 20040412～20040520 工事立会 20040209～20040210 20040214～20040216 20040223～20040225 20040307～20040310 平成17年度 工事立会 20050527 20050627～20050705 | 555m ² | 国道116号 富永交差点 改良工事 |
| 所取遺跡名 | 種別 | 時期 | 主な遺構 | | | 主な遺物 | 特記事項 | |
| 谷内A遺跡 | 集落跡 | 古代 | 溝・井戸・柱穴 | | | 須恵器・土師器 | | |

新潟県埋蔵文化財調査報告書 第175集
一般国道116号富永交差点改良関係発掘調査報告書
谷内A遺跡

平成19年3月8日印刷 標題・発行 新潟県教育委員会
 平成19年3月9日発行 〒956-8570 新潟市新光町4番地1
 電話 025 (285) 5511
 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
 〒956-0845 新潟市金津93番地1
 電話 0250 (25) 3981
 FAX 0250 (25) 3986

印刷・製本 北越印刷株式会社
 〒940-0034 新潟県長岡市福住1丁目6番27号
 電話 0258 (33) 0306
 FAX 0258 (36) 9712

| | 位置 | 誤 | 正 |
|----|--------|-----------|-----------|
| 抄録 | 市町村コード | 1 5 3 4 4 | 1 5 2 1 3 |
| 抄録 | 遺跡番号 | 7 2 | 1 9 2 |